

補遺への序

身の程も弁えず「自分史」を編纂してから五年が経ちました。この自分史は、私の極く身近な限られた方達に遺す積りで最初は二〇部ほど作ったのですが、その後、かなり広くの方に知られることになり、ご希望に応じながら二部・三部と少しずつ作成して参りましたら、発行部数が既に一二〇部を超えました。拙い文章を多くの方に読んで頂き、感謝しています。

自分史作成の切っ掛けとなった胆管癌の方は手術後六年を経過しました。五年目までは抗がん剤の投与を受けながら定期的な検診を受けていましたが、どうやら再発の危険の時期は過ぎたようで、薬の投与も終わって最近は手術前以上に元気に消光していますので、他事ながらご放念下さい。

この機会に補遺を作って見ることにしました。今回は事情が事情だけに急いで作ったこともあり、掲載漏れのものもあつたのでこれも拾い上げ、新しく書いたものと合わせ

てみたら思ったより分量が増えて二巻になりましたので、ご披露させて頂きます。掲載漏れの一部は第二版に掲載したのもあるものでこの分は重複することになります。

この冊子の元になった月刊同人誌「珊瑚」も平成二十二年四月の五百号を以って形を変えて、三ヶ月毎の発刊にしました。四十三年間、毎月珊瑚に投稿することで付けた書く習慣は今後とも大切にしたいと思っています。何時のことになるか判りませんが、これらを纏めて更に補遺の第三巻も作ってみたいと思っています。

平成二十三年五月

佐世保市ハウステンボス町四 三十六

ハウステンボスヒルズ 一 四〇三

長島 達明

電話 / F A X 〇九五六 五八 七六五〇

携帯電話 〇九〇 三一九六 三三一七

メールアドレス vzd06705@nifty.com

生い立ち編

美貴と達直が誕生した時に珊瑚の仲間に対しご挨拶状を書いた。

美貴誕生のご挨拶

お初に一筆啓上申し上げます。

皆様におかれましては、益々ご健勝にご活躍の趣、慶賀至極に存じます。

さて、私こと

十ヶ月の窮屈な母体内の生活からヤット開放され、昭和四十年十二月二日午前一時三五分に人間の仲間入りをさせて頂くことになりました。

名前は、祖母が懸命に頭を絞ってくれた、とのことで少々貴と過ぎるのですが、「美貴」と申します。何卒、父母同様よろしくお引き立て下さいますよう、お願い申し上げます。

ます。

私の生れた時のグラマー振りをご紹介申し上げますと、体重三二六〇グラム、身長五二センチと割りと大柄で、チビさんの母親が、大きなお腹で苦しかったのも無理ないわ、とこぼしておりました。

只今のところ、ミルクを飲むこと、寝ること、泣くことを商売とし、せいぜい職務に励んでおります。慣れぬ手つきで手を持ちたり、足に触ったり、恐々抱き上げたりしてくれる新米の両親の顔を見るのが面白く、殊更に声を張り上げて泣くのを楽しみにしています。

父親などは、私の顔を見て、人間とは思えない、等と失礼なことを申しておりますが、やはり人さま同様、親ばかの片鱗をのぞかせ、背が高いこと、体重が平均より重かったこと、口の形が良いことなど、内心では自慢に思っているようです。私の生れるついでヶ月前、義弟の岡崎家に、千恵さんという先輩の従姉妹が生れており、どうも親同士が相当対抗意識を燃やしているようで、何かと比較の対象にされそうです。迷惑な話では

ございますが、これまでも散々心配をかけ、これからも厄介になる両親の面子もありません。しょうから、せいぜいライバル意識を燃やして良い子になる積りです。

胎内で聞いておりますと、私の両親は非常に良い友人を沢山持っているようで、幸せそうでございますが、私も良い子になって皆さまに可愛がられたく思っております。今年にはベビー・ブームとやらで、皆さまのお宅でも私のライバルが沢山お生まれになったとのことですが、先輩の　　さまには何卒よろしくご指導の程をお願い申し上げます。

伺いますと、私の生れる二日ほど前に天皇の第二皇子がご誕生になったとか。私は二五日年下になる訳で、皇子夫人の候補者の資格はあるわけですが、まあ、そのような事は親ばかりの空想に任せることに致しまして、私としましては、ひと言「二〇年後にご期待下さい」と申し上げることに致します。その節は又何かとよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、皆さまから結構なお祝いを頂戴したとのことで、どうもありがたう存じました。一々拝眉の上、ご挨拶申し上げますが、今

の私にはシャバの風は冷たく、空気は汚な過ぎることと、外に出る訳には行かぬら
しうございますので、取り敢えず書面にてご挨拶申し上げます。正月を過ぎましたら、
高円寺の自宅に戻る予定にしておりますので、その節は是非一度お越し下されたく、お
目にかかる日を楽しみにしております。

何分にも生れたばかりで、手が小さく、ペンが持てないものでございますから、ご挨拶を父に代筆させましたら、リコピー等で挨拶状を配ることと、誠に不躰な話で、
近頃の若い者には困ってしまいますが、父の多忙に免じ、失礼の段、お許し下さいませ。

かしこ

昭和四十年十二月

長島美貴

長島達直

一筆ご挨拶申し上げます。私の名は長島 達直（たつなお）。昭和四十二年十月二日
夕方、世田谷区の菊池病院なるところで、長島達明と喜美子の長男として生を受けたも

のです。生れたときは体重二七五〇グラムと大変なチビで、一週間後に退院するときは一五五〇グラムと、ガラス箱入りさせられる寸前、と言う有様で、父・母が、いずれも自分達がチビだからやはり小さいのだろうか、と心配していましたが、駒沢の我が家に戻ってからは、すっかり自己のペースで毎日どっさりミルクを飲むので、一ヶ月目には四五四〇グラムと人並みになり、五〇日目の今日は五二五〇グラムとハイピッチの体重増加振り。最初の細面の美男子の面影はどこへやら。今はアンコ型の相撲取りみたいに横にスラリとした太面（ふとおもて）の顔になってしまい、あまり肥っては嫁に来手がなくなるだろうし、最近は人工栄養による肥満児等という全く冴えない人種も流行っているのです、そうはならぬよう注意して貰いたいものです。実際、親というものは大きくさえなれば喜んでくれるけど、大きいのが故に尊からず、問題は内容ですよな。

父は生れるまでは、女でも男でも良い、などと言っていました。上が女だったので、やはり男でホツとしたらしく嬉しそうです。もっとも生れる前から男の名前ばかり熱心に考えていましたから、何となく判っていたのかも知れません。名前といえば、野末陳

平の姓名判断など怪しげな本を持ち込む人もあって、相当もめたことでしたが、最終的には父が張り切つて、素直に真つ直ぐ育つことを祈つてつけてくれたものです。後で勉強してみたら、最近父が凝っている明治維新の、それも一番お気に入りの英雄、坂本竜馬の本名が直柔（なおなり）なので喜んでいました。

今のところ、まだ三時間から四時間おきの食事でも手もかかるので、姉の美貴がヤキモチを焼いて時々引っぱいたり、引つかいたりして可愛がつてくれます。父はもうスツカリあなたまかせで、風呂に入れてくれるくらいですが、母親というものはありがたいもので、母親の本能とでも言うのでしょうか、本当に何から何まで、実際身体が強くなくては勤まらない商売だと感心します。でも、正直言つて、どうも二番目というのは分が悪いようです。最初の赤ん坊は両親とも慣れませんが、一寸泣いても心配してすぐに抱き上げたりしてくれるものですが、二番目ともなると、盛んに泣いてアピールしても平気で放つて置かれるケースが多く、待遇が違います。仲間内では二番目としては私が最初なので、これから生れてくる後輩のためにも待遇改善に努力しているところです

が、手の回らぬこともあり、どうも仕方がないようです。

ともかく今後とも父、母、姉同様よろしくお引き立てのほどをお願い申し上げます。
末筆ながら、「物を書く場」を作り、私の初めてのご挨拶を、その第一集でさせて頂く機会を与えて下さった山本さんに厚くお礼申し上げます。

昭和四十二年十一月二十二日

長島達直

自分の城実現

大分前に「自分の城」と言う題で家のことを書いたことがある。その頃から漠然と自分の家を持ちたい、鶏小屋みたいなお仕着せの社宅は抜け出したい、と考えていた。三菱重工業の社宅制度は東京在住のものに限りかなり恵まれていると言える。本社に勤めている人達は別に好き好んで東京に住んでいる訳ではない。昔は、長崎なり神戸なり名古屋なりの工場が会社社の中心で、出先の本社には工場の地元を離れて東京住まいを強いられる人が多かったので、東京では社宅をシッカリさせて業務に支障を来たさないよう

にしたのがソモソモ社宅の始まりと言うことらしい。結婚して直ぐ、と言う訳には行かないが、一年ぐらい我慢すると安い社宅費で二DK位のアパートには入居出来る。別に社宅に定年制的なものはなく、課長になるまで我慢していれば課長社宅、幹部社宅が用意されている。こうなると中々立派なものである。反面、持ち家対策、即ち住宅貸金の制度や住宅手当と言ったものはお粗末である。工場が全国に散らばっているので、田舎にある工場に勤めている人は今の貸金制度でも、その気になれば何とかなるのだが、今の東京の土地、住宅事情では如何ともし難い。無理に社宅を出ても通勤は不便になる、毎月高い月賦を支払わねばならないのに住宅手当はない、とすれば社宅にジツとしているのが一番良い。転勤と言う阻害要因もある。何時何処へやられるか判らない。家を作った人ほど転勤が多いと言うジंकクスすら聞く。

と言うことで、殆どの人が社宅にいる。今小生が住んでいる駒沢の社宅は大小合わせて一八〇世帯位住んでいる鉄筋三階建ての鶏小屋の大部落である。課長社宅と言うのは大分マシなので、皆そこまで我慢する積りなのだろうか。でも、課長なんてなれても四

十才を大分過ぎてからのこと。それまでには子供も大きくなるし、学校へ行く子供を二人も三人も抱えて二DK暮らしなんてゾツとする。

組合にいる間、本社の組合員からの要望で住宅貸金制度に地域格差をつけてくれるよう大分主張してみたが、この辺が組合の嫌なところで悪平等の精神がある。地方に住む人はこれでやって行ける、本社の少人数だけ良い目に遭わせることはない、と言うことで組合の要求として取り上げて貰うことは出来なかった。

でも、何としてももう二部屋位欲しかった。自分の書斎は夢だからまだ良いが、子供部屋くらい作ってやらないと机やピアノを置くスペースすらない。環境が全てではないが、子供に教育の環境を与えるのは親の義務ではないだろうか。最初はマンションでも良いと思った。これからの住宅と言うのは土地付よりもマンションが一般化して来ると思う。そしてそれが流通性を持ち、換金も簡単に出来て家族構成の変化に伴って買い替えも楽になって来るのではないだろうか。何はともあれ金を貯めねば、と積み立てを開始したのがヤツと三年前のこと。最初の一年目は五千元、二年目は一万円、三年目は二

万円と段々に増やして行つた。貯めることも大事だが借金を月賦で返済して行くための助走の意味が大きい。これで次の昇給が来れば、月々三万円位の積み立てかローンの返済が出来る目処が付いた。

そこへワイフの病気のゴタゴタである。一時は計画も挫折しかけたが、積み立てだけは続けて来た。有難いものでワイフの治療費の方は手伝つてくれる人が大勢いて、懐には左程響かずに済んだ。ここへ来て一段落したが、不自由な身体では階段のあるアパートやマンションでは足許が危なっかしくて、一人では外にも出られない。狭くても庭があればリハビリにもなるだろう。ということとで奮起一番、土地付一戸建てを狙うことにした。それと来春は美貴が小学校に、達直が幼稚園に入る。自分自身、小学校を何度か変わつてその都度淋しくて辛い思いをしたので、子供には出来ればこの辛さを味わわせたくない。一つのチャンスとして来春の転居を目標に真剣に探してみる決心をしたのが今年も五月ごろか。

ずい分歩き回つた。チラシ広告は避けた方が良くと言つので、もつぱら新聞広告。資

料請求券というのを片っ端から送ってパンフレットを取り寄せる。日曜日、空いている日はチビ連れや一人で車を出してドライブがてら西に東に走り回った。最近はいよいよムマップと称する便利なものがある。それだけ家を探している人が多いと言ったことか。埼玉の越谷方面、千葉の松戸、八千代台、横浜の希望が丘、鶴ヶ峰など。見ている内に土地の相場が判って来る。埼玉・千葉方面と湘南方面とを比較すると、交通の便は同じでも湘南の方が地価が大分高いことも知った。色んな人に理由を聞いてみるが、どうやら土地の格、と言っひと言に尽きるらしい。氣候がどうか言ってみても大して変わるわけではないし、住民の質がどうだと言ってみても、いずれにしても最近では、首都周辺の住民は地元の人より都市勤めのサラリーマン連中の方が多くなって来ている筈。

土地を買って自分の好きな家を建てるのが理想的なのだろうが、時間が掛かるし、第一面倒臭い。建売分譲住宅を見て歩くと狭い面積を出来るだけ有効に使おうと工夫して建てられていて悪くないので、建売分譲一本に絞ることにした。北越谷にミサワホームズでやっている良いのがあったし、会社の紹介で相模鉄道沿線の鶴ヶ峰に手が届きそう

な物件があったりしたが、近くにセメント工場があったり、電車の駅からバス利用だったりしていま一つピンと来ない。

信用の置ける不動産屋がいて、中古を探して来てくれた。早速行って見たが中々良い。場所は小田急線相模大野のひと駅江ノ島寄りの東林間と言つところ。電車に乗っている間は長いが、駅からは一キロで歩いて行けるのが気に入った。土地が五五坪。最近の分譲住宅は買手の懐を考えてのことだろうが、土地が狭い。四〇坪の土地に二〇坪の建物なんてのはザラである。こうなるともう敷地一杯に建物、と言つ感じで庭らしい庭は残らない。六〇坪以上になるとかなりユツタリして来るが五五坪でも我慢できないことはない。平屋の三DKだが木造で建て増しが出来るのも気に入った。プレハブ住宅では建て増しが難しいとのこと。家は四年目でシツカリしている。建てて直ぐのものより少し馴染んで悪いところも出尽くしていかえて良いかも知れない。新品の家に入って雨漏りがしたり、壁にひびが入ったり、立て付けが悪くなったりするより良い。土地がシツカリしていないと家が歪んだりすることもあると言つ。こんなことは素人の目で判定

できるものではない。

値段は九百万円と言う。調べてみるとこの辺は土地の値段が坪十四／五万円すると言う。土地だけで七百万円以上の価値があると言う計算になる。二度ほど見て大体決めることにし、八百七十万円まで下げてもらったが、あとガレージや納屋を作ったり、畳替えや壁の塗り替えをして、手数料を払い、税金を払うと九百万円は越してしまう。

今度は借金の心配である。自分が貯めた分が百五十万円ほど、会社で借りられる分が今年主任と言う資格がついて五十万円増の二百万円。会社経由の銀行ローンが年間収入の一・五倍と言う。出来るだけ多く借りられるよう算段する。この半年間の月収を倍にするのが一番良い。この半年はワイフの治療費の病院への支払いの相当部分が保険料の戻りとして収入に入ってきているので（医師会の武見会長が攻撃しているのはこの辺なのだ）ろうが、受ける方は誠に助かる（思いがけず多額の借金が出来た。何が幸いするか判らない。転んでも只では起きない、と言うことか。これが三百八十万円。残りの二百万円を長崎他に援助を仰ぐ。と言うことで何とか目処が付き、十一月一日に相手方と契

約調印。第一回払い百五十万円を支払った。来年二月末までに明け渡して貰い、こちらは美貴の幼稚園が終わるのを待つて転宅と言うことになると思う。一生に何度もない買い物も割りとスナナリ行つた。調べは充分にした積りだが、とんでもない落とし穴があるのではないか、一寸心配。とにかく買った家が担保なので、火災保険証を会社に預ける。借金分生命保険に入れられる。まるで生命が担保である。会社に十八年、銀行に十五年の借金返済。月々三万円一寸の返済は予定通りだが、肩がズツシリと重い。最初の何年かは辛いだろつが、段々に楽になつて行くものと期待している。

と言つわけでこのところ小学校と幼稚園の心配をしている。両方とも近い。個人病院もすぐだし、総合病院も近くにあるので、この方の心配はない。小学校は義務教育だから心配はないと思つていたが、学区とか言つものがあつて一寸ゴタゴタしている。幼稚園は厄介である。遠いところ朝早くから申し込みに出掛けたり、試験だと言つて会社を休んで面接に行つたり。入園はハッキリした。

考えて見ると小田急線にはずい分縁がある。戦前、家が戦災で焼けるまでは新宿から

二つ目、今の南新宿と参宮橋の間にあつた山谷駅の近くに住んでいた。下北沢に祖母と叔父がいたが、時々遊びに行くと、子供心にずい分遠いところだと思つた記憶がある。ところが会社に入つたら独身寮が成城学園で、これは新宿から下北沢の倍ぐらいのところ。そしてこんどはその倍以上の東林間。新宿まで四〇分はタツプリ掛かる。玄関から会社まで一時間半はかかるだろう。その内に代々木上原から地下鉄が乗り入れになると言つ。そうすると大分楽になると思う。いずれにしてもご苦労な話である。

(昭和四十六年十一月二十三日)

法事大作戦

本稿は長島ファミリー兄弟の結束の強さをご紹介する良い題材だと思つて掲載することにしましたが、この二カ月後に妹の慶が急逝しました。「今年は法事の年だ」なんて軽々に口にするものではないことを思い

知らされました。

平成九年は長島家にとって法事の年になりました。先妻と父が亡くなったのが昭和五十六年で今年が十七回忌、祖母と母が亡くなったのが昭和六十年で今年が十三回忌に当たります。命日は四月から十二月までバラバラですが、ここまで来たら一緒にしても良いだろう、と合同法事のアイデアが出来たのは昨年五月のことでした。私と二人の妹は長崎にいますが、二人の弟は北海道と東京勤め。北海道にいる弟が出張して来た機会を捉えて、第一回の打ち合わせをやり、皆が集まる平成九年正月の三日にしよう、と云うことを決めました。この時の打ち合わせは仲々のもので、当日の次第は勿論、手順のスケジュールから担当者までキッチリ決めて、議事録まで作りました。

まず、お坊さんとのネゴから始まります。正月の三日に法事をやるなんて、言わば非常識な話。お寺さん仲間でも、どうやら、正月の法事は遠慮しよう、と云う自主規制みたいなものがある様子でしたが、そこは何とか拝み倒して、内々にやろう、と云うこと

にして、お寺での集まりにしないで、自宅でお経を上げて頂くことで話がつきました。お布施の金額の決定。ピン札手配の担当、お布施の袋の準備担当まで決めることにしたのは、これはもうお遊び。

これだけ時間が経っているのに、兄弟姉妹だけで集れば良いのではないかと、との声もありましたが、近い親族や父や母の本当に親しかった友人には声を掛けよう、と云うことになりました。ご案内先の選定、打診のタイミングから打診の担当責任者、正式ご案内の段取りまで決めました。打診は夏頃からボチボチ始めよう。正式のご案内は十一月頃で良いだろう。

お正月となると直会の場所も限られます。もう精進料理でもないだろうと云うことで、中華料理に決定。予約担当者も決まりました。二次会責任者の決定。半年前には、経費負担で試食に出かける騒ぎです。お正月早々、料理屋でお線香を焚くわけには行きませぬ。お位牌と写真を飾って、白い花で献花をすることにし、花調達の担当が出来ました。

お返し相談。これは自家製のアップルパイに決めました。私達の子供の頃の記憶を

辿ってみると、どうしてもアップルパイに行き着くのです。戦後、ものない不自由な頃でも、母は何とか工夫して、子供達に夢を与える努力をしてくれました。友達を家に連れて来たり、家で何かのパーティーをやる時なんかは、お手製でアップルパイを作ってくれたものでした。当時は、ケーキなんてお目に掛かれなかったのかも知れないし、そんなケーキなんか買う余裕もなかったと言うことだったのかも知れませんが、貧しいパーティーでも、白いクロス（当時はシートで代用していたのかも知れませんが）の真ん中にケーキが現れて、皆で切り分けると言うのは夢の一つでしたから、母も夢の実現のために工夫をしてくれたのだと思います。リンゴを煮てジャムを作り、メリケン粉を練って伸ばしてパイの皮を作ります。押し棒を使って、何度も何度も折り重ねて、バターを挟んで伸してパイの皮を作ったり、短冊に切った皮を編んで上部構造を作る手伝いくらいはやらせて貰ったものです。甘いものに飢えていた時代だったし、こんなハイカラなものには仲々お目に掛かれなかったので、友達には大層人気がありました。もっとも、アップルパイなんて洒落たものが出来るようになったのは、暮らしが少しマシになった頃

のことです。砂糖もメリケン粉も手に入らなかった頃でも、母は何か工夫してくれました。お客が好きなのは祖母譲りで、来てくれたお客さまはおもてなしをせねばならない、喜んで帰って頂こう、と言う意識が強かったと言つことなのでしょう。薩摩芋を薄くスライスして干して、これを石臼で挽いて粉にします。どう言つ訳か、ケーキを焼く型があつて、これで丸い形をした台が出来ると、これに粉ミルクかなんかで片栗粉を溶いて懸けると、何となくケーキみたいなもの出来ます。黒くてゴツゴツしていてケーキには程遠いけれど、一寸した甘味が味わえて、甘味に飢えていた当時の子供達はこれでも大喜びでした。そんな母への思い出を込めて、皆で手製のアップルパイを作つて、参列して頂いた方へのお礼としてお持ち帰り頂こう、と言つ訳です。これには妹二人が苦勞したようでした。作り方は覚えているものの、美味しいパイが氾濫している今の時代に、皆さんの口に耐えられるパイをどうして作るか、相当試行錯誤があつたようでした。議論伯仲の末、血を見る寸前まで行つた、なんて大袈裟な話も伝わりました。製作は前日に総出でやつたようです。

五月の会議では、パイの大きさの決定、直径十八センチになるパイを入れる箱の手配、お持ち帰りの際、その箱を入れる底の広い手提げ紙袋の調達の方法まで決めました。パイには紅茶が付き物と言うことで、オランダ王室ご用達のワイス・ゾーネンと言う紅茶を付けることにして、これはハウステンボスの売り上げになりました。

お返しに入れるお礼状の決定。白い花、出来れば少し寂しい感じの鈴蘭の絵葉書の裏にお礼の言葉を書いたものしよう、と言うことになって、北海道の弟の担当になったのですが、適当な絵葉書が見付からなかったので自分で撮ることにして、これも苦労話の一つになりました。季節外れの鈴蘭の調達に始まり、黒いピアノをバックに、霧吹きで感じを出し、タバコの煙でぼかしを作って見事な芸術作品が出来上がりました。一枚の写真を作るのにフィルムを三本使ったとか。お礼のメッセージは、ワープロで綺麗に入りました。

生前、母が自分の自叙伝みたいなものをレターペーパーに書き付けていたことがありました。東京の弟がワープロの練習期に打ったものがあつたので、これをベースに記念

の冊子を作ろうということにしました。父が色んな機会に書いて残したものもあるし、珊瑚を中心に私達を書いたものも一緒にまとめて、「想いでの記事」なるものを作りました。珊瑚に発表したものが中心になります。祖母の部で馬場兄が書いてくれた追悼文を無断掲載させて貰いました。手書きのものはワープロで打ち直し、製本は東京の弟の担当にしました。相談から校正まで、今度は電子メールが活躍しました。

準備は昨年の内に順調に進み、結局出席者は三〇名になりました。忘年会の席で、席順の決定。席札もワープロで綺麗に作られています。

当日は、ご法事自体が夕方なので、まず早朝から法事ゴルフ(?)の余裕がありました。四時からお坊さんに来て頂いて読経とご法話。そのまま街に降りて直会と言う段取りです。ここままだと当家の法事は、法事だか単なる宴会だか判らなくなってしまう傾向にあるので、会の趣向を考えました。施主のご挨拶に続いて和尚さんに献杯の音頭をお願いした後、関係の皆さんから、故人を偲んで思い出を話して頂くことにしました。これが仲々の当たりで好評でした。出席してくれた和尚さんが盛んに感心してくれ、例

のない法事だ、どこかで話をしよう、なんて言っていました。

後は、お決まりの二次会。これは真理くんの担当で、カラオケ・ボックスなるところへ二〇人で繰り込んで、ヤングパワーに圧倒されながらの大騒ぎ。ここまで来ると、これが法事の二次会なの？ と言いたくなるほどの騒ぎでした。出来上がった沢山の写真を見ると、アレ！ 何の集まりだったのかしら、と言いたくなるほどの雰囲気です。それにしても、長島ファミリーのヤングのエネルギーは凄い。次の合同法事は、二十三回忌と二十七回忌が重なる十年後になるのですが、十年後は完全に次の世代がやってくれらるだろう、と言つのが結論でした。

写真の整理から、出席者へのお礼。お供物料を送って下さった皆さまへのお礼とお返しを済ませて、一件落着と言つことになりました。

私達兄弟に掛かると、厳肅なご法事も、こんな具合にお遊び気分になってしまふ、と言つことで恥ずかしながらご披露しました。

(平成九年二月一日)

死生観・人生観編

経験と人生観

もう五／六年前のことになります。ハウステンボスに来て間もなく、ゴルフ場のクラブハウスの計画を立てている頃のこと。担当している設計会社のデザイナーが提案して来る設計が、何度やり直しても、社長の満足するような良いものが中々出て来ない、と言ったことがあります。社長が「あの人は奥さんを亡くした経験がある。ああいう人は心のどこかに暗いところがあつて、明るくて楽しい設計が出来ないんだ。本当に明るい良い設計が出来ないのなら、設計者を変える他はない」と言つたので、酷いことを言う人がいるものだ、と思つたことがあります。流石にその場では特にコメントしませんでした。後で何かの機会を見つけて「私も同じく、連れ合いを亡くした経験を持つているので、根が暗いでしょう」と皮肉混じりに言つたことです。社長は「あなたには、そんなところは見えません」と答えてはくれませんが、それまで私のその辺の事情を知ら

なかつた社長は、シマツタと思つたに違いありません。その後、そのデザイナーとは、どこが社長の気に入らないのか、をジツクリ話し、何度も打ち合わせをして描き直して貰つて、結局、首にならず、その人の設計であのクラブハウスが出来上がりました。

会社に入つて間もない頃、戦争で苦労した先輩がいて、酒を飲むと「自分は戦争で死ぬ目に遭つた。だから何時死んでも良い、と言つ覚悟が出来ているのだ。そういう経験を持つていない人は、腹が据わつていないから良い仕事が出来ない」何てことを当時若かつた我々に向かつて、自慢半分にお説教するのが常でした。当時はまだこんな人が時々いましたね。最近ではもういなくなつたと思いますが・・。私は成る程、とは思いつつも、半分は、卑怯な人だな、と思ひながら話を聞いていた覚えがあります。確かに体験は貴重だけれど、そんな体験を持つていない人には全く反論が出来ないので。そして、そんな異常な経験は持ちたくても持てないので、人が持つていない経験で人を脅して自分の言つことを聞かせようとするなんて、卑怯だな、と思つたのです。このことに限らず、そんな人がいるものですね。

育てられ方でも、人生観と言うか、生き方が変わるものだと思います。部下や周りの人を見ても、良い育てられ方をした子だな、と思う子と、心の貧しい育てられた方をした可愛そうな人だな、と思う人がいます。朝から晩まで、あれをしてはいけません、これをしては駄目、と叱られながら育てられた人は、どこかいじけていて、人の顔色を窺ったり、常に叱られないように身構えて何時も弁解の言葉を用意しているようなところがあります。逆に、褒められて育った子は、甘いところはあるけれど、大らかで、心のどこかに人に喜んで貰おうと言う気持、「人が喜ぶことを以って自分の喜びとする」と言うようなところがあつて、考え方が暖かくて、プラス指向で伸び伸びとしていて、良い育てられ方をしたんだな、と思うのです。この辺は私自身の育てられ方や、部下の育て方と言うか、私の人との接し方を肯定しているのですから、我田引水と言うことにもなりそうです。

ウチの社長のモットーとしている言葉が「万事困難は己の心中にあり」と言う言葉。難しいことも、自分が難しいと思うから出来ないのであつて、出来ると信じれば出来る

のだ、と言う信念です。こうした信念を持っているからこそ、人が真似することの出来ない、ハウステンボスと言うこれだけの事業が出来つつあるのだ、とは思いますが、これは一面で言えば楽観論。ネアカの人でないと思ってない感覚かも知れません。これは社長が自分の経験から学んできた生き様でしょうから、それはそれで立派な考えではありますが、その信念で下を使われるとたまらない。どんなに難しいことでも、出来ないとは言えないのです。出来ないと言えば、それは自分が難しいと思っっているからだ、と言うことになる。上に立つ人にとっては、誠に都合の良いモットーと言うことになります。最近では時々私も利用させて貰っていますから、同罪の部分もありますが。

件のデザイナーのように、連れ合いを亡くした経験を持つ人が、こういう感覚、ある意味での楽観論を持つことが出来ないのは本当なのかも知れませんが。連れ合いが病気になる時は、何とかして直してやろう、と、それこそ死に物狂いで努力をしたに違いありません。その努力が実らなかつた時、世の中にはどんなに努力しても出来ないことがある、と言う人生観が生まれ、それがその人のその後の人生に影響を及ぼすことがある

のではないでしょうか。万事困難は己の心中にあり、なんてことを信じられる人は、過去にそう言った強烈な挫折の経験を持ったことのない人で、むしろ幸せな人なのかも知れませんが、昔、故岡崎が「この年に至るまで、私は努力して報いられなかったことは、一度もない。能力の違いによる報われ方の早い、遅いは確かにあった。しかし、必ず報われてきた」と書いたことがあります。必ず報いられる、と信じないと努力なんて出来るものではありませんが、これが実際に報いられる人と言うのは幸せな人だと思つのです。私は彼の追悼文に「常に前向き姿勢を崩さなかった。挫折と言つことを知らない男だったのではなからうか」と書きました。その時は左程の意味を込めた積りはなかったのですが、今になって考えて見ると、自分の努力が常に報いられる、と信じる事が出来た岡崎と言う奴は幸せな男だったのだな、と思つのです。

人には色々な人生観があります。生まれつき持っている性格に由来するものも多いかと思いますが、人生を生きて来て、その人生から得た体験と言つか経験から出来て来る人生観の部分はかなり大きいと思つのです。今回の阪神大震災で人生観が変わつた、と

言う人が大勢います。普通では経験出来ないような、これだけ強烈な体験をされた方の
その後の人生観が変わることは当然ありうることだと思えます。そういう見方をすると、
人と付き合う時にその人の過去を調べておくと言うのは大切なことなのかも知れませ
ん。

何故、こんなことを書く気になったのだろうか。こちらへ来てから、全く新しい分野
の中で、あれをやってくれ、これをやれ、と訳の分からぬことへの挑戦が続いていま
す。ゴルフ場の建設に始まって、オランダでの会社作りと資材の輸入、帰ったら売店の
立ち上げ、商品開発と小売店の経営、そして今度は集客の仕事。一つが落ち着きかか
ると、また新しい課題を与えられる。正にこれでもか、これでもかと言う感じです。エコ
ロジーとエコノミーが共存する理想的な未来の街を作って、これを一つの企業が経営し
よう、と言う、この事業と言うか、世界で初めてと思われる壮大な実験、は成功させた
と思うから、一生懸命にやろうとする。何でも一生懸命にやろうとする、骨惜しみは
したくない、自分がやる以上、手抜きはしたくないと思うのは自分の性格でもあります

から、自分で自分の首を絞めている、自業自得の面もあるのですけど・・・。

いずれにしても、何時まで経っても賽の河原で楽にならず、常に全力疾走の努力を求められる、と言うより、やらねばならぬ立場に置かれている。自分で意識している訳ではありませんが、こんな仕事のやり方に若干疲れを感じ始めているのかも知れません。年のせいもあるかも知れないけれど、つまるところは一種の泣き言ですかね。

(平成七年四月一日)

Q・O・L(その一)

人間は何のために生きているのだろうか。普通の人なら五〇年も前の思春期の頃に考えていたようなことを今頃になって考え直しています。私は若い頃、この種の問題についてあまり突き詰めて考え悩まなかったような気がするので、今頃になって考えているのだろうか。

生物は動物でも植物でも自分の子孫を残すこと、即ち種の保存、が第一義の筈です。

子孫を残す義務を果し終えたらすぐに死んでしまう動植物もあります。人間の場合も極限まで行けばそういうことになりましようが、今の社会では、特に昨今の日本の場合は、幸いにしてその段階は過ぎていて、と言えるでしょう。そんな状況の中で何のために生きていくのか、ということを考えて、やはり、世の中の役に立つために生きていく、ということになるのではないだろうか。

この場でも度々ご披露しているように、私はもつずい分前から、自分が世の中の役に立たなくなったら、すぐにも消えたい、と考えて来ました。明治維新の頃、世の中がその人が必要とした時だけ生きて、その役目を終えたら消えて行った坂本竜馬や高杉晋作のような英雄の生き方に憧れます。世の中の役に立つ、と言うのは、別に会社で働くことではないし、もっと大きく世の中に貢献するということでも良いのです。ボランティアでも何でも、あなたがいてくれて助かる、あなたがいてくれて良かった、と言われるような存在でありたい。会社の仕事を退いてから、このところ暫く、長年何もやらなかった罪滅ぼしの積りで、小学校・中学校・高等学校の同窓会の世話に力を入れ

ていましたが、これは多くの人に喜ばれて良いことをしたと思っています。

これとは逆に人生は楽しむものだ、何て生き方もあるようです。イタリアやギリシャを中心に地中海地方の人たちにはこういう考えの人が多いいみたい。自分が楽しければ良いではないか、という生き方でしょうが、私にはどうにもピンと来ない。確かに他人に迷惑を掛けなければ、自分が楽しければ良い、という生き方も認められるでしょうが、それで良いのだろうか。私が、金を動かすことによる金儲けのための金儲け、をしている連中に嫌悪感を抱くのも、基本的にはこの辺に原点があるような気がします。世の中を騒がせて、結果的には自分は金儲けをするけれども、それが世の中のためになっっているのだろうか、世の中の人々を豊かにしているのだろうか。世の中のために仕事をすること、結果として金儲けになる、と言うのが私の理想とする生き方です。

眼が不自由になったり、四肢が不自由になっても力強く生きている人がいる。それでも前向きに生きて、人々に勇気を与えている人たちを見ると、心から感心します。自分にはとても出来そうにない生き方なのです。病気になるった時に一番大切なのは、生きよ

うとする気力だ、と言われます。私なんか、病気になったら、その気力に欠けるわけですから、一番弱いのかも知れません。病院で生命維持装置の管に繋がれたスパゲティ症候群で生きているだけなんて存在には絶対になりたくない。考えたくもない、と思っていきます。尊厳死協会に加盟したのは、そんな状態で生きて避けるためでした。

ボケとか、身体が不自由になって、人の世話にならないと生きて行けない状態で生きているなんて、考えただけでもゾツとします。こんな状態になったら、自分で自分を始末したい、とすら思っています。こんな時には、自分の意思で自分を始末する自由は認められても良いのではないか、とすら思いますけどどうだろう。

会社の仕事を辞めてからも何か世の中の役に立てることがあればやりたい、とは思っていましたが、今に至っても適当なものがありません。これまで、置かれた立場、与えられた立場で自分なりに一生懸命やって来たという自負があるので、もう良いのではないかな、という気持が強くて、あまり積極的に求めて来なかったせいもあるのでしょうか。これまで四〇年以上一生懸命働いてきたから、仕事をしなくなって、世の中の役に立つ

機会が少なくなっても、暫くの間はご褒美として好きなことをさせて頂く。それも暫くの間で良いのであって、あまり長いこと好きなことをやっていては傍迷惑。世の中の役に立たなくなつて生きていても、息はするからCO₂は排出するし、車だつて使つし、第一、食つて排泄して世の中を汚す。それだけでも無駄ではないのか。七十五歳位までに自然と消えて行けたら良いな、と思つています。

そんなことを言つていても、人間の生死は自分では選ぶことが出来ないのですから、何時まで経つても醜く生きている、なんてことになるかも知れないけれど、理想的には高いQ・O・Lを維持している間に消えることが出来たら良いな、と思つています。

先日、主治医に勧められて頭部のMRIを撮つたり、胃カメラを飲んだ時、この問題を主治医と話す機会がありました。この人は私より二〇才ぐらい若いけれど、良く勉強する優秀な医者なのです。循環器系が専門ですが、内科の専門医の資格を持っています。私が身体の臓器のことを比較的良く知つているし、病氣のことにも割り興味を持って理解を示すので、話し甲斐があるらしく、色々な専門的なことを話してくれます。一ヶ

月に一度、血圧と痛風の薬を貰いに定期検診みたいな形で会いに行くのですが、検診よりもこんな話をしている時間の方が多いのです。ミュージカルが好きで話が合います。学会なんか引つ掛けて上京して、ミュージカルを観て来て、行って来ましたよ、なんてことになって感想を話し合うこともあります。順番を待っている他の患者さん達にとっては迷惑な話です。先日はどこかの医学書から引つ張り出した英文の論文の切抜きを取っておいてくれて、読んでみてくれ、なんて言われて閉口しました。辞書を片手に挑戦してみました。医学専門用語の羅列で、全く歯が立たず、次の機会に降参しました。

この医者に私の希望を話し、「仮にガンが発見されても、無理に取らなくても良い。自然に任せたい。ただ、苦しむのはイヤだから、症状を押さえる程度の治療をして貰えば良い。若し何かコトがあったら、覚えておいてくれ」と言ったら、「Q・O・Lが維持できる状態ですね」と言います。病気の元を断つために手術をして、一旦は生命維持装置を付けることになっても、その後Q・O・Lを取り戻した人もいます。と言つのです。

Q・O・Lとは「生存知のよみ」、Quality of Lifeのよみ。人間として生きて行く価値の

ある状態、とでも言えば良いのでしょうか。でも、「私のQ・O・Lはウンと高いところにあるのだから、承知しておいてくれ」と重ねて頼んでおきました。

(初稿平成十七年一月)

(平成十七年十一月七日)

いきなり「ガンです」なんて、宣告されても困るなア

この度は、突然のことで皆様には大変お騒がせしてご心配をおかけし、ご迷惑もおかけしました。元氣印の私が突然こんなことになり、驚かれたと思いますが、一番驚いているのは当の本人なのです。

発端はゴールデンウイーク前の夜中の鳩尾辺りの痛みでした。二月ごろ同じ種類の痛みがあつて、主治医に「胆石かもしれないが、少し様子を見ましょう」と言われていたので、朝まで我慢して、連休の中休みの四月三十日、主治医のところへ飛び込みました。顔見知りの看護婦に採血して貰い、尿を検査して貰ったら、優先して診てくれたのでしよう、先生が待合室の大勢の外来患者をかき分けて飛んで来てくれ、肝臓の諸数値、黄

疸の数値が異常値とのことで、即入院を勧められたのでした。

私が尊敬している方が理事長をしていた佐世保中央病院に丁度、主治医の先生と大学の同期の優秀な外科部長がいるというので、紹介状を書いて貰い、土曜日なので、取るものも取敢えずそのまま中央病院に直行し、入院しました。

最初は、胆石か胆嚢炎とのことで、胆嚢を取るようになっても内視鏡でやるので、四五日の入院で済むでしょう、とのことでした。五月中旬に外せない予定がある、と言ったら、それが終わってからにしましょうか、なんて気楽な話だったので。

ところが検査が進むにつれて、それ程簡単なことではないことが判つて来たようです。胆管の肝臓に近い部分に何かが詰まっていて、胆汁が流れていない、と言います。いずれにしても開けてみないと判らないと言つたことで、手術は覚悟したものの、黄疸が酷くて手術できる態勢になく、検査をしながら黄疸の治まりを待つ期間が一ヶ月続きました。それにしても、最近のインフォームド・コンセントの徹底振りには驚かされました。

私は最初から何があっても告知を希望していましたので、検査の結果から病気の見通し、

手術の方法ぐらいまではボチボチ聞いていたのですが、手術の直前に先生が、家族にも説明したい、と言うのです。家内と神戸から息子、相模原から娘と孫、それに長崎在住の弟夫妻と一緒に話を聞いたのですが、病気の内容から手術の方法まで、ボードや写真を使って、実に詳しく説明するのです。病院側としても、万が一のことを考えて説明しておく義務があるのでしょう。あまりにエゲツなくやるものですから、美貴なんか途中で脳貧血を起こして倒れるほどでした。それでも孫の方は、ママがリタイアしても熱心に聞く姿勢を示していました。相模原に帰ってから、子供大辞典とやらをめぐりながら、タンジユウって言うていたよね、なんて聞くんですって。五才の子供なんて、何を聞いていて、どこまで判っているのやら・・・。

執刀医を選ぶに当たっても、患者の意向を大切にしていました。この部位は、すい・胆・肝部といって、かなり専門分野であるらしく、何でも名古屋に日本一の名医がいるので、紹介しても良いですよ、とか、長崎大学に肝臓を切らせたら当代随一という若い先生がいるから、ご希望があればそちらに頼んでも良いですよ、なんて聞いてくれるの

です。私は馬場兄がこの中央病院には、この部位専門の優秀な外科医が二人はいる、という情報をくれていたのと、私が常々考えているQ・O・Lに対する考え方が、この外科部長とピッタリ合うので、「是非ここでお世話になりたい」とハッキリ申し出をしました。外科部長も感激した様子で、「光栄です」なんて言っていました。結局、この部長の友人でもある件の長崎大学の名人外科医に来て貰って執刀して貰うことになり、万全の体制で臨んで貰うことになって、安心してお任せ、の心境に至りました。

六月七日手術。結局、総胆管に出来たガンで、手術は六時間の予定が十一時間と言う長時間になり、胆嚢と胆管とを全摘、肝臓の一部を抉り取る、という大手術だったようです。

手術の途中でトンだハップニングがありました。麻酔が一時切れたのです。目を開けると腹部に激痛があり、先生が手術台の右側に立っているのが見えて、「麻酔が切れるのが遅くなるから、奥さんに伝えておくように」と指示している声が聞こえました。「痛い！」と言いたいんだけど、全身麻酔ですから、口から人工呼吸器が入っていて声は出

せないし、手も縛り付けられているし、意思の疎通の方法がなく、目をパチパチさせる程度でしたが、すぐまた何も判らなくなりました。先生方も気が付かなかつたらしく、後で話したら驚いていましたが、最初の予定の六時間後に麻酔が切れるように設定してあったので、丁度その時間だったようです。

手術後は、肝不全との戦い、感染症の熱との戦い、それと手術中の麻酔による後遺症の治療が続きましたが、それも治まり、手術後三週間で流動食が口に出来るようになりました。三週間も口を通して食べていないと、胃がスツカリ怠け者になっていて、最初の小さなコップ三杯の流動食が食べ切れず、情けない思いをしました。医者連中や看護師たちが代わる代わる寄ってくれて「最初は食べられなくても、直ぐに食べられるようになりますから、焦らないように」と言ってくれたのは、これでガツクリして元気をなくす患者が多いんじゃないかな、と思いました。その内に段々に食べられるようになり、食事の制限も減って来たら、目に見えて元気になり、口から食べることの大切さを身に沁みて感じました。手術前にお腹に入っていた管が二本、手術後はこれが六本になりま

したが、一本ずつ抜けて行きました。退院日が決まる頃になってから熱が続いたりして、退院の予定が三度ほど変わりましたが、やっと九十六日目の八月三日に退院しました。退院日が決まると熱を出すので、何だか遠足の前の日になると熱を出す子供みたいだね、と笑っていました。入院時の体重七十二キロが退院時には五十九キロまで減ってしまつて、少々心細いので、もう少し体重を増やさねば、なんて、これまで考えたこともなかったことを考えています。

病院でも熱さえなければ元気なので、廊下を歩いたり、階段の上り下りをしたりしていたので退院後も割りりと楽で、朝夕の涼しいときに散歩して体力の回復に努めています。車の運転も再開しました。暑さも覚悟していた程ではなく、ユツクリ養生しておりますので他事ながらご放念下さい。

それにしても、前日まで何の前触れもなく、大元氣だったのに、入院したらいきなりのガン宣告に驚かされました。五月の中旬に小学校卒業五十五周年を記念して「これからもお元氣でゴーゴー会」を企画していたのですが、主催者が率先して倒れるなんて

お粗末なことでした。

その後は、再発防止の目的で軽めの抗がん剤を飲みながら、通常の生活に戻り、体力の回復に努めています。

初めての大病をして、命を頂いたな、という気持ちになっています。頂いた命を大切に、残りの人生を有意義に、自分に忠実に（と言う事は、少し我が俤に）過ごして行きたいと考えています。

今後とも、どうぞよろしく願います。

（平成十七年八月十日） 43

Q・O・L（その二）

常々考えていたことではありませんが、Q・O・L（その一）のようなことを書いたら、早速こんな目に遭ってしまった。これは、私の考えていることがあまりに傲慢なので神様のバチが当たった、ということではないのだろうか。あまりにタイミングが良いので、神様が「ソウかい、ソウかい。それでは七十前だけと希望を叶えてやるつか」と言って

いるのではないか、と思ったほどでした。

今回は、総胆管の部分に癌が出来て詰まってしまつて、そこから下に胆汁が流れていない、と言う物理的な障害だったので、Q・O・Lも何もあつたものではない。この塞き止めているものを取つてしまわない限り、ある程度のQ・O・Lを維持しながら限られた時間を生きて行く、なんてことも出来ない状態だつたし、いきなりのごとで七〇前ではやはり少し早いな、と思つたので、手術に踏み切りましたが、この件については更に考える機会がありました。件の内科の主治医には、私の文章を読んで貰つてありましたので、それを今回世話になつた外科部長にも伝えて貰いましたが、主治医とこの外科部長が学生時代から同期の親友と言っただけあつて、私の考えていることがかなり正確に伝わっていました。この件については、手術の前に外科部長ともずい分真剣に話をしたものです。夜になつて診療が終わつた後とか、休日の宿直で時間があるときに部屋に話しに来てくれるのです。家内が病院のどこかで仕入れてきた情報によりますと、元々この外科部長は病院の中でもQ・O・L問題に理解のある人だそつで、この病院の

内外でもこの部門のリーダーを勤めている人だったのだそうです。ですから私の考え方にも理解を示してくれ、最後の頃は「こう言うシツカリした考えを持ってくれている患者さんに当たって自分も安心です」とまで言うてくれました。

Q・O・Lの考え方は欧米の主導で始まったものらしいのですが、これが今や世界中に広がって来ている、と言います。何が何でも病気を治す、と言う考え方から、直る見込みの少ない病気については早めに見切りをつけて、限られた時間でも良いから、出来るだけ長く、ある程度のQ・O・Lを維持した生活をして貰うように持つて行く、と考える考え方に変わりがつある、と言います。最初は出来るだけやってみて、駄目だと判定した時点で、「緩和療法」と呼ぶのだそうです）に切り替える、というやり方だったそうですが、最近の欧米ではある程度の時点から、緩和療法を考慮に入れた治療に切り替えて行くのが常識化しているとのこと。二〇年ほど前に国連のW・H・O(World Health Organization)自体がこの考え方を推奨する決議をしたそうですが、日本の場合はこの考え方が二〇年は遅れていると言っていました。日本の医者には、医者は病気を

治すのが本務なんだ、諦めてはいけない、諦めるのは卑怯だ、と言う考え方が浸透しているのだそうです。途中で諦めることを、医者用語で「撤退」と言うそうですが、こんな言葉を使う辺りにも日本の医者の姿勢が現れているような気がします。

手術後、肝不全で亡くなった、と言う記事を時々目にします。私の場合のように肝臓に手を入れねばならない場合、どこまで切り取るのか、が医者の判断の難しいところになります。昔は、医者としては病気を治すのが本務なんだ、と言う考えが強かったので、病根と一緒に思い切って肝臓の一部を切り取ってしまう。肝臓には再生能力がありますから、手術後さえ乗り切れば、その後の治療で再生させて行けば良いのですが、手術直後、残された肝臓で生命が持つのかどうか、が勝負になります。それには個人差がある訳で、少し大きさに言えば、以前は、手術後肝不全で死ぬのは、医者の責任ではなくて、本人の体力の所為だ」と言う考え方が罷り通っていたのだそうです。肝臓を切り取り過ぎた結果、仮に肝不全で死ななくても肝臓が不完全なものになって、その後の人生に不便を来たし、満足なQ・O・Lが享受出来なくなるかも知れない。件の外科部長に「生

きてはいても寝ているだけ、なんて人生は嫌だから、決して無理はしてくるな」とお願いをしたのでした。手術前日の方針会議で「明日の長島さんの手術は、無理はしないこと」という方針が決定されたことを、別のルートから聞きました。流石に外科部長自身の口からはこんな方針が決まったことは流れて来ませんでしたから。

ですから、最近では肝臓を切る場合は「この人の肝臓はどこまで切っても大丈夫か」という目安を見る肝シンチという検査があります。私の場合は一・四%までは切り取っても大丈夫、という検査結果が出ていることを聞いていました。手術の翌日、朝一番に先生が、ICUに運び込まれている私のところに来てくれて「残念ですが、総胆管に出来た癌でした」と知らせてくれた時、まず「肝臓は何%取ったのですか」と聞いたものです。胆管の内側を這って肝臓の内部にまで進行している癌を追っかけて、胆管と一緒に肝臓を挟り取って行った訳ですが、件の長崎大学の肝臓の権威と相談しながらやった結果、「長島さんの肝臓が肝硬変もなくきれいだったので、八分の一（一二・五%）は切り取りました」とのことでした。胆管を少しずつ切り取って、切り口を顕微鏡で検

査しながらガンの進行具合を調べて行ったのだそうですが、これが中々マイナスにならなくて、最後の二センチほどを切るかどうか、で大分議論をしたそうです。「もう一回だけやって見よう」と、切ることにした結果、その段階で切り口がマイナスになったので、思い切ってやって良かった、と言っていました。肝臓を切らせたら名人と言われる長崎大学の先生を連れて来てくれたのは正解だった、ということになりそうです。「やはり少し無理をしたのではありませんか」なんて生意気なことを言ったのですが、その後の肝不全に対する戦いは凄まじいものがありました。最近では、点滴をするときに、いちいち本人に確認をします。看護婦さんが（最近では看護婦さんとは言わず看護師と言います。男の看護師もいますが、どうもピンと来ません）点滴の瓶を持って来て管に繋ぐ前に「この薬はどういう種類の薬でどういう効果があります。本人の名前が間違っていないか確認してください」と聞いて来るのです。こちらは唯でさえ麻酔で朦朧としている上に、瓶に書いてあるそんな小さな字なんか見えやしない。全てお任せにする他なかったのですが、まあ肝臓関連の薬の多かったこと。三・四日間は一〇本以上の肝臓関

連の点滴の瓶がぶら下がっていました。全身の血が点滴の薬と入れ替わってしまったのではないか、と思うほど。やはり少し無理をしたことを意識して、肝不全で死なせちゃ大変、とまっているんだな、と考えながら痛い思いをしていたことでした。四日目になって、自分でもスツとした感じがあって、これで抜けたな、と言う思いがしたものです。

退院の直前に、先生に「再発したら手術や抗がん剤の投与や放射線療法はしたくありませんから、すぐに緩和療法の方向に進めて下さい。」と言ってあります。一応、心配のないところまで取った、とは言え、身体の中の一部に癌があったということは他にもある可能性を含んでいるし、再発の可能性もあるということ。一種の爆弾を抱えていると言った方が良いのではないだろうか。軽い抗がん剤を飲みながら、数年の単位で毎月定期的に診て貰って行くことになっています。「再発するにしてもいろんなケースがありますから、その時に考えましょう」という常識的な話になっていますが、私の気持ちは伝わっていると思っています。でも、考えてみると、こんな生意気なことを言う私なんかよりも、「べつしても直して下さい」と縋って来る患者に当たる方が、医者とし

ては張り合いもあるし、可愛いのかも知れませぬね。

川口兄への幻の甲辞の中で「自分が世の中に必要とされている時に自分の役目を果たして、役目が済んだら消えて行った君の生涯は、私には羨ましいものにすら思える」と述べたのは、残されたご家族の皆さんには酷に聞こえたかも知れませんが、全くの私の本心だったのです。でも、退院して来て、多くの方たちから「直って復帰出来て本当に良かった」「お帰りなさい」と心から喜んで頂いて、私のことを心配し、思ったださる方がこんなに大勢いてくれるのを知ると、こんな手前勝手の不遜な考えを持つのは自分の勝手であり、我侭と言っことなのだろうか、と言っ気にもなっ、少し考え直さねばならないかな、とも思っっています。

(初稿平成十七年八月)

(平成十七年十二月七日)

Q・O・L(その三)

このところ変なことばかり書いているみたいで申し訳ありませんが、昨年あんな酷い

目に遭つてからの考え方の変遷と言つこととで、もう少し聞いて下さい。この辺で終わりにしますから。

人は何のために生きるのか、の続編。世の中のために生きる、なんて格好の良いことを言いましたが、そうでもない生き方もあるのではないかと、言つことです。こつこつ考えを持ち始めたのは、退院後、回復基調が目に見えてハッキリして来た頃のことでした。食事も美味しい。それも家内が作るものが美味しいというだけではなくて、家内の留守中に自分で作ったインスタントのラーメンですらも美味しく感じられるのです。酒も美味しく飲めるようになった。前よりも美味しく、それも沢山飲めるようになっていきます。少し飲み過ぎたかな、食べ過ぎたかな、と思つても翌朝は何ともないし、朝の散歩もサツと目が覚めて、ソーツと着替えて薄暗い玄関を出ると、ヒンヤリした空気が誠に気持ち良く感じられ、歩くのもリハビリのトレーニングと言つ感じではなくて気持ち良く楽しんで歩いています。緑から黄金色に変わった田圃の稲が刈り取られ、山の木々の葉の色が黄色く、赤く染まってきて誠にきれい。歩いている途中で太陽が山の陰から

顔を出すことが多いのですが、何か神々しいものすら感じます。週に二回を目標に行っているゴルフ場のジムでのトレーニングも、義務感とか無理にはなくて楽しみで出かけている感じです。本当に健康が戻りつつあるんだな、健康とはありがたいものだな、と思いつつあった時に感じるのがあったのです。

月に一度のペースで定期的に検診を受け、まだ、五種類くらいの薬を貰って飲んでいますが、本当に元気になって体力が回復したら、予防のために抗がん剤の投与を始めよう、と言う約束になっていました。毎食後飲む極く軽いもので、副作用も少ないものだから二年間ぐらいは続けてみよう、と言う話でした。いくら軽いもの、と言っても抗がん剤と言えばガンの細胞もやつつけるけど、健康な細胞も一緒に痛めつけるものがあることには違いありません。だから、体力が回復してこれに耐えられるようになってから投与しよう、と言うことになっているでしょう。脳腫瘍の手術の後の放射線治療の副作用に苦しんだ先妻の苦勞は実際に見て来ました。やはり川口くんが経験したような何らかの副作用の障害は出て来るのではないか、と言うことに思い至ったときに、若

しかしたら、抗がん剤の投与を始める前の今の段階が一番Q・O・Lの高い時期ではないか、と思ったのです。

だとしたら、気持ち良く生きられる間に、世の中のため、と言うより自分の好きなように生きるのも一つの貴重な生き方ではないのか。Q・O・Lが維持できている間に好きなことや、やれることをやっておくのも必要なのではないか、と言うことです。昨年、

先日ご紹介した義母の歌集を作った後、同じ手法の手作りで自分史みたいなものを、極く限られた数、作ってみようかな、と考えて、珊瑚に投稿した原稿を中心に纏めにかかっていました。入院してから手術するまで、黄疸が治まるのを待つ間にパソコンに触れることの出来る時間があつたし、生まれて初めての大きな手術の前なので、万一何が起るかわからない、と言う懸念もあつて、この「自分史」作りも加速しました。焦りみたいなものだったのかも知れませんが。手術後の病院でも作業を続け、原稿は出来上がって後は印刷と、糸で綴じる製本の作業が残っている状態です。こうした作業もQ・O・Lが高い状態でないと出来ないことです。

幸い抗がん剤の投与が始まって、さして副作用を感じないでいます。食欲もなくならないし、最初一寸感じたダルさや倦怠感も気のせいだったみたいで、散歩やジム通いも全く苦痛なく気持ち良くやっています。ゴルフ場のジムでの筋トレの真似事の前に、練習場に出てパッティングから始めて軽いアプローチをやり、打ちっ放しの練習場で短いクラブから軽く打ってみるなんてことも始めました。手術後一ヶ月目の九月の上京のときは流石に用心して、予定は昼間だけに作り、休みの日も作って慎重に動いたのですが、十一月の上京時は元気に任せて、何時も通りの激しい予定を組んでしまったものですから、流石に後半はきつかったです。やはり本当に本物の元気になったのではないのかな、と反省しながら帰ったのですが・・。十二月の初めて手術後半年になるので、医者 の許可も得てゴルフに出かけました。半年経ったら再開する、と言っていたのを覚えていたゴルフ仲間がいて、早速お誘いがかかったのですが、その日が生憎物凄く寒い日で、小雪が海からの寒風に舞う中でやっていたら熱と震えと痙攣が出て来て、ハーフまで終われないでリタイアして来ました。十二月中に二度予定がありましたが一、一度目

で懲りて二度目は止しにしました。少し暖かくなつてから再開しようかと思つています。横好きではあるものの下手だつた上に、元々飛ばなかつた距離は完全に二番手から三番手は落ちています。内臓の一部を取つて体重の重心が変わつたのだろうか。身体のバランスがどこか狂つていて、まともに打てず、OBがやたらと多くて、スコアはこれ以上ないと言つほど酷いものでした。

こつして今は元気でいるけど、再発の可能性は常に持つている。いつ何時、あの病院のベッドに括りつけられる生活に戻ることになるかも知れない、と思つと、元氣な間に出来ることをやる、元氣な間に楽しく生きる生き方と言つものがあるのではないか、と思つようになつたのです。

これらは個人的な健康上の理由によるものですが、社会的な理由でこついつた生き方に誘われる状況もあるのではないだろうか。例えば、幕末に世の中が騒がしくなつて、明日の世の中がどうなるか判らない、明日の自分の命がどうなるか判らない、と言つ時期には、人々は、お金を残しても仕方がない、と言つことで、お金は使える内出来る

だけ使ってしまったおう、という考え方が蔓延って廓辺りが大層繁盛したと聞きます。確かに世の中が不安定になれば、自分も何時どんなことになるか判らない、と言う不安が強くなり、それならやれる間に好きなことをやっておこう、今の時間を楽しく生きておこう、と言う生き方に走るのも許されるし、当然のことかも知れませんが。ギリシヤやイタリアの地中海地方に住む人たちに、自分が楽しければ良いではないか、と言う生き方をする人が多い、なんて書いたことがあります、あの地方も歴史的には戦争で落ち着かない時期が多かったところ。そう言った歴史がこうした気風を作り上げてきたのではないか。そればかりが理由ではないでしょうが、こういつた歴史もそこに住む人たちの生き方を決める要因の一つになっているのではないか。生き急ぎをしている、と言う言い方が出来るのではないかと思いました。世の中のために生きる、なんて格好の良い言い方は、むしろ自分が戦乱の中で生命の危険を感じている訳でもなく、健康的にもさして不安のない立場にいるから言えることではないか、と反省を込めて考えたりしています。

最近、偶々「何のために生きるのか」いま、生きる意味を問うすべての人にささげ

る、と言つ題名の、稲盛和夫氏と五木寛之氏の対談集が発刊されたので読んでみました。これは昨今の日本人、特に、子供たちの心の荒廃を話題にしたもので、仏教関連の話が多く出て来ました。稲盛さんは一度得度の経験があるし、五木寛之は若い頃、仏教専門のレポーターみたいなことをしていたと聞いたことがありますのでこんな話になるのでしょうか、私の考えていることとの間には大きな差があつてあまり興味深くは読めませんでした。五木さんはやはり「青春の門」を書いている方が良いな、と思いました。

(平成十八年一月七日)

57

敗血症

広辞苑によれば、敗血症とは「血液およびリンパ管中に病原細菌が侵入して、細菌から分泌する毒素のために、激烈な中毒症状を起こし、かつ諸種の急性炎症を發する疾病」とあります。ひと言で言えば、血液の中にバイ菌が入つてオイタをする病氣、と言つことなのでしょう。このオイタを収めるために身体の方が反応します。まず血液の中の白

血球の数が増えて、侵入して来たバイ菌との戦いを始めます。同時に、血液一立方ミリメートルに一五万から四〇万くらいあると言う血小板が、活躍を開始します。血小板の役目は血液を凝固させることです。ですから、体中の処々方々に発生する出血を追いかけて、出血を止める働きを始めるのです。

七月九日、日曜日の早曉に突然寒気を感じ、四〇度近い高熱を發しました。週末なので何とも仕様がなく、日曜日は一日中ベッドにいました。熱と同時に倦怠感が異常に強かったので、肝臓をやられたかな、遂に再発か、と思いました。月曜日の朝、病院に連絡を取ってみました。が、予約の受付の窓口で、担当の先生の予約が全く空いていない、とのことなので、半分諦めて解熱剤で熱を下げ、どうしようもないな、と月曜日も一日中ベッドにいました。夜中になって再度熱が高くなり、嘔吐が始まったので、家内の強い勧めで救急車のお世話になることにしました。電話をしたのが十一時半頃だったのに四人の救急隊員が来てキビキビと良くやってくれ、こちらの希望を容れて、昨年ガンを手術した佐世保中央病院に運び込まれました。ピーポアの世話になって夜中にマンションを

騒がせるのがイヤだ、と思つて救急車の利用を逡巡してはいたのですが、音もなく静かに来てくれて安心しました。救急車の利用は勿論生まれて初めての経験でしたが、流石に乗り心地は良いとは言えません。病院の当直医が若いけれど中々優秀な医者だったようで、採血・レントゲン・CTと次々と検査をしてくれ、点滴が始まつてそのまま入院と云うことになりました。

翌朝一番に掛かり付けの外科部長が顔を見せてくれて一安心。今回は内科の範疇なのでしょうが、引き続き同じ外科医の世話になることになりました。ベッドの周辺に何だか物々しい雰囲気を感じます。直ぐに輸血の手配と大掛かりな点滴が始まりました。大腸菌が血管に入った敗血症とのことで、入院当時は非常に危険な状態だったそうです。輸血用の血液が夕方になって届き、輸血やら血液を正常化する薬やら抗生物質などの点滴が両腕から流し込まれて、二・三日は死線を彷徨っていたと言つことらしいのです。自分自身は全く意識していませんでしたが、後で聞いてみると確かに危ない状態だったようです。普通は一五万から四〇万ある筈の血小板が二万まで減っていたとのこと。血

血小板は直ぐには補給されるものではないらしく、あちこちで活躍が始まると血液全体の血小板が減るのだそうです。あまりに減つてくると、どこかで出血が始まると血が止まらない、と言つことになつて命を落とすことになります。故岡崎の直接の死因になつた出血傾向はこの症状です。他方、血小板の活躍の結果、血栓の素みたいなものが出るのだそうで、これが心臓や脳に詰まるとこれまた命に関わります。少し落ち着いてから来てくれた旧知の薬剤師は、血小板が二万まで下がつて生きている人を初めて見た、なんて言っていました。先生も、高熱が出ないのが不思議なくらいだ、とか、三日間が勝負だ、と言っていました。この間、点滴を受けてはトイレに通う「オシッコ製造機」人間になり果てていました。

二日目の十三日の血液検査で血小板が四万まで戻り、治療の効果が出ていることが確認されました。五日目の十六日に二回目の血液検査をしたら、先生が検査の結果を持つて病室に飛び込んで来て、「長島さん、完治ですよ、完治！」。血小板が正常値に近い一四万まで戻つたとのこと。これ程の劇的な回復は期待していなかった、とのこと、

百戦錬磨の外科部長も流石に興奮気味でした。それだけの体力があつたから、このことです。その後、体力の回復に時間を掛け、血小板が更に増え、血液内の細菌がなくなつたことを確認して、二週間目の七月二十五日に退院しました。

今回は、前回と違って病院で安静を強いられたため、退院前に足の訓練をすることが出来ず、出て来ても何だか頼りない感じでした。朝の裏山の散歩からボチボチ開始しています。元に戻るまでに暫く時間が掛かりそうですが、去年の手術の後遺症とか再発とかの心配はないとのことで、これがせめてもの救いです。折角、元に戻りつつあつたゴルフの方は暫くお預け。また、ゼロからのスタートです。少なくとも暑い間は避けて、涼しくなつてから始めようと思つています。お蔭でこの夏はずい分とユツクリ過しました。

直接の原因は分かりません。手術部位からの感染の可能性、服用中のステロイド剤や抗がん剤の影響などが考えられるとのことでしたが、疲れが引き金を引いたことは間違いないようです。英国旅行は最後のロンドンの炎天下の引率騒動を含めて、かなりの強

行軍だったことは事実ですが、それでもさして疲れを感じないで帰って来ました。振り返ってみるとどうやら帰って来てからも年齢不相応の動きをしていたようです。六月十三日に英国旅行から帰って、四日ほど滞京しました。孫と遊んだのは良いとして、炎天下を幼友達と鎌倉霊園に慶の墓参りに行ったり、暑い中を旅行中に亡くなった従姉のご弔問に伺ったりして十八日に帰崎。帰って早々に旅行に出る前から約束していた十月の同窓会の最終案内状の発送準備作業、旅行の写真の整理と発送、自分史の追加製本、珊瑚の原稿作りなどは机の上の作業ですが、外でも大分無理をしています。東京で「長崎楽会」と称して長崎の歴史を学んでいる人達がフィールドワークと称して実地の勉強に来了ので、これを迎え撃って、新しく出来た歴史博物館を見学したり、猛暑の中、山登りをして上野彦馬や坂本竜馬の史跡を歩いたり、これも新しく完成した原寸大の出島を見物したりしました。勿論、その間には飲み会が挟まり、どうしても過し気味になります。ゴルフはこの三週間で二回やっていますが、止せばよいのに一回はゴルフの後、そのまま長崎まで行って夜の会合に出席して、これも飲み過ぎる。往復三時間かけて福

岡まで出かけて、炎天下を一時間も歩く。この間お客の付き合いで、ハウステンボスの中を案内するケースが二度ありましたし、空いた時間を狙ってゴルフ場の打ちっぱなしに行つて、ジムで運動しています。元気な時代にやっても疲れるだろうことを、病後の、それも外国帰りの身体でやっている。これでは身体が悲鳴を上げても仕方がなかったのでしょう。どうやら「年を考えながら行動しなさい」と言うことを厳しく諭され、認めざるを得なくなつた、と言つことらしい。淋しいことです。

いずれにしても、二年連続二度目の入院とは全く面目ない思ひです。これからは少し自重して、皆さんにご心配を掛けないよう心がけねば、と深く反省しています。

(平成十八年九月七日)

本編に書き漏らした幾つかを補遺編でご紹介
したい。

佐世保重工業救済劇

新聞を騒がせていた佐世保重工業救済劇もどうやら一段落したようである。同業種に64
あるものとして、考えさせられたことを一・二書いてみたい。

一・経営者の態度

石川島播磨重工の真藤社長という人は造船業界では相当名の知られた人である。倒産
直前の呉造船を独特の合理化対策で建て直し、シンドーイズムと言葉さえ創り出し
た人だが、この人が三・四年前造船工業会の会長になった時から一貫して造船業の危機
を訴えて来た。造船業の危機はずい分昔から唱えられて来ているが、仲々本当の危機に

ならないものだから、狼少年とまで言われて来たものだが、今度こそ本物だ、と言う言い方で訴え続けていた。危機の事実は大いに認識しつつも、私にはその訴え方が気に入らなかった。大変なときが来るのだから、自分達で協力し合って何とかしよう、と言う姿勢よりも、大変なのだから政府は何とかがしてくれ、と言う訴えかけの方が強いように感じたからである。「ここまで膨れ上がった設備能力と人的能力を業界内部の自主規制だけで削減するには限界があるし、これだけ膨れ上がる過程では政府の指導にも誤りがあった。設備能力を拡充したり廃棄したりする際には政府の許可を求めておきながら、設備過剰になったしまったと言うのは国が上手く規制できなかったと言うことなのだから政府はその責任の一端を負うべきだ。然らずんば、これだけ裾野の広い、根の深い産業なのだから周辺の多くの人を巻き込んで、地域社会にも重大な影響を与えるであろう」と言う論調だったように思う。でもこの議論は外部から見れば、調子の良い時に見境もなく勝手に設備投資をし、生産能力を上げて儲けるだけ儲けておいて、市場が悪くなって需要がその供給能力を満たすことが出来なくなつた時に、その尻を他に転嫁する

なんて、こんな身勝手に無責任な経営者があるものか、と思われても仕方がないのではあるまいか。

設備投資、労働力の増強をする際には、その時点でのそれなりの見通しと高度の経営判断が伴う筈なのに、その辺が出来ずして何が経営者か、と言うこと。あの当時の経営者のマインドと言うのは高度成長の波に乗り遅れまい、自分の社のシェアを引き上げて行こう、と言う点に重きが置かれ過ぎていたのではあるまいか。銀行から借金し、その借金を返すためには無理を承知で売り上げを伸ばさねばならない、と言う追いかけっこをせねばならぬ宿命を負わされていたことも事実だろうし、賃金引上げの圧力を吸収するには、これも売り上げを増やすしか手がなかったのかも知れない。でも、誰が見ても過大な設備をドンドン作り、世界中の造船能力の半分以上をこの小さな島国で持つてしまったことは、どう考えても異常であり、当時の経営者の長期的視野の欠如が責められても仕方がないことではないかと思う。

こうした経営者の姿勢の根底にサラリーマン経営者と言う要素があったのではない

か、と言つては言い過ぎだろうか。仮に経営と資本が分離されていない企業、若しくは分離されていても資本の声が強いオーナー企業だったら、こんなことにならないのではあるまいか。自分の金で企業を賄い、子々孫々まで引き継いで行こうとする資本家（企業家）だったら、もっと長期的にものを考え、慎重になつたのではあるまいか。今の日本の大部分の企業のように資本家と言えば株主と言つて不特定多数であり、資本家の声や意志が強く反映される筈がないし、大株主は金融機関。経営の八〇%以上がこれらの金融機関からの借金で賄われているとすれば、経営者としては三十年・五十年先のことを心配するより、自分が経営の座にいる短い間のことを心配する方が先に立つのは仕方のないことなのかも知れない。こういった形の企業形態が日本経済のバイタリテイの素だったし、ここまでの高度成長を支えて来たのだから、それが悪いと決め付けることは出来ない。またこつこつという見方をするのは当時の経営者にとって酷と言つことになるのかも知れないが、現実にこんなに変なことになる、今回の救済劇の中で全く当事者能力のない経営者を見て、一方では気の毒に思つと共に、これが造船業に限らず今の大部分の

経営者の実の姿ではないのかしら、と一寸薄ら寒いものを感じたことだった。

二・人件費は固定費である。

物を作り出すときに固定費と変動費があることは経済学の中で教えられたところである。理屈の上では固定費は工場や機械等の設備、変動費は人件費と材料費と言ふことだったが、最近の企業では固定費の中に人件費が入ってしまった。外国でも首切りは出来難い、と言ふことで固定費化の度合いは強くなっているが、日本ほどではない。レイオフの制度が進んでいるし、失業者に対する国の配慮がある。日本の場合、終身雇用制度と言ふものが非常に強いものになっている上に、失業者に対する配慮と言ふか国の施策が遅れているから、固定費化の度合いが非常に強いものになっている。

所謂、正社員として採用した人を仕事がなくなったから、と言つて首にするわけには行かない。希望退職という形の人員の整理も大きな抵抗を受ける風潮にあるほどである。とすると仕事があるうとなかろうと一定の給料は払わねばならない。遊ばせておいて給料を払うよりも何か仕事をして貰つた方が良く、と言ふことで無理やりに仕事を探して

来るといふことになる。その仕事の採算は赤字でも、人が丸々遊んで生じる損よりも損が少なければその注文を受ける、と云ふことになる。こんな形の経営が長続きする訳はないが、底の状態ではこつこつという現象が生じる。現在の造船業の実態は、もつこつまで来ているのである。各造船会社は少しでも採算の良い、また工事量の期待出来る陸上部門に人を動かすことに懸命になっているが、何千人、何万人の単位の移動がそう簡単に運ぶわけがないし、造船專業でやって来たところは人の移動先すらない、と云ふことで造船の比率の高いところほど苦しいと云ふことになっている。私が就職先を選ぶ時、造船の比率が低かった会社を選んだのが正しかった、と云ふことになる。

こつこつした赤字受注の競争は正常な經濟活動ではない。外から見ればダンピングの一種と云ふことになる。今はこつこつして無理やりに出す日本の造船業者の値段と中進国が安い労務費をベースに出して来る値段とが丁度トントンだし、先進国は強力な自國産業保護政策を取って来ているから、日本が幾ら安値を出しても仲々受注に結びつかない。その結果として日本のダンピングが目立たないが、このような異常な價格操作によって市場

価格を不当に押し下げたり、世界中の仕事を日本にかき集めたりすれば、世界中に迷惑を撒き散らすことになり、日本の造船業がダンピングの名で世界各国から糾弾されても仕方がないことになる。

やはりこうした明らかに過剰設備、過剰生産能力が発生したときは、何らかの方法で身を軽くせねばならない。設備の方は休止すれば良いし、現に造船業は大手四〇%、平均三五%の設備能力縮小の運輸省指導が出されているが、一番の問題は人。人を変動費として身軽にならねばどうにもならない。それには社会政策を充実させ、一つの企業が70から離れても次の仕事が見付かるまでの間、又は新しい仕事のための勉強をする間、食べていけるような制度を作るべきであろう。終身雇用の良いところは多々あるが、こうした構造不況といわれる時期には大きな足かせになる。どこかに逃げ道を作っておかないと佐世保重工と言わず、労務費の重みに耐えかねる企業が軒並みに出て来るのではないだろうか。

三、淘汰

当事者には極く酷な言い方になるが、今回のように倒れようとするものを無理に支えようとする、全体の経済活動に大きなひずみを与えることになる。やはり競争に負けるところは弱いなりの理由があつたのだから、「神の見えざる手」によつて淘汰されるのが本来の姿なのではないだろうか。

今回の救済劇は多分に政治的要因の強いものであり、現在の政情下、大型倒産は出しではならないとの政権の力が働いたものだろうし、原子力船の修理につき取引があつたとも聞く。坪内新社長の野望が底にあつたとも言われる。その辺の力学がどんな関係になつているのかは、知る人のみぞ知るといふことなのだろう。

勿論、その企業に生活の基盤を置いている人たちへの配慮はなされるべきだし、地域社会に対する悪影響を最小限にとどめる努力は必要だが、これはもつと別の形、別の方向に向かつてなされるべきものだと思う。競争に負けた弱いものを、その同じ分野でそのままの形で救つて行つたのでは、弱いはずのもの（言わば限界企業）が一番強くなり、次には、次に弱いものが危なくなる。こんなことを続けて行つたのでは、生き残ろうと

している企業の努力が他の力で抑え込まれる結果になり、遂には業種として存在して行けないようなところまで追い込まれて行くことになるのではないだろうか。欧米先進国での実績が示すように、造船業と言つのは先進国では残つて行き難い産業、雁行形態の終わりの部分に來ている産業だと思ふ。でも、それは集約など別の方向に發展させることにより解決して行かねばならない問題で、今度のような形で救つて行くのはどこか間違っているのではないか、と思ふ。

(昭和五十三年七月二十二日)

ソ連人との商売

修繕船の仕事をしていると、全世界の人と付き合うことになります。世界中どの国の人を相手にしても、商売に対する考え方は多かれ少なかれ万国共通なので、何とかやれるものです。中国人(華僑)は商売が上手いとか、ギリシヤ人はケチだとか、アラブ人はもつとタフだとか言いますが、皆常識の範囲で処理が出来ると言えましょう。中国本土の連中については前にも書いたことがあります。『友好』とやら言う訳の分から

ぬ要素が入ってきてやり難い面があります。もつともこれについては、こうした要素を上手く利用することによつて商売を上手くやるう、と言つ商売上手の中国人一流のテクニクだと理解して来ましたが、最近は友好がどこかへ行つてしまつて、経済第一。残つているのは「友好値引き」と称する不思議なもののみになつていようですから、化けの皮が剥がれたと言えるのではないのでしょうか。

その中で一番やり難いのがソ連人相手と言われています。ソ連の船の中で我々の商売の対象になり得るのは漁船、漁工船（尤も最近では日本の漁業関係者の圧力で、日本の造船所ではソ連の漁船の修理は出来ないことになっていきます）、貨客船、砕氷船などがあります。

私は長い間、外国の客を相手にして来ましたが、幸か不幸かソ連人と付き合う機会が全くありませんでした。話を聞くと、一つの契約のネゴにモスクワまで呼びつけられ、雪の中で何ヶ月もジリジリと交渉させられるのが常です。この間、日本との交信は皆傍受されているとか、部屋には盗聴装置が仕掛けられていて、内部の打ち合わせも充分に

出来ず、受注出来ても散々苦勞した結果、慘憺たる採算になるのが常でした。値段の交渉でも我慢に我慢を重ねて、もうこれ以上我慢が出来ぬところまで追い詰められ「ここで諦めよう」と決心して、帰りの航空券を買って来て「明日はこれで帰る」と言ったらやっと少し譲歩してきた、とか、この手の物語がつきものなのがソ連船の受注交渉だったのです。ついこの間、日露戦争後の講和条約交渉に当たった外相小村寿太郎の苦勞を描いた「ポーツマスの旗」と言つ小説を読みましたが、実際の交渉はあれ以上にきついものだったのではないか、と思ひました。とにかく、こちらに少しでも弱味があるうものなら負け。談判決裂も辞さず、イヤなら辞めろ、で行かなければ、どこまで押されるか判らないのがあの連中なのです。小説の中で最後の最後に小村が、交渉決裂已む無し、の電報を打った時、これに対して日本政府から、何としても纏めろ、と回答が来る場面があります、ああした事態になった時の出先の苦勞が良く判ります。小村外相が心労のあまり病に倒れても無理はなかつたのでしよう。

四・五年前、北海道の近くでソ連の船が爆発事故か何かで船の前半分がなくなつてし

まい、修理してくれ、と言う話があつて、見積りを出したことがあります。日本からは三社が入札に参加したのですが、見積りを出した後、ソ連側から、まず四〇%位値引きしないと交渉に入らない、なんて言つて来たので、あまりに酷すぎる、と三社で申し合せて揃つて辞退を申し入れました。その少し前は造船所にとつても酷い時期だったので、損をしても仕事が欲しい、と言うことで滅茶苦茶な値引き競争をやつたことがあり、ソ連側もこれと同じ感覚でこんな無体なことを言つて来たのです。誰もやつてくれるところが無くなつて驚いたのか、モスクワから駐日ソ連大使館に指令が入り、三社別々に大使館に呼ばれて、何とか協力して欲しい、と、この時ばかりは低姿勢に出て来たものでした。私が実際にソ連の人と直接接したのはこの時が初めてでしたが、前々から彼らのやり方に腹を据えかねていたので、少々高姿勢で、「商売と言うものはそんなものではないのだ」、「一時期は日本の造船所もバ力なことをしたが、今はそんな時代ではないのだ」、「時代を考えてモノを言わないと誰も協力してくれなくなるよ」なんて大分演説してやりました。その時は先方も、「良く判つた。本国に考え直すように進言するから

相談に乗ってくれ」なんて言っていました。この件についてはその後お呼びも掛からなかったので放っておいたら、この仕事はシンガポールかどこかでやった筈です。

その後、砕氷船の話が出た時も、あまりに酷いことを言うので見積りを出しただけでモスクワには交渉チームも送らず、事実上喧嘩別れをしました。この仕事は値段の安いシンガポールへ持って行ったらいいのですが、これはかなり難しい仕事だったので、約束の期日内には出来上がらず、その内に氷が溶けてしまつて、この砕氷船はその年の役に立たなかった、ということを知っていました。

昨年の秋頃から又砕氷船の仕事の話があり、例によつて見積りを出して商談が始まりましたが、性懲りもなく酷い条件を出して来ます。今度はこちらにも知恵がついているので、逆に何だかんだと言つて交渉の土俵に乗らないことにしました。他の日本の造船所には目が向けられないようにしてあります。大体この砕氷船の仕事と言うのは工事に二ヶ月ぐらい掛かるし、四月末頃までに終わらないと北極圏の氷が溶けてしまつて役に立たなくなると言つことが判つていましたので(その前は氷が固すぎて使えないのだそ

うです)ギリギリまで焦らす戦術に出たわけです。モスクワやソ連大使館からはヤイノ、ヤイノと言つてきましたが、マダマダ、と引き延ばしました。実際はこちらも腹が減つて来ていて、万々が一にも失敗すると困るところだったので、その辺は社内のコンセンサス作りをやってジツとこらえた訳です。一月の末になつて、こちらもやはりこの仕事がないと困る、ということがハッキリして来たし、そろそろタイミングか、と腰を上げることにしました。これだけ焦らしていると、こちらが立ち上がったときに相手も付いて来るものです。「今年はモスクワへは行かないよ。東京で交渉しよう」と言つてこゝとにして、大使館に出かけて行きました。

値段の件はさて置き、「この船はドラフト(船の沈んでいる部分)が深いので、満潮の時、それも高潮の時でなければドックに入れられないよ。今度入れるチャンスは五日後の二月初めだが、この機会を逃すと次の高潮は一カ月後になる。一ヶ月遅れて仕事を始めると完成は六月ごろになるね」なんて話から始めたものですから、先方も流石に慌てて、その場からモスクワに電話を始めるやらの大騒ぎになりました。それでも中々し

とい相手ですから値段についてはソコソコに値引きさせられましたが、まずまず満足
行く数字で、その日の内に仮契約しました。その後、ドル予約で少し儲けて、ソ連相手
の仕事としては従来にない良い条件での契約が出来ました。これまで散々酷い目に遭わ
されている人が多いので、ソ連人相手に勝ちのネゴをしたのは久し振りだ、溜飲が下が
ったと言う評価を貰ったことでした。

砕氷船の方はナホトカで待つていたとかで、仮契約の日の内に出港準備をして三日後
には造船所の沖に現れました。仕事に掛かってから船長に聞いたら、何ヶ月も散々待た
された拳句、突然「一刻も早く横浜に向かえ」という急な指令が来て準備が大変だった、
とブーブー言っていました。

相手によっては、見方によってはこんなにアクロイ商売もやっています。人間が悪く
なっても仕方のないところですよ。

(昭和五十七年五月)

石川学校

石川利雄と言う人がいました。私が学校を卒業して、新三菱重工業に入社した時、指導官をしてくれた人なのですが、この人が大変な人でした。年は私の一回り上の五年。倉敷の高商を出て、新三菱重工業の水島の工場に入社したのですが、入社後間もなく上司を下駄で殴ってクビになった、と言う伝説を持つ人で、どういう経緯があつたか知りませんが、今度は本社の方に再入社した、と言います。この辺にも何か物語がありそうです。

入社した当時の課長さんなんて言ったら大変なオジさんで、何をやっているのか判らない雲の上の存在でした。私が入社した頃、石川さんは若手の課長代理、と言つたころでしたが、課長は名ばかり、と言う存在にしてしまつて、実質的に課を動かしているのはこの人でした。若い頃からやり手だつたらしく、社内での発言力も大変なものでした。修繕船営業と言うと、昔から独特の世界があつたようで、少なくとも十年位の経験がないとモノが言えない、一人前の顔が出来ない、と言われたものでした。元々世の中の造船所と言われるところは、どこの国でも殆どが船の修繕工場から発展して出来て来

たと言われています（船がなくては修繕は出来ないのでから、最初に船を造る造船工場が存在したことは間違いないとは思いますが・・・）。その工場の工事量を確保するための修繕船営業屋と呼ばれる人たちは、古くから存在したし、そこに独特の世界があるというのには世界共通のものようです。この辺は、外国の船会社の人達が自分の国の修繕船営業マンを見る目なんかを見ても感じます。この石川さんと言う人は、こうした営業の旧弊の殻を破って、合理的な、科学的な営業にしようとする努力した人だったと思います。外国の船の修繕工事の注文を取ってくる、と言う仕事で、仕事の性質上、どうしてもも古手の営業マンが多くて現場の近くにいたる工場の方が強くなり勝ちだったのですが、その中で、本社が主導権を握って営業しようとする姿勢を崩しませんでした。その道何十年と言うベテラン営業マンのいる工場との主導権争いになる場面があるのですが、将ばかりが強くて、兵卒が弱くては話になりません。勢い、部下どもも勉強を強要されることになります。と言うことで、この課は社内でも有名なタコ部屋になっていました。

当時は、まだ土曜半ドンの時代でした。土曜日は六時にならないと残業代が付かないのですが、入社してすぐの頃から土曜日の残業は常識、日曜出勤も当たり前、といった調子の職場環境の中突っ込まれた訳です。月の残業時間が一二〇時間、一三〇時間の月が続きました。残業にカウントされない土曜日の午後の分を入れると、実質の残業時間が毎月一四〇／一五〇時間だったことになりますから、先般、月に三〇〇時間の労働時間で過労死の認定を受けた人よりも酷い目に遭っていたと言うことになります。入社後約一年間、コンスタントに月に一〇〇匆ずつ体重が減って行ったのには驚きました。余りにも正確な等差級数なので、この調子だと何年で体重がなくなるのかな、なんて真面目に計算してみたことがあったほどでした。

英語が書けるか、話せるか、なんて確認もしないで、これから羽田へ行つて、こつこつ外国人のお客を探し出して、三時間ほどアテンドして来い、とか、こんな趣旨の英文の手紙を作れ、とか、考えてみればずい分酷いOJTをやられたものです。私の入社当時は本社には、課長の下に男性四人、女性二人（実は、この内の一人が先の女房でした）

がいましたが、この人達もそれぞれに大変な目に遭っているので、新米を指導してくれる余裕はありません。仕方がないので、競合相手の同業者と仲良くなって教えて貰ったり、業界新聞のベテラン記者から知識を得たり、お客のところへ行行って手紙の書き方を教わったり、思い返してみるとずい分無茶なことをしたものでした。

当時は、日本の造船業はまだ花形で、競争力もありました。造船業と言うのは、かなり労働集約的な産業ですから、先進国になると人件費が高くなって競争力がなくなります。後進国（発展途上国と言わねばならないのですが、この言葉は如何にもワザと作っただ感で好きになれません）では教育が行き届いていなくて技術力が足りないし、勤勉度も足りないと言うことでこれもダメ。と言うことで、造船業はその中間、言わば中進国に合う産業だと思えます。当時の日本はこの位置づけにピッタリだったと思えます。特に修繕船の工事費は七〇%から八〇%が人件費です。所得倍増論以前の日本の日本の人件費は安かったので、国際的にも競争力がありました。同じ工事でも、アメリカは納期は早いけれども工事費は三倍、欧州が二倍と言うのが通り相場でしたし、東南アジアはまだ

信用がなくて競合相手にはなりませんでしたが、大型の工事の国際入札なんかがあると、日本の大手工場同士の競合になります。叩き合いをしてもつまらない、と言うことで、談合の組織が出来るのは自然のことだったと思いますが、業界のこの組織を牛耳っているのがこの人でした。官の仕事をしているのではない、外国との商売なのだから談合は違法ではない、と言うのが解釈でした。別に業界のボスと言う訳ではありません。競合する各社にも、修繕営業一本で育って来たような大ベテランの役員や部長なんかがいきましたが、この人は課長代理の身でありながら、神戸造船所の実力をバックに、理論と政治力でこれら業界のボスどもを押さえていたのです。業界の仁義を守るためには、自分の社内をシッカリ押さえる力がなくてはなりません。この人がこつしたことが出来たのは、完全に自分の社内を掌握する力を持っていたからだ、と思われれます。私も長じるに従って、この世界に入って行ったのですが、営業と言うのは、外との戦いよりも、内部との戦いのほうが大切だ、と言うことをこの人に教えられました。

世界一のメジャーオイルのエッソ（今のエクソン）が、船の長さを長くし、深さを深

くして船の容量を増やす、世界で初めての増深・延長工事の国際入札をやったことがありました。私が入社して間もなくのことです。激しい国際的受注競争で、時間も掛かりました。私は一番下の下働きをしていたのですが、受注確定の通知がニューヨークの駐在員から電話で入った時、感極まって涙を流していられるのを見て、これが本当の営業の姿なんだ、と教えられた思いがしたものでした。エッソなんて耳に慣れない頃のこととで、外国為替管理法に従って信用状を要求したものですから、アメリカの新聞に、「ロックスフェラーに信用状を要求した男」と言う記事を書かれたりしていました。

外国人との付き合いは平気でやりながら、英語は滅茶苦茶でした。書くことは人任せ。英会話も、文法的には酷いものでしたが、論旨がハッキリしていて、主張したいことが良く判るし、言ったことは会社や現場に守らせるだけの実力の持ち主でしたから、お客の信用は抜群で、外国の船会社のトップとの付き合いも充分やっていました。言葉なんて道具に過ぎない、大切なのは内容なんだ、と言うことを身を以って教えて貰っている思いがしたものでした。

私が入社したのが昭和三十五年でしたが、三十九年には三菱の三重工が合併しました。合併と同時に課の編成が変わって、私の上には他の会社の課長が来たのですが、育ち方の違いが大き過ぎて、必ずしも上手く行きませんでした。石川さんとはそれ以来、同じ部の中でも課が違っていたり、その内に部が変わったり、工場に転勤されたりで、一緒に仕事をする機会はなく、結局、一緒に仕事をし、ご指導を受けたのは最初の四年だけと言うことでしたが、その後も、陰になり日向になって可愛がってくれました。当時、夫々に酷い目に遭って同病相哀れんでいた仲間同士は「元祖石川学校の生徒」と言うことで、仲良くさせて貰っています。

前にもご紹介したことがあります。私が長年やった修繕船と言う仕事は、額は小さいけれど自己完結型の仕事でした。入社の際は、一件で百万円に満たない工事からありましたし、後になっても一件十億円を超える工事はめったにありませんでしたが、工場を食わせて行く、と言う意味では、人に直結する仕事でしたから、大袈裟に言えば、夫々一人ひとりが町工場の社長みたいな仕事をしていたと言えるのかもしれない。情

報の収集に始まり、初めて取引する客との付き合い、工場の説得と督励、受け入れ態勢作り、業界対策、見積り、競合、受注から工事の施工、工事代金の確定から代金の取立て、入金まで。自分で切り開いて行く癖を否応なしにつけられていますから、修繕船経験者の卒業生はどこへ行っても潰しが効く、と言われます。大会社の大きな組織に育った人は、組織を離れてしまうと役に立たないけれど、大会社の中で町工場の仕事をしてきた人は、組織から離れても生きて行ける、と言うことなのでしょう。私の場合、その中でもこのタコ部屋に育った訳ですから、ハウステンボスに来てこんな畑違いのサービス業をやらされても何とかやって行けているのではないのでしょうか。

この人がガンに罹って、もう長くないのではないか、と言う情報が流れました。ご本人は知っているのか知らないのか、自分の弱みは見せたくない人ですから、何も言いませんが、こんな情報はどこからともなく漏れてくるものです。一度ハウステンボスを見に来てくれ、と言う私のお願いに従って、一旦、来訪の計画を立ててくれたのが昨年五月頃のことでしたが、出発の直前になって「急遽、検査入院することになったので、計

画は繰り延べにしたい」と言う連絡が入りました。これはいけないかな、と思いました
が、「退院次第来て下さい」ということにし、それから入院の期間中、三日から一週間
置きに絵葉書で激励することにしました。本物が見て貰えないのなら、せめて写真で見
て貰おう、と思ったのです。結局、この入院は一〇〇日を超え、出した絵葉書も毎回々々
絵を替えて三〇枚を超えました。元気付けのために「退院されたら、元祖石川学校生徒
の同窓会をやりましょう」と言う約束にしていたので、退院直後同窓生と語らつて、倉
敷の石川さんを訪ねることにしました。幹事役は最年少の私になりますが、先輩の同窓
生たちも喜んでくれて、退院一カ月後の九月に決行しました。東京と長崎の中間点で集
まる同窓会と言う名目で、お見舞いに伺う積りだったのですが、世話好きで見栄っ張り
の石川さんのこと、ホテルの手配から同窓会の会食のアレンジ、果ては観光のアドバイ
スまで、病人に厄介をかけたのでした。奥様とは裏で相談をしながら進めたのでしたが、
「こんなことをやること自体が本人の楽しみなんだ。それが生き甲斐なんだ」と言われ
て、敢えてお言葉に甘えた部分もありました。ご本人も大変なお喜びで、また大変な張

り切りよう。杖を突いてでしたが、駅への出迎えに始まり、昼食のアレンジ、ご自宅への案内、観光への送り出し。夜は、病人にご馳走になる始末でした。翌日もタクシーをアレンジして下さって、観光の後、ホテルまでお別れに来て下さるほどで、これが病人か、と思ったほどだったのですが、その後間もなく再入院。本人からは原因不明の腰痛、と言って来られましたが、これはガンの転移が脊椎に来たものと思われました。

今年に入って、流石にこちらから出す手紙に対する返事が来なくなり、最後は大分苦しまれた様子でした。こうなると奥さまと時々電話でお話して、不幸にして私自身が豊富に持っている経験を基にして激励して差し上げる程度のことしか出来ませんでした。が、二月九日、お亡くなりになった、との報が入りました。こうなることは、ある程度予測はしていたのですが、岡山の子島ホテルの玄関で、タクシーの中からお別れをしたのが最後になりました。二月十一日の倉敷でのご葬儀には参列し、石川学校生徒を始め、先輩連中や業界の仲間たちも大勢集まってお別れをしました。

今回は、諸兄姉とは何ら関わりのない方の紹介をさせて頂きました。皆さんに読んで

頂くというより、自分の思い出の記録を残すと言う意味で掲載させて頂いた、と言うこと
とでご了承下さい。
(平成十年五月一日)

私とLNGタンカー・修繕包括契約

課長から次長の時代に四年半、横浜製作所に勤務
した。横浜製作所が開所百二十年を迎えるに当たり、
記念誌を発行することになり、依頼を受けて思い出
話を投稿した。

一．プロローグ

父が船乗りだった所為か、幼少時から船が好きでした。戦時中の「私のなりたい人は勿論「海軍大将」でした。高校の頃まで商船学校に進む積もりでしたが、船乗りの苦勞を知っている父から強硬に反対されました。「船乗りには向き不向きがある。将

来、自分は船乗りに向いていない、と気が付いたときに、他の仕事を選ぶ際の選択肢が少ないから止した方が良い」と言う説得だったと思います。高校の高学年の頃船乗りを諦め、文科系の大学に進むことにしたのでした。

大学を出て就職するに当たって、サラリーマンを選ぶ他無いな、と思い、船に関する仕事をしたいな、とは思ったものの、学生時代は英語が嫌いで成績も良くなかったので、船会社や商社は諦め、「造る方なら大丈夫だろう」と思って一九六〇年に当時の新三菱重工に入社しました。学生時代に少し国際経済と経済発展の勉強をした所為か、造船業と言うのは日本では衰退産業の部類に入る、と考えていましたので、当時合併前の三菱の三重工の内、造船の比率が一番低かった新三菱を選んだのでした。

入社してみたら、配属された先が本社の外国修繕船課という輸出営業の最先端の部署でした。入社直後から強烈なOJTの洗礼を受けて、何とか英語で商売が出来るようになり、その後、香港駐在員やロンドン駐在員を務めるなんて、思いもかけない展開になりました。一九六四年に三重工が合併し、横船とのお付き合いが始まりました。当時の

日本はまだ造船業の最盛期でしたが、労務費の比率の大きい修繕船業は、三菱重工ではどうしても価格が高いものになるので競争力に限界があり、国内の中小手の造船所やシンガポール・台湾の造船所との競争が厳しいものになって来ていました。国内でも同じ地域に複数の修繕船工場があつて、仕事の取り合いになるので、当時の橋本隆年常務とお話しする機会があつた時に、「一つの港には修繕船工場は一つあれば良い。関東地区と関西地区で造船所の統合を考えてはどうか」なんて提言をしたこともありましたが、「人間はそれほど利口なものではないよ」と言うのが常務のご反応でした。普通のタンカーや貨物船の修繕工事の注文は日を追つて取り難くなり、三菱の修繕船は難しい船に特化しないと生きていけないな、と考えるようになりました。

二・シエルLNGT修繕包括契約

日本で最初に液化天然ガス（LNG）を導入したのは東京電力や東京ガスでした。三菱商事が仲介して、シエルのLNGタンカーを使ってブルネイから天然ガスを運んで来る計画が出来ました。荷揚げ地が東京になりますが、大事で高価な船ですから、万が一

にも事故を起こして一日でも船が止まったら大変です。荷揚げ地の近くに専門のメインテナンス施設が必要になりました。こうして三菱商事を経由して、横船を対象にしたメインテナンスの長期契約の申し入れがあったのが、一九七二年のことでした。当時、私は本社の修繕船部で一番下っ端の担当をしていましたが、難しい船に特化しないと生きていけない、と考えていた私にとっては正に格好の仕事でしたので、何とか成立させたいと思って取り組みました。この仕事はお客からの申し入れでしたから、お客との折衝は比較的容易だったものの、むしろ社内の取り纏めが大変でした。まだ造船業の華やかさが残っていた時期でしたから、こんなに大きな仕事を請け負って新造船の工程に悪影響が出ないか、とか、他の修繕船の工程が混乱する原因になるのではないか、とか、こんなに高価で危険な船を預かって大丈夫なのか、長期の契約なんてトンでもない、と言った心配をする人達が結構おられたのです。上の人達や工場との折衝・説得はもっぱら本社修繕船部の偉い人達にお任せして、私はシエルの代表との契約の打ち合わせを担当しました。当時は、修繕船には契約書なんて存在しなかったのですが、業界の近代化を

目指した造船工業会が修繕船契約書の雛形を作ったばかりの頃でしたので、これを全面的に適用して当時シエルの重役だったディグイット氏や担当のフィンドレーター氏との打ち合わせを重ね、七隻のLNGタンカーの二〇年間の包括的長期メンテナンス契約を結んだのです。当方の契約調印者は秋友素身常務だったと記憶しますが、当時の渡辺一雄課長が張り切って「二〇年の契約で三百億円になります」と報告したら、新造船の感覚の常務から「タッタ三百億円なのか」と言われた、と言ってばやいていたことを思い出します。

その後の経過については、横製の皆さんがご存知の通りです。生むは案ずるより易し、とはこのことで、この難しい仕事を横船修繕船部でシッカリと受け止めて頂き、シエルの所期の目的は充分に達成して大変に喜ばれたし、修繕船業界は益々競合が厳しくなつて、普通の船の仕事は益々受注出来難くなつて来ましたから、造船所にとつては、誠に有難い仕事になりました。当初、一回一隻当たりの工事費は一億円程度だろう、と見積もっていたのですが、その後は改装工事費などを含めると一回当たり数十億円に及ん

だこともあったと伺っており、この契約での売り上げが総額どの程度のものになっているのだろうか。最初見込んだ三百億円は大幅に超える数字になっていると思われるが、計算したものがあつたら知りたいものだと思っています。

シエルからは最初、契約を担当したフィンドレーター氏が暫く監督として駐在しましたが、その後、トツシユ氏、マツカリオン氏と駐在監督が交替しました。私が横製勤務になつていた時期の監督はマツカリオン氏でしたが、協力して良い仕事をしました。メンプレンタンクのバルサの断熱材にボヤを起こした時は大騒ぎになりました。お詫びの積もりでマツカリオン氏に会いに行つたら、「決められた通りに、熔接個所の熱が冷めるまで作業員が現場に残つていてくれたので、この程度のボヤで済んだ」と却つて感謝されたのを思い出します。マツカリオン氏が帰国する時、六本木の自宅でのお別れ会に招んで戴いたのですが、その時、「君はシエルと三菱のリンク（繋ぎ目）だ」と言われて大層嬉しかったことを昨日のことのように思い出します。二〇〇二年に英国に行つた時、マツカリオン氏の自宅を訪れ、三日ほど泊めて頂いて二十数年ぶりに旧交を温めま

した。

シエルのLNGタンカーは、当初二〇年で新造船と取り替える計画だったらしいのですが、横船でのメインテナンスが良いものですから、三〇年経っても四〇年経っても新造船の話にならず、計画待ちをしていた当社の新造船の関係者に恨み言を言われたことがあります。

三・MISCとのLNGT修繕包括契約

やはり三菱商事の仲介で、マレーシアの天然ガスを輸入する計画を推進中との情報を得ました。どうやら運行関係の責任者が日本にきているとの事です。この場合は、この運行責任者と三菱商事の担当部署の仲が悪く、商事にはあまり後押しして貰えなかったのですが、この人が横浜に出掛けている、との情報を貰って、昔のシルクホテルの前で待ち伏せして、自己紹介して名刺を交換したのが、この運行責任者のエディ氏でした。その後、エディ氏の後押しで何度もクアラルンプール通いをして打ち合わせを続け、五隻のLNGタンカーの包括メインテナンス契約に漕ぎつけました。勿論、シエルでの実

績は十分に活用し、他社を寄せ付けないうで、独占的な契約に成功したのでした。

契約調印が一九七九年のことでしたが、エディ氏と一緒に横浜でのMISCの事務所を探し、以前フランスのLPGタンカー専門の船会社で監督をしていた頃から旧知のボードロン氏とも協力して事務所を立ち上げたのでした。

この契約も横製で上手にこなして頂いた所為なのでしょう、新造船の計画に結び付いて、長船で建造することになりました。これも横製修繕船部の力が評価されたお蔭だと思っっています。

四・バーマ・オイルとのLNGT修繕包括契約

私がロンドンに駐在していた一九七五年頃、バーマ・オイルの計画が浮上しました。船主に働きかけて何とか契約に持ち込もうと努力したのですが、当時この船の運航を担当していたのがアメリカの会社で、技術力より安値の方を重要視してシンガポールでメンテナンス工事をすることに決定しました。その後、様子を窺っていたのですが、シンガポールでのメンテナンスが悪いものですから、航行中にプロペラシャフトが折

れてフィリピン付近で大洋を漂流して大騒ぎになったり、果ては機器の故障が原因で、天然ガスを満載した船が下関の近くで岩礁に乗り上げて、船長がピストル自殺するなんて事故が起こり、船主のバーマ・オイルが対策に乗り出しました。担当の副社長が調査したら、シエルのLNGタンカーでは船長以下全員が白いシャツにネクタイ姿で船を運航しているのに、自分の船では全員が鎊と油でドロドロのボイラー・スーツで運航しているなんてことが判明し、メインテナンスはやはり日本でやるべきではないか、との検討を始めました。この副社長のオールソップ氏と信頼関係を築いて日本での修繕包括契約に持ち込んだのが一九八〇年のことでした。この頃は日本の他の造船所もこの仕事の重要性に気付いて来ていて、当社単独の契約と言う訳には行かず、川崎重工・三井造船との共同の契約になりましたが、当社が長船で半数の四隻を受け持つことになりました。この契約は横船には直接関係ありませんが、横船でのシエルやMISCの実績が見事に生きた結果だと思えます。

五・オーストラリアとのLNGT修繕包括契約

その後、オーストラリアの計画が立ち上がりました。調べてみたら、シエルの包括契約で最初に契約ネゴの相手だったフィンドレーター氏が運航の責任者であることが判ったので、同氏と連絡を取ってメルボルン詣でを始めました。この話を続けている途中で、私は修繕船部門を離れて新造船部門に移り、その後重工を離れてハウステンボスの立ち上げに携わることになったので、新しい担当に後を引き継ぎましたが、その後、これも複数日本他社との合併と言う形で包括契約が出来たと聞いています。

六・結び

私は一九八一年十一月から八六年六月まで横製でお世話になりました。有吉熙さんが副所長から所長になる時期でしたし、修繕部長は山根祐一さんから守孝一さんに代わる頃でした。横製修繕部としては大変に苦しい時期でしたが、現場も営業も一緒になって一生懸命にやっていたことのみが思い出されます。私としては、本当に苦しかったけれども、上の方からも部下の皆さんからも現場の皆さんからも暖かく大事にして貰ったな、楽しく仕事をさせて頂いたな、と言う印象ばかりが残っています。横製の皆さんの暖か

さは今も続いていて、たった四年半の横製勤務の私にも今以って横製ニュース（フロンティア）を送って頂いています。二〇一〇年八月号にシエルのLNGT修繕が二〇〇隻目に達したとの記事に接し、懐かしくて上記の思い出話をする羽目になりました。

今後の横製のご発展を祈っています。

（平成二十三年二月）

ハウステンボス編

オランダ村事始

このオランダ村が何故こんなに辺鄙なところに作られたのか、こんなところに作っても人が集められる、と言う計算が何処から出て来たのか、については、私にとって最初からの大きな疑問でした。こちらに来ることを決める時に、新聞の切り抜きなんかで少し勉強しては来たのですが、数ヶ月経って創始者の神近社長の話を直接聞く機会がありましたので、ご紹介してみることになります。新しい事業を始めると言うことはこんなドラマチックなことなのか、と言うこと。まるで小説にでもなりそうな話だと思います。

長崎オランダ村を語る時、創始者で現在の社長の神近義邦氏を抜きには語れません。オランダ村イコール神近社長と言っても言い過ぎではありません。この人は今って一年三百六十五日無休で陣頭指揮を執り続けてきています。優れたプランナーであり、プ

ロデューサーであり、経営者であるこの人がいなかったらオランダ村は存在しなかった、と言われますが、入って来て見て、正にその通りだという気がします。まだこの人個人に依存する部分が多く、万一この人がいなくなったらこのグループはどういうことになるのか、と言いたくなる程。先日、この人が事業を始めてから初めて、肺炎で入院された時は一種の衝撃が走りました。社内は勿論のことですが、銀行を始めとする社外へのショックも大きかったのではないのでしょうか。

この神近義邦という人は、地元西彼町の生まれ、昭和十七年生まれと言いますから現在四十八才。義邦と言う名前はいわずと知れたあの勝海舟にちなんだもの。貧しい家庭に育つたため満身に学校へも行けず、真珠養殖会社に住み込んで働きながら農業高校の定時制を卒業し、西彼町の役場に勤めたのだそうです。町役場の役人でありながら、近くに一〇〇〇坪の土地を借りて花の栽培の商売を始めたと言いますから、この辺が他の人とは少し違っていった点でしょうか。

昭和四十六年に長崎県庁に研修職員として出向したことから運命が変わったと言わ

れます。東京の永田町に「一条」と言う高級料亭があつたのだそうで、ここの女将さんで室谷秀さんと言う人がいました。この人が一儲けを目論んで西彼町に土地を買つて、若かりし神近氏が世話をしたのが縁となりました。女将さんに頼まれてこの土地に観光農園作りを始めますが、女将さんの本業の調子が悪くなり、土地代や工事費、果ては従業員の給料の支払いが滞つて来てどうにもならなくなります。ついに四十九年、神近氏自身が東京に出て行つてこの料亭一条の経営の建て直しに力を貸すことになるのです。建て直しは見事に成功するのですが、これを見ていたのが女将さんの女婿でミネベアの社長をしていた高橋高見氏。その手腕に惚れ込んでミネベアに引き抜きます。ミネベア・グループの不動産、リース、証券、生命保険、損害保険担当の役員と言うことになるのです。ミネベアと言う会社の本業は精密機械の製造ですが、高橋高見と言う人は大変な実業家で、最近「一〇年先を駆け抜けた男」と言う伝記が出版されています。他方、企業の乗っ取り屋と異名を取つた程の相当あくどい商売もやる人だつたようで、ここでは色んな勉強が出来たようです。神近氏の経営者としての人間形成に恩のあつたこの二

人は、奇しくも平成元年五月一〇日の同じ日に亡くなっています。私がこちらへ来るための二度目の面接に来たのが五月十一日でしたが、機中で、お二人の通夜に参列して来た、と言つ神近氏に会つたのも奇遇でした。

大変な勉強家ではあるようです。例えば、作家の宇野千代さんと親交があるそうですが、千代さんが骨董に詳しいことから骨董の勉強を始め、何でも骨董の博物館を上から下まで繰り返し歩き回つて見る目を磨いたとのこと。今では見るだけで骨董の値打ちが分かるようになったと言いますから、センスもあつたのでしょうか、それだけ努力もしている人なのです。経理や法律、建築から土木まで、置かれた立場で勉強し、知識を蓄積してきたのだと思います。色んな分野に詳しいことに驚かされます。

オランダ村の構想が生まれたのはミネベア時代のこと、五十四年にヨーロッパに出張した時だったと言われます。地中海の避暑地でバカンスを楽しんでいる人を見ながら、同行のオランダ人から「地中海は素晴らしいだろう。日本にはこんなに綺麗なところはるか」と聞かれたのに対し「自分の生まれ育つた大村湾はこれ以上に美しい」と答え

たものの、「それではこれだけの人が集まって来るか」と聞かれて返答に困ったと言います。大村湾を何処にも負けない素晴らしいリゾート地にしよう、と言う構想はこの時に出来たのだそうです。伝説的に言えば、帰りの飛行機の中で一睡もせずペンを走らせ、原稿用紙四百枚分のオランダ村構想を書き上げたと言われます。

構想の基本になったのがオランダ人の海との戦い、干拓で示した自然と人間の共存の思想でした。この干拓は四〇〇年も昔から始まっている訳ですが、機械力のない時代のこと、人力で土を掘って遠浅の海の中に堤防を作ると、風車のポンプで中の海水を汲み上げて外に出す。海の底を陸地にしてからは長い時間雨に晒して自然の力で塩抜きをし、雑草を植え、次に樹木を植えて行きます。街造りを始めるのは、この木が大きくなってからで、干拓してから三〇年以上も経ってからだと言います。この堤防もコンクリートではありません。浜辺というところは陸の生態系と海の生態系が混じり合うところなのだそうで、ここをコンクリートで遮断すると、生態系が狂って来るのだそうです。ですから、オランダの堤防は砂と石が主体とのこと。また堤防は水を遮るものではありません

が、強さで遮ろうとするとどうしても壊れる。自然と共存しようとする、砂丘が一番良いということになると言われます。最近の日本人には自然との触れ合いが少なくなっているのではないか。人間が作ったコンクリートの空間で育った子供の考え方、価値観が世界に通用するのか。自然の怖さと共にその素晴らしさを教え、自然との調和を教えるべきではないのか。

こうして地元に戻った神近氏は協力者探しに奔走することになります。百万坪の土地と一十億円の金が欲しい、と言う神近氏は、当時誇大妄想狂みに言われたと言われます。その内、友人で西彼町で料理屋をやっていた平井勇氏と組んで事業をやることにし、平井氏の土地三〇〇〇坪を借りることにして、まず小さいながらも土地が出来ました。やる以上立派な設計をせねばならぬ、と言うことで町役場の役人時代に知り合った日本設計事務所の池田武邦社長に頼みに行ったそうです。池田氏は戦時中佐世保に勤務し、多くの戦友を亡くしていることから、大村湾で余生を送ろうとしていられたそうです。神近氏の計画に賛同し、設計料はお布施で良い、と言ってくれたとのこと。お布施と言

うことは、払える人は沢山出すけれど、払えない人は気持ちだけで良い、と言う意味です。次は建築費になりますが、これはミネベア時代に知り合った日本国土開発と言う会社の久下さんと言う副社長のところに相談に行きました。この誇大妄想狂を信用して良いのかどうか、国土の社内では相当問題になったようですが、結局、久下さんの個人保証みたいな形で六億円の建築費が、元本・利子とも三年後払い、と言うことで出来たのだそうです。この辺は人との付き合いがどれだけ大切なものなのか、の典型みたいなものでしょう。最後は運転資金の二億五千万円。長崎の地方銀行の大手である親和銀行に頼みに行ったら、担保がなければ金は貸せぬ、とこれは当たり前の話。地元優良企業の長崎バスの保証を取って来たら貸してやろう、と言うことになり、長崎バスに飛び込んだと言います。ここの社長が松田晴一氏。松田氏は親和銀行と張り合っている地方銀行の十八銀行の出身、と言うより十八銀行の創始者の末裔です。ライバル銀行に保証なんか出せるか、と言うことだったそうですが、結局、個人保証ならして上げよう、と言うことになったと言いますから、こんな危なっかしい計画を信用し、将来性を買った松田

社長にも大いに先見の明があったと言うことになるのでしよう。これも伝説の部類に入りますが、神近氏は個人保証を引き受けて貰った後、松田社長の社長室から生命保険会社に直行し、自分に三億円の生命保険を掛けて、証書を松田社長に預けたと言います。

こうして昭和五十八年に開場した長崎オランダ村は、村とは言っても風車が一つとレストランがあるだけのもの。六百円の入場料を払って入っても、門を入れば何もなくて、お客さんから、オランダ村って何処にあるのか、と叱られるほどだったと言いますが、次々と増築を重ね、今や一〇ヘクタールの土地に五六の建物が立ち並ぶ威容。入場者数も初年度三五万人だったのが昨年度は一八〇万人、今年は一〇〇万人を超えようと言うのですから、短い時間の間に急成長したものです。創始期の頃、色んな人に世話になったと言うことで、最初からお付き合い頂いているこれらの方々とは今以って付き合いが深く、事業拡張の際も主な発注先になっています。最初に井戸を掘った人を忘れてはならない、と言う精神を大切にしています。これらの方たちも最初は冒険だったけど、今は収穫期に入っていると云えるのではないのでしょうか。開業二年目、売り上げが八億円

に満たない年に、八億円の広告費を払っていたと言いますから、最初から相当シツカリした見通しと信念があつたものと思われれます。

開場して間もなく、日本興業銀行が融資してくれることになって、金の心配がなくなりました。これは長崎出身の中山素平氏辺りが目を付けてくれた、と言うことではないか、と言うのが私の想像ですが、それでも大変な審査をパスして決済が下りたとのことで、今でも地獄の審査と語り継がれています。審査結果の銀行の判定が、類似する事業がないこと、新事業への挑戦であること、今後の日本に必要な事業と判断すること、の三つだったと言いますから、興銀さんも仲々やるものです。こうして神近社長の最初の夢であつた一千億円の金が出来ました。佐世保に工業用地として造成されていた一五二万坪の土地を県から譲り受け、ハウステンボス計画を進めていると言うことなのです。ここはホテル、別荘、住宅地を含む長期滞在型のリゾート基地。本体のオランダ村の数倍の規模で、オランダ各地から色々な建物を持って来て、ここに実際に人の住むオランダの町を一つ作ってしまおうと言う訳です。勿論、見物客、買い物客にも来て頂

く訳で、平成四年春オーブンの予定。初年度入場者四百万人、売り上げ五百億円を目標にしています。

こうして見て来ると、長崎オランダ村のロケーションの問題は全くの偶然。別に計算づくでこの土地が選ばれた訳ではないようです。大村湾の美しさを世の中に紹介しようと言う意図はあったにしろ、ここを選んだ理由は、社長の地元だったことと、そこに土地を持っている人がいた、と言うだけのことのようです。やはりこの成功の理由は、本物を見せようとする姿勢と、自然を大切にしようと言うフィロソフィーが皆さんに受けたと言うことなのでしょう。実際、中の建物は現にオランダに現存する塔とか、お城とか、風車とか、教会とか、田舎の家とかをそのまま模写して作ってあります。最初の頃、建築費を少しでも安く上げようと、本物から外れた建物を作ろうとしたところ、コンサルタントのオランダ人の猛烈な反対に遭い、本物志向の方針が確立されたとのことです。オランダの紹介に貢献しているから、と言うことなのでしょう、オランダ政府とも大変に仲が良く、現在、会長をしている長崎バスの松田社長はオランダの名誉領事。

何かあるとオランダの王室が来てくれるし、オランダ大使なんかも良く来られているようです。ハウステンボスと言うのはオランダ語で「森の家」と言う意味ですが、オランダ王宮の愛称です。この建物を其の儘の形で作ってこのリゾートのシンボルにしようとしているのです。現存する王宮のまがい物を作らせてくれるなんて、やはり仲の良さで信用の深さを示すものではないでしょうか。また、長崎オランダ村の海岸線にはコンクリートは全く使われていません。皆、木とか石とか、張り出しの栈橋。道もコンクリートではなく、レンガを並べた舗装になっています。これは雨水が一度に流れて、海を汚さないようにすると共に、海と陸の生態系の接点を守ろうとの配慮なのだそうで、この辺を見ても自然との共存と言うフィロソフィーは本物なんだな、と言う感じがします。ハウステンボス計画を進めて行くに当たって、十五人委員会と言う委員会が出来ています。木村尚三郎、斉藤茂太、森本哲郎、五代利矢子と言った日本を代表する文化人を集めて顧問格になって貰い、時々委員会を開いてご意見を頂き、計画の中に取り入れて行くこと、と言うわけです。一つには有名人の名前を借りようとするPRの上手さか、とも

思いましたが、実際にこの委員会を傍聴してみると、出される意見も実際的かつ具体的で、役に立っていると思うし、こうした広い意見を容れて良いものを作ろうとする神近社長の姿勢が窺えて偉いものだと思います。どうかするとこうした創始者は唯我独尊に陥り、自分が正しいんだ、廻りからゴチャゴチャ言わないでくれ、と言いたくなり勝ちなのではないか、と思いますから。

この事業は、最初にドーンと大きなお金を掛けて、後から回収して行く事業。作るだけ作っても人が来てくれなければ、投資した金は回収できず、事業は失敗と言うことになりません。だから、金が掛かっても最初から良いものを作ろうとする姿勢が大切なのでしょうが、注文を頂いてから物を作る受注産業で育って来た私から見れば、何て危ないかしい事業なんだろう、銀行もこんな事業に良く金を貸すものだ、と思いたくなるのです。でもこんな事業に入ってしまったからには、こんなことは言うていられません。何しろ今や一二〇億円もの金を掛けてゴルフ場を造ろうとしているのですから。私の場合、もっと困ることは、自然との共存と言うフィロソフィーを売り物にしているグループの

中でゴルフ場を造ろうとしていること。何だかんだ言ってもゴルフ場造りは自然破壊です。だからと言って、万が一にも周囲の住民に迷惑を掛けることがあっては本体の名に拘わって来ます。本気で公害なしのゴルフ場を造るのは大変なんだと言うことをつくづく感じていくこの頃です。

（平成二年一月）

「ハウステンボス 環境未来都市の実験」

【溶融塩および高温科学（ISSN0916-1589）, vol.44, no.2(2001)】

112

ハウステンボスの事業理念には殆ど惚れた。自然環境を大切にしたい理想的な未来の都市を作って、それを経営的に成り立たせて見よう、と言う事業理念。この事業の立ち上げに参画できたのは幸せだった。三菱重工業にいたのでは決して得られない経験だった。三菱重工業での

三〇年間よりハウステンボスでの一〇年間の方が密度が濃い仕事が出来たと思う。経済的には大分損をしたが、貴重な経験が出来た。

この事業の考え方を敷衍するため、何度となく講演をした。客寄せの営業のためのものもあったが、お越しになったお客様への講演もあったし、外へ出ての講演も多かった。最初は池田武邦先生や神近義邦社長の受け売りのな講演だったが、その内に自分の言葉で信念を持つて話をしていた。

本稿は、その集大成とも言えるもので、「溶融塩および高温科学」の学会がハウステンボスで開催されたとき、学会の中で話したものである。レジメを提出したら学会誌に掲載され、登録されて公式のものになった。

一・理想的な未来の街とは何か？

ハウステンボスは単なるテーマパークではない。ハウステンボスが目指しているものは何なのか。ひと言で言えば、未来の理想的な街を作ろうとしている、と言える。人間は自然の一部である。自然と離れたところで長く生活していると、精神的にも肉体的にもオカシクなると言われている。人間は美しい自然に近いところで、自然と接しながら生活するのが理想的な生き方ではないのだろうか。自然に囲まれ、自然の空気の中で、自分の筋肉を使って、気持ちの良い汗をかきながら生活するのが本当に人間らしい理想の生活ではないだろうか。そして、その生活は、自然を汚さない、自然に優しいものでなくてはならない。若し、本気でこんな生活をしようと思ったら、原始時代の生活に戻れ、と言うことになるのかも知れないが、これだけ文明が進んで、人間が文明に馴れ親しんだ生活をして来ていると、今更、原始時代の生活に戻ることは出来ない。こうした理想的な生活をするためには、人間が人間の知恵で培ってきた現代のハイテクの力を借りなければならぬ。だから理想的な未来の街というのは、目に見える街の表面はあく

まで自然を生かしたエコロジカルで美しい環境であって、目に見えないところで現代の最高のハイテクが、言わば隠し味になって街の機能を支えている、そういう街ではないかと考える。

二・二十一世紀は配分の時代

二十一世紀は配分の時代ではないか、と思う。一九五〇年に二六億人だった地球の総人口が現在六〇億人。昨二〇〇〇年の十月十二日に世界の人口が六〇億人を超えた。五〇年で二倍以上も増えたことになる。一八〇〇年に一〇億人だった地球人口が、倍の二〇億人になったのは、一三〇年後の一九三〇年だったと言われる。人口増加のスピードが加速されている様子が窺える。現在、毎日三〇万人の人が生まれ、五万人の人が死んでいる計算になっている。このまま増加すると、二〇五〇年には八九億人、二二〇〇年には一〇四億人になると予想されている。自然界には「種の個体数の調節」と言う仕組みがある。一つの種が増え過ぎると、自然淘汰の力が働いて、その数を調整しようと

する。一種の神の摂理と言える。ところが人間は、科学の力でこの自然淘汰の仕組みを克服して、言わば神の摂理に背いて、増え過ぎていてのではないか、と思う。そして、増え過ぎた人間が地球の自然を食い潰している。人間は地球のお邪魔虫になって来ていると思う。その地球のお邪魔虫の人間が増えることで、環境破壊の速度が早まるし、食糧危機も深刻になる。食料について言えば、人口が増えることによる量の問題もさることながら、質の問題もある。昔は、日本人は米、所謂穀物、つまり澱粉中心の食生活をしてきたが、今や六〇〜六五％は澱粉以外の食料を摂取している。鶏肉や豚肉を作るには、一キロ当たり三〜四キロの穀物が必要になる。これが牛肉になると一キロ当たり七〜八キロの穀物が必要だと言われている。穀物中心の生活をしている一二億人とも一三億人とも言われる中国人の食生活が、牛肉中心になって行ったとすると、それだけでも世界中で大きな食糧不足が生じるのではないか。限られた資源や食料を上手に配分することが出来なければ、奪い合いの戦争が始まる恐ろしい時代が来るかも知れない。地球環境にとって、この人口問題が最大の問題なのではないか。

自然破壊の速度は押さえねばならないし、むしろ破壊した自然を回復することに力を
入れなければならない。

三・ハウステンボスの水に対する配慮

土壌改良

ハウステンボスの街の表面は、オランダの街並みを借りて、緑と花と水とレンガの建
物で作られた美しい環境が作られている。一方、街の地下には三二〇メートルのトン
ネルが縦横に張り巡らされていて、ここに上下水道、電気、エネルギー、通信、光ファ
イバーが通り、目に見えないところで現代の最高のハイテクが街の機能を支えている。
現在ハウステンボスがあるこの土地は古くからの埋立地だった。更に、長崎県が列島改
造論の掛け声に乗って、一九六九年から八年がかりで一九二億円の金をかけて埋め立て
を進め、工場を誘致したが誘致に失敗した。この土地は、大村湾の入り口を塞いでいる
針尾島の内側にある。ここに工場が出来て工場排水を流し始めたら、大村湾の水質は急

激に悪化して大変なことになったと思われる。誘致に乗って来てくれる工場がなくて幸せだったと言えるかも知れない。長い間放置されて県のお荷物になっていた土地だった。土地も荒れ放題に荒れていて、ぺんぺん草も生えない、腐った土地だった。ここに二〇万トンの客土を入れ、有機堆肥やピートモスを入れて土壌改良を行い、全長六キロの運河を掘って水を入れて生態系の復活を図った。四〇万本の木と三〇万本の花を植え、美しい自然を取り戻す努力をした。

今やかつての死んだ土地は、完全に生き返っている。生態系も完全に回復している。

石積みの護岸とレンガの舗装

この街の陸と水の境目には、コンクリートの部分は一メートルもない。埋立地のコンクリートだった部分は全部壊して、全て石積みとか、木とか、土にした。海と陸との境目と言うのは海の微生物と陸の微生物が交わる、生態系的に非常に微妙で大切な部分である。この境目をコンクリートで遮ってしまうと、その部分が死んだ土地になってしまう、これが海と陸の両方に広がって行くと言われる。この辺は、オランダ人が干拓によ

って自分の国を作り上げて来た国土開発の手法に習って街づくりをして来ている。

オランダはライン川の河口にある三角州の上に出来た国故、海は遠浅である。オランダ人たちは四〇〇年の昔から自分たちの力で土地を作り出して来た。まず、遠浅の湾の入り口を堤防で塞き止める。この堤防もコンクリートではなくて石を積み上げた堤防にしてある。オランダでは石が出ないので、スイスやスカンジナビアから買って運んで来た。当時はコンクリートがなかったのかも知れないが、いずれにしてもコンクリートなら五〇年とか一〇〇年で劣化する。自然の石なら永久に持つ。それだけ長い眼でものを考えている。更に、石積みだと海と陸の境目の微妙で大切な生態系を守ることが出来る。オランダの国土の真ん中にアイセル湖という人工の大きな湖があって、この人工湖を海から塞き止めている大堤防があるが、これは全長三〇キロ以上のもので、全部石積みになっている。こうして海水を塞き止めておいて、風車の力で中の海水を掻き出す。海の底だった地面を雨に打たせ、塩が抜けるのを待つて草を植え、樹木を植えて行つた。この木が三〇年も経つて、大きく育つて森になったら、これを切り開いて教会を作り、学

校を作り、人が住む家を作って、街を作って行った。従って、オランダの町は人工的に作られた自然の中に出てきている。こうして、人工的に作られた海面より低い土地が、オランダ国土の四〇%に上ると言われている。オランダには、地球は神様が作ったけれど、オランダはオランダ人が作った」と言う言葉があつて、オランダ人たちはこの言葉を誇りにしているが、ハウステンボスの街づくりの手法は、このオランダ人の街づくりの手法、と言うかコンセプトを見習つて来ている。

街の表面をレンガで覆つてあるのも自然に対する配慮。これをコンクリートやアスファルトで覆つてしまうと、雨水が地表の汚れを洗い流して、これが海や運河に流れ込んで海を汚すが、レンガ敷きにして、レンガとレンガの間を土や砂で埋めておくと、雨が一旦地面に浸み込んで、水は土を通つて自然に浄化されて海に流れ出て行く。また、アスファルトで覆われた道路の下は極端な水不足の状態になり砂漠状態になって、ここでも生態系が破壊されていたが、表面がレンガだと水が石の下に浸み込むので、生態系を破壊しないで済む。

水浄化システムと中水の利用

生活排水も一滴も直接海に流れ出ないようになっている。一度使った水は、通常なら二次処理までやって排水するが、ハウステンボスでは三次処理までやった上に高度処理を行い、所謂、中水として再利用する。木や花に散水したり、トイレの洗浄水に使ったり、冷却水として使い、それでも余った水は地面に浸透させたり、蒸発させたりして自然に返している。大村湾の海水のBOD値は二PPM程度で、法律的には二〇PPM迄の水を流しても良いことになっているが、ハウステンボスから出る水は、一PPMかそれ以下になっていて、確実に大村湾の水よりも綺麗な水になっている。この街は自然を綺麗にしていつている街だと言える。

ハウステンボスの隣に、米軍の宿舎がある。ここから出る水は二〇PPMの基準で排水されている。ハウステンボスが出来て最初の頃、こちらは綺麗な水を排水しているのに、隣の米軍の施設からは汚い水が排水されるのはオカシイではないか、と言う疑問を投げかけたことがあったが、この種の施設は日本国の税金で作られている。法律で作ら

れた基準以上のことをするのは税金の無駄遣いだ、と言う議論になった。経済学とか経済成長とか、経済発展とか、GDPとか言うものの中に、何かの形で「環境」と言う関数を入れねばならない時代が来ているのではないか、と考える。

淡水化装置（逆浸透方式）

この街には外部からの水の供給が止まった時に、自分で水を供給する設備がある。海水を真水にする淡水化装置が作られている。これまでに水不足の際、実際に二度ほど稼動した。作り出す水は値段的には高いものにつくが、お金さえ掛ければ周辺の市民に迷惑を掛けないで済むし、施設を休ませないで運営できる。この淡水化装置は、石油を焚いて真水を作るのではなく、浸透膜を利用した逆浸透方式なので、自然に配慮した装置だと言える。

こうした水に対する配慮が評価されて、平成十一年度の「水資源功績者」の表彰を受けた。これは当時の国土庁が、水資源行政の推進に関して特に顕著な功労のあった人や事業所を表彰したもので、民間ではハウステンボスが唯一の企業だった。水に関しては、

水のリサイクルシステムが評価されて、平成七年に環境庁から「水環境賞」の表彰を受けている。また、運河の水の入れ替えに潮位差を利用して省エネを実現したことが評価されて、平成九年に通産省から「省エネルギーセンター会長賞」を受賞している。

四・エネルギーに対する配慮

天然ガスと廃熱利用の熱供給

エネルギーは天然ガスと電気である。ハウステンボスを計画する段階では、環境を一番汚染しない熱源は天然ガスだったので、西部ガスに依頼して天然ガスを導入してもらった。天然ガスからガスタービン発電で電気を作り、発電中の廃熱を利用したボイラーで一七五度の蒸気を作る。所謂コ・ジェネで作った蒸気を使って暖房をする。この蒸気を蒸気吸収式冷凍機の熱源にして七度の冷水を作り、これで冷たい空気を作って、冷房に使う。必要な蒸気を作る分だけの発電をして、自家発電で出来る電気で足りない分を九州電力から買っている。平均すると、自分で賄っている電気の量は、全体の三五%程

度と言う数字が出ている。ガスタービンの熱効率は二五％程度と言われているが、コージェネで作る蒸気の利用分が四五％あるので、天然ガスの熱効率は七〇％以上になっている。逆に、蒸気が足りない時は、直焚きのボイラーで蒸気を作る。この部分の熱効率は九〇％と言われるので、天然ガスのエネルギーは相当効率良く使われていることが判る。蒸気吸収式冷凍機はフロンガスを使わず、水と熱から冷たい水を作る装置なので、オゾン層の破壊といった自然破壊をしないで済む。

燃料電池のフィールドテスト

電気は大部分、九州電力から買っているが、平成十一年からNEDO（通産省傘下の新エネルギー・産業技術総合開発機構）の補助を貰って「先導的高効率エネルギーシステム・フィールドテスト事業」なるものに参画し、場内に燃料電池を設置して、フィールドテストをやっている。まだ実験段階で、二〇〇ワットの設備だが、出来た電気は勿論、実際の電源として使っている。一緒に出来る温水の内、九〇度の高熱温水は熱源として使い、六〇度の低熱温水はホテルのプールや温室に利用している。これらがフル稼

働すると、熱効率八〇%を達成することが出来る。

太陽電池の研究

太陽電池についても研究している。ハウステンボスの駐車場全体に屋根をつけて、その屋根を全部太陽光電池のパネルにすれば、ハウステンボス全体が使う電気は賄える、と言う試算は出来ているが、お金の問題など解決されていない問題が残っていて、まだ実際には手がつけられていない。近い将来、これもNEDOがやっているフィールドテストに参画出来ると良いな、と考えている。

五・ゴミに対する配慮

ハウステンボスからは一日平均約七トンのゴミが出る。その内三トンが所謂生ゴミ。これを完全に分別し、微生物と一定の熱環境を与え、攪拌などの作業を加えて、全部堆肥にして現実に場内のお花畑で使っている。焼却するゴミが減った分、重油の使用量も減って、排出する二酸化炭素やNO_x、SO_xの量も減らしている。このシステムをコ

ンポスト処理と呼んでいるが、この工場をゴルフ場のすぐ近くに持っている。これが平成十年度の、省エネルギー優秀事例と言うことになり、平成十年二月に通産大臣賞を受けた。このコンポスト・システムについては「ハウステンボス・リサイクル・コンポスト・システム」と言う名称でコンサルティング販売を行っているが、平成十二年四月に鹿児島で実用化第一号が誕生した。

六・エコロジィとエコノミーが共存する街

この様な、理想的と言うか、理想に近い街は自然発生的に出来るものではない。国や地方自治体の力で作ることも困難ではないかと思われる。それなら一つの企業がこういう理想的な街を作って、そのサンプルを世の中の人に示し、これを経営的に成り立たせてみようではないか、こんな街が現実に存在できる、と言うことを世界中の人に知って貰おうではないか、と言うのが、ハウステンボスがやるうとしてしていることである。エコノミーとエコロジィを両立させ、これをテクノロジィが支える街を作ろうとしている。

自然環境を守るに止まらず、人間がこれまで破壊して来た自然環境を改善して行こうと
している。それには現代の最高のハイテクの力が必要になる。それもテクノロジは眼
に見えないところで、言わば隠し味として働かせる。こんな考え方で事業を進めている
企業は日本にはないと思うし、世界中にもないのではないかと思う。ハウステンボスは
「理想的な未来の街を作って、これを経営的に成り立たせて行こう」と言う新しい試み
の壮大な実験に挑戦しつつある、と言える。国内的にも国際的にも注目を集めていて、
関心を呼んでおり、見学者も多い。ハウステンボスのことが段々世の中に知られるよう
になり、ここでやっている世界に類のない壮大な実験が成功したら面白いではないか、
と注目してくれている人が増えて来ている。

七・将来のハウステンボスの姿

人が住む街

本来、街には住人がいる。街の住人が夫々に経済活動を営んで、その街を成り立たせ

ている。この街も将来は人が住む街にして行く計画だった。ハウステンボスは九年前の平成四年三月に、第一期が完成したところでオープンした。すぐに第二期・第三期に入る計画を持っていた。第三期計画まで完成すると、実際に住民がいて、その住民の日常生活実需を中心に街の経済を成り立たせて行く計画だったが、オープンの時期が丁度バブル経済が弾けた時期に重なってしまい、その後も景気が回復しない中で、それ以上の投資が出来ず、計画が進まないでいる。その後、ホテルや施設を追加したり、場外にホテルを作つて貰つたりして、現在一・五期程度の段階だが、まだ街には住人がいない。周囲に万の単位で人が住む街が出来、この人達が生活のためにこの街でお金を使つてくれて、街の経済を支えてくれるのが将来の姿である。

モナコやニースのような観光都市

ハウステンボスの敷地の面積は一五二ヘクタールで、これは地中海沿岸の観光都市、モナコやニースと同じ程度の広さである。これらの街の人達は、自分たちが実際に住んで経済活動を行い、その上に観光客に来て貰つて街を成り立たせている。ハウステンボ

又も将来は、実際に人が住んで、観光で成り立つような街に成長させて行きたいと考えている。

入場料が要らない街

本当の街なら、入場料を取るなんてことはない。我々の将来の夢は、入場料の要らない本当の街に育て上げることだが、今は未だ住人がいない。住人を作る努力は着々と進めて来ている。ハウステンボスを見下ろす丘にマンションを建てつつある。現在四棟目まで完成し、全部売り切れて五百人ほどの住人が出来た。将来、大村湾を囲んで住空間が出来、何万の単位で住人が出来て、その住人たちがこの街を使って経済活動をしていくようになるれば、入場料を頂かなくても経営的に成り立つ本当の街が出来る。

八・観光を手段とした街の経営

観光は経営上の手段

住人がいない上に、この街には自然環境の保護や街のシステムを作るために回収の出

来ない大きな投資がなされている。こうしたお金を回収するために入場料を頂戴し、ホテルやレストランや売店でお金を使って貰って街を成り立たせて行こうとしている。従って、この事業の中で観光の部分は言わば手段と言えるが、お越しになるお客様に喜んで頂くために様々の努力がなされている。

本物を見て頂く努力

現存するオランダの建築物を原寸大に再現

歴史的な木造帆船を原寸大に建造

レンガや装飾物は全てオランダ製

四季を彩る花や木々

白鳥や自然の昆虫類

オランダから輸入したフリースアン・ホース

世界各国からエンターテナーを招聘 等

オランダを中心とする欧州の歴史・文化の紹介

美術品の紹介（自家コレクションと借用美術品の紹介）

アミューズメント施設（一〇館）・教育目的中心

各種博物館 一二館

食の文化の紹介（レストラン五〇軒）

ショッピング文化の紹介（七〇店舗）

ホテル・ライフの提案（場内ホテル 四軒、場外ホテル 三軒）

ライデン大学より留学生の受け入れ（年間二〇人）

入場者数

初年度（平成四年度） 三百七十五万人

二年目（平成五年度） 三百九十万人

三年目（平成六年度） 三百八十三万人（関西大地震）

四年目（平成七年度） 四百三万人

五年目（平成八年度） 四百二十五万人

六年目（平成九年度） 四百十三万人（アジア経済の混乱）

七年目（平成十年度） 四百三万人（不況の進行）

八年目（平成十一年度） 二百九十万入

九年目（平成十二年度） 二百八十万入（予想）

アジアの観光拠点

長崎・佐世保は日本の最西端に当たるが、東南アジアの中心に位置する。早くから中国系アジア人、韓国人に対する営業活動を行って来たが、その効果があつて、現在一〇％程度はアジアからの観光客を受け入れている。将来は中国本土からの観光客が増えることを期待している。

九・二〇〇〇年の時を刻む街

地域活性化の手段

ハウステンボスは観光を手段として街を経営的に成り立たせようとしているが、観光

に限らず、他の手段を使つてもこんな街が成り立つかも知れない。農業でも林業でも水産業でも、工夫をすればIT産業や製造業でも街を経営的に成り立たせる手段になり得るかも知れない。自然を大切にしたい理想的な街、第二・第三のハウステンボスが日本の各地に出来ていたら素晴らしいことではないか、と考える。そのためにもこの実験は何としても成功させたいと考えている。

不況の中の経営努力

バブル経済の破綻に続く長期の不況の中で、日本中のテーマパークが苦戦を強いられ、ている。ハウステンボスもまだ赤字経営を脱却できないでいるが、健闘している方だと言えるのではないか。このまま自助努力を続けて、三年後には黒字体質にして、一人前の会社に仕上げたいと努力を重ねている。幸い、この事業は観光業とは言いながら、単なる人集めのためのテーマパークではない。五年先、十年先を見れば必ず世の中の役に立つ事業だと信じている。全国の一兆円企業と言われる大企業が、三〇社も資本参加してくれ、長崎県や佐世保市、西彼町の地方自治体からも資本の参加を始め種々の援助を

得て第三セクターになっている。また各界のトップを始め全国の皆さんが、この事業に関心を持ってくれているのは、これは未来の産業ではないか、この世界でも例のない壮大な実験が成功したら面白ではないか、と言う応援の気持ちからではないか、と思う。出来たばかりでまだ足腰がシツカリ出来上がっていない会社だが、イキナリ不況の波を浴びてここ一・三年は苦しい時期が続くが、是非応援をお願いしたい。

千年の時を刻む街

この街は一〇〇〇年の時を刻む街として作られている。何故オランダの街なのか、と言う疑問があるかも知れないが、今、日本で一番日本的と言われる街は京都とか奈良だと思う。京都や奈良は中国の長安を真似て作られた街。京都の前身の平安京が出来たのが西暦七百九十四年。当時、外国の街を模倣して作られた街が一二〇〇年経ったら、一番日本らしい街と言われている。ハウステンボスも一〇〇〇年経ったら、一番日本らしい街と言われているかも知れない。一〇〇〇年はオーバーでも、少なくとも十年後、二十年後を見据えて頑張っている。日本の西の果ての、この長崎・佐世保でこういうこと

をやるう、成功させよう、と努力している人間の集団がいることを知って頂き、上手く行くように見守って欲しい。

(平成十三年五月二十四日講演)

買い物旅行

物を売ると言うことは、物を買うと言うことです。何だか禅問答みたいですが、難しいことではありません。当たり前のことですが、商売として物を売ろうとすると、何かを買って来なければなりません。これに値をつけて店に出して売ります。出来るだけ安く仕入れて来て、売れそうな値段ギリギリの高い線を探し出して、出来るだけ高い値を付ける。何時売れるか分からないのですから、金利の負担もあります。お店を開くために必要なお金もかかっているし、店員の給料も払わねばなりません。儲けも出さないと何のためにこんなことをやっているのか分からない、と言う訳で、出来るだけ高い値段で売ろうと努力するのは当たり前のことなのですが、私はこれに抵抗を感じるのですから困ったものです。物を作って汗をかいた分だけお代を頂戴すればそれで良い、それ

以上の暴利は要らないという考えが、私の身体の根底にあるようなのです。考えて見れば、仕入れと販売の間の言わば危険の部分が儲けになるわけですから、別に暴利ではないのですが、心情的にどうにもシツクリ来ないのです。デザインを一寸変えると高そうに見えるとか、包装を工夫すると高価な商品に見えるとか、ましてや陳列を上手くやることによって要らない物まで買わせようとするに至っては、これは詐欺ではないか、と許せない気すらするのです。こんなことは商人にとつては常識以前の問題ですから、この世界にいる人たちは私のこんな考えは理解できないでしょう。この世界で有名なデザイナー達がこのプロジェクトを手伝いに来てくれます。この人たちは、どういう仕掛けをすれば売れるのか、を考えるのが商売です。こんな人たちに向かって、「冗談混じりには言いながら詐欺師呼ばわりする人なんていないようです。ましてやそれが販売本部長の名刺を持っているのですから、不思議に思われても仕方ありません。」

この点について専門家の話を聞いてみると、どうやらこういうことらしいのです。

終戦後の物のない時代から徐々に立ち直って直ぐの頃（もう「昔は」と言っても良い

のかも知れませんが）は生産が主役。良い製品さえ作れば売れていました。良い物を如何に安く作るか、が勝負の時代でした。機能美と言って、使い易い物、能率の良い物が美しい、良いデザインだとされてきました。これが一九八〇年代になると、見せ方や売り方が大切になって来ます。物余りの時代になって、要らない物を買わせる時代、衝動買いを誘発させる時代になったと言うことらしいのです。製品と言うより商品として売ることになって来て、物の中身もさることながら、パッケージとかディスプレイによる見せ方とかが販売の重要な要素になって来たのです。私にとっては許せない時代になって来たと言う訳です。ところが今やその時代も過ぎて、買い手の気持ちを大切に作る時代、如何にして生活者に買おうという気持ちになって貰うか、が勝負の時代になって来ていると言います。人によるサービスや環境を作ることによって買う気になって貰う。今流行のラルフ・ローレン辺りが良い例なのだそうです（偉そうに言っているけど、この世界に入っていないければラルフ・ローレンなんて知らなかったし、全く関心を持たなかったに違いありません）。ラルフ・ローレンの売り方は、売り場にギッシリ商品を積み上

げるのではなく、店全体をリビング・ルームに見立てて、古い家具や骨董品をユツタリと置き、その中に商品がサラリと置いてある。飾ってあるのか陳列してあるのか分からない。こつした売り方が一番持て囃されているのです。オランダ村の売り方はどうやら、この環境で売って行くやり方です。店の外観は古いオランダのレンガ造りの建物で、雰囲気はタツプリ出ているし、店の内装も外国のデザイナーを連れて来たりして、それはそれは凄いお金を掛けています。環境の点ではこれ以上ないくらいの舞台を作っていると言つても言い過ぎではありません。この売り方が現代の小売業の先端を行っていると言えるのかも知れません。ところがこんな販売の最先端に放り込まれた私は、実は製品中心の、小売業で言えば石器時代の感覚の持ち主だった、と言つて、この辺に不幸の始まりがあるようです。新米の販売本部長が、訳のわからないままに「お客の立場になつて接客しよう」とか「店を綺麗に魅力的にしよう」とか精神論を言っていたのは、偶然時代に合っていたと言つことになります。

これらの店でここを訪れる旅人にお土産を買つて賣おうと言つて訳です。お土産なんて

「旅の良い思い出に」なんて言いますが、元々不要で無駄なもの。衝動買いをさせるのが目的とすれば、私の主義とはドンドン離れて行くことになります。ハウステンボスに作っているこの凄い店を商品で埋めなければならぬのですが、これらの店に来る人は高い入場料を払って入って来た人達ですから、下界の街なかで売っているものを置いても面白くも何ともないし、魅力もなくて買ってもくれないでしょう。と言う訳で、ここでは他では売っていない独特なもの、所謂オリジナル商品と珍しい輸入品しか売らないと言うことにしています。一品一品のオリジナル商品を作っていくのも気が遠くなるほど大変な作業ですが、先日はオランダとイタリアに輸入品の買い付けに行つたのです。こつこつ商品捜しの一番手つ取り早い手法は、世界各地で開催されている展示会に行くことです。偶々この九月にオランダで一つ、イタリアのミラノで一つ、フローレンスで一つ展示会が開催されることが分かったので、買い付けチームを組んで出掛けて行つたと言う訳です。勿論私には売れ筋商品の見分けとか、値ごろ感の判定が出来る訳がありませんから、店頭の実験の長いベテランの若い男女一人ずつを連れ、事務担当のヘンク

君とでチームを作りました。オランダとイタリアには現地の案内役の代理店がいて、私は買った結果が上手く行かなかった時に腹を切る責任者と言つ訳。買って来た物が売れるか売れないかは神のみぞ知る、ということですから、責任者の腹の皮も相当厚くなくては堪ったものではありません。

晴海や幕張の展示会には三〇〇店から四〇〇店が出店するのだそうですが、ミラノではこれが三〇〇〇店。四十二のビルにギッシリと言つ訳で、チームの皆もビックリしていましたが、やっと三〇ほどの店で三千万円ほどの買い物をして来ました。フロレンスとオランダのユトレヒトの展示会は、これが四〇〇店と六〇〇店程度でしたからこちらには驚くほどではなく、商品選びをして同じ位の金額の仕入れをして来ました。それにしてもこの若いバイヤー達、これ位の品物ならこれ位の値段にすれば売れる、納期が三ヶ月とすればこの間にこの位の数量を買っておけば良い、と言つことが分かるのでしょうか、良いと思つたものを、これは百個、これは三百個と思ひ切り良く買って行くのです。私の主義とか根底にある感覚とかは別にしても、私にはとても出来そうにありませ

ん。売れそうな商品を選び出しても、実際に売れるか売れないか分からないのに、責任を取って大量に買い付けていくなんて私には苦痛なばかりの仕事です。ここでは役に立つ商品と言う考えは二の次で、売れそうな商品と言うのが最も大切な要素になります。自分だったら買いたいと思うかどうか、が一つの判定基準になるのでしょうか。それが、自分ならこんな役立たずのものを買う訳はないけど人は買うかしら、なんて考えながら選ぶとしたらこれは苦痛以外の何ものでもありません。こんな人が売店の親玉になっているのは不適當なのではないかと思いますが、見方によってはこの方が良いのかも知れない、と言う人もいます。商品選びをする人、所謂バイヤーが自分の選ぶ商品に自信を持って来ると、これは良い商品だから絶対に売れる、買わない方が馬鹿だ、と言う考えの方向に進み勝ちなのだそうで、こうなるとお客に対して押し付けになるので売れなくなると思います。自分でこうした信念を持たず（と言うより、持てず）店頭の販売員の意見、お客の意見を尊重して行く方が良い結果が出るんだ、とか。色んな考え方があつたものです。でも、買い物好きの人にとっては、会社の金で思い切り買い物が出るなん

てこんな楽しいことはないのかも知れませんが、ましてや、上手く行かなくても腹を切るのは責任者の本部長だ、なんて考えたら、人の金で気楽に楽しく買い物が出るのかも知れませんが。もっとも私のチームの皆は「本部長に腹を切らせてなるものか」と真剣にやってくれていました。・。

(平成三年十二月)

買い物旅行(二)

一 見本市

見本市と言うと日本では千葉の幕張、と相場が決まっているのではないかと思いますが、どうやらこのメッセは世界中で開催されているらしく、特に欧州では盛んなようです。世界中の見本市の年間予定を知らせる本がありますが、厚さが五センチほどもあります。それだけ年中何処かで見本市が開かれていると言うことです。昨年はオランダ・ユトレヒトのヤールブルースと言う市に行つて、幕張の十倍はあろうという規模にビックリしたのですが、今年はフランクフルトのメッセに行き、そのまた数倍はあろうと

思われる規模にまたまたビックリしました。フランクフルトの街の中心に六十階建てのメッセタワーが聳えていて、その周りに三階建てのメッセ専用のビルが十棟建ち並び、この中にブースが四〇〇〇はあるでしょう。このメッセは世界最大級のものだそうで、この会場を利用して次から次から色んな種類のメッセが開催され、フランクフルトは今やメッセで食っている街だ、なんていう人もいるほどです。ミラノにマチエフと言う見本市があつてこれにも行きました。フランクフルトより少し規模が落ちるけれどもイタリヤらしく洒落たものが出る市なので毎年行かせることにしています。ミラノは見本市の街になることを目指しているのか、今年行つたら町の周辺に会場の建物を幾つも準備しているようでした。今回はジラソールと言うアパレルを主体にした市も覗いて来ましたが、これも立派なもの。プレタポルテで買うのですが、別に同じものを何着も買う必要はなくて、例え一点ずつでも、ある一定額以上の纏め買いをすると卸値で売ってくれますから、大量仕入れのリスクを軽減したい我々にはありがたいやり方です。以前はこうした買い付けは社長とか常務とかが自ら出て行ってやっていたらしいのですが、そ

れだと高級なもの、質の高いものを仕入れることは出来ても、手頃な売れ筋の商品を買って来てくれない、と言う嫌いがあつたようです。あの在庫はズツと前に前の常務が買って来たものだけでチットも売れないんです、なんて言う声が聞こえます。店の人が自分で買い付けたものは商品に愛情が湧くのか、値ごろ感が良いのか、選定が良くて客の好みに合つたものを買って来るのか、良く売れる傾向にあります。自分が仕入れたものだから、と一生懸命売ると言うこともあるのかも知れません。私が店を預かつた昨年からは、買い付けには販売の第一線にいる若い人たちを出すことにしました。売り場のお客さまの近くにいる人が、客の好みや売れるものの感覚を一番良く分かつていると思つたからです。こつしたお土産やファッション関連の商品を選ぶには絶対に女性の眼が必要だと主張し、大分抵抗を受けましたが、責任者が必ず同行するから、と言うことにして社長を説得し、昨年からこれが定着しました。私は自分が出来ないから仕方がなくて始めた方法でしたが、結果が良く出ているので文句が言えなくなつていて、と言う一種の怪我の功名みたいなものです。

今年はフランクフルトから入り、ユトレヒトからミラノと三つの見本市を中心に廻りました。まず、最初の二日ぐらいはザーツと全体を見て回り、見当を付けておいて三日目位から買いに入ると言うやり方。量と値段とデリバリーの交渉をして行きます。この辺が私の出番。それとあまりに売りを重視すると、質の低い下らないものを選ぶ傾向があるので、質を高め維持する努力をさせるのも私の役目、と言うことだったのではないでしょうか。ゴルフ場を歩いても疲れないけれども、デパートを歩くとき直ぐに何だか内臓が疲れたような気持ちになり、足が重くなる私にとっては、正直なところこの手の買い物歩きは苦行ですが、張り切って歩いている若いバイヤー達の手伝いをする位の気持ちで付き合っています。二度目ともなると大分慣れて、この分なら一度来たところはもう同行は要らないだろうと思っています。来年は新しい方法を考えてやろうと考えています。

二 本音と建前

売れそうなものを買ってきて売ると言う、小売業の基本に未だ疑問を感じているのが

困ったものです。まして、衣食住関連の生活必需品ならまだしも、お土産品を売るなんて、これが本当に世の中の役に立つことなんだろうか。先日野口兄から「仮に不必要なものを売ることにしても、お客さまに買い物をする事自体に楽しみを感じて貰えばそれで良いのではないか」と言つ慰めを貰つて若干救われた思いがしたものです。文学、音楽とか絵画や落語も含めて、芸術が世の中の役に立っているのか、と言つレベルで考えると、買い物楽しみもこの範疇に入つて来るのかも知れませぬ。心の豊かさを求めるものとして価値あるものなのかも知れませんが、私には未だスッキリ割り切れないものが残っているのです。確かにお土産品の販売には違いはないけれども、私のところでは売れば良い、売りつければ良いという姿勢は全くありません。本音の部分では売り上げを上げないと困るのだけれど、建前上は買い物を楽しんで貰うことを大切にしています。可笑しな話ですが、売り上げを一番心配しなければならぬ責任者の本部長が本気で建前に近い姿勢で、現場の方が本音に近いところで仕事をしているような気がしています。私の場合、売り上げが上がって喜ぶと言つより、「売り上げが上がった」と言

って喜ぶ店長達の顔を見るのが喜びになっていくみたいです。店回りをしていると、「今日はこんなものが売れたんですよ」と嬉しそうに話してくれる子。「今日は開店後初めて店の売り上げが五〇万円を越したんですよ」と夕方態々電話してくれる子。「月の売り上げが一億円を超える店が誕生した。皆を褒めてやってくれ」と言ってくる課長。この間は閉店の間際にある店に行ったら、今日の目標の二〇〇万円まで後二万円ほど足りない、と言つので、自分でも少し買って景気をつけた後、一緒になってお客の相手をしていたら、見事に目標が達成出来て、皆でハイタッチ　　って言うんですか、バレーボールの試合で点を取るとやっている、両手を挙げて掌をパチンと合わせる挨拶　　をしながら喜び合いました。連中はやはり売るといふことに喜びを感じて一生懸命やっている。その気持ちを尊重して、出来るだけ売り易い環境を作ってあげるのが私の務めかな、なんて思っているのです。先日、日経ストアデザインと言つ日経系列の雑誌社からインタビューを受けたら、カラーの大きな顔写真入りで五ページに亘ってデカデカと記事になりました。こちらが建前と思われる部分を割りとは本気で喋っているので、この世界の人に

とっては目新しく映るのかも知れませんが。本当の小売業のプロは疑問を感じながら読んでいられる節がありますが、現在のところ、こうした施設の店舗としては、過去に例がないほど結果が良く出ているので、こんな考え方もあるのかな、と知っている人もいるのかも知れません。インタビューの中でも、本音はどこにあるのですか、何て話になりましたもの。

三 ファッションのじや

私が特に疑問を感じているのがファッションの部分です。デザイナーに高い金を払って流行を作る。美しいものが出来るのは良いけれど、それでもモデルが着ていれば確かに美しいけど、これとて美しいのみ。ケンゾーとかカンサイとか、私には奇を衒っているとは思えないのです。それより内容となるとどうなのか。モデルと言う職業は外見の美しさを見せるのが商売ですから内面はどうでも良いということなのかも知れませんが、一般の人が着たときに、着ているものは綺麗だけれど内面が貧しい、と言う面が見え隠れするものの哀れすら感じるのです。そう言えば、先日ハウステンボスでミ

ス・インターナショナルの世界大会がありました。歓迎パーティの接待役とやらに駆り出されて世界の各国から来たという美女達と話す機会がありました。話してみると、自分は美しいんだ、と言う意識が先に立つので、内容とか深みが感じられる人に出会えなくてガツカリでした。皆が皆そうではないのでしようが・・・店の子達に朝礼でこの話をして、「働いている君達の方がズツと良いよ」なんて言うものですから、販売部長の評判は又上がる訳です。

ファッションの場合はそれに加えて、年々流行を変化させることによって商売にするなんて、もう無駄としか言いようがありません。もう一つバカバカしいのがブランド志向。特別のブランドが付いているから、と言うことだけで馬鹿高い値段が付く。それを又競って買う人たちがいる。最近ではプラダとか言うイタリアのブランドが流行っているのだそうですね。イタリアで聞きましたが、これを日本人が競って買うのだそうですね。専門家に聞いたら、あのバッグのデザインは四〇年ほど前に考えられたデザインなのだそうですね、それを一寸捻ってバッグにして高い値段を付けたら馬鹿売れで、そこから中

で品切れが発生しているとか。この辺に何とも言いようのない虚しさと言うか愚かさと言うか、バカバカしさを感じるのです。買い物楽しさに金を使うとしても限度を超えているように思うのだけれど、金を持っている人はこれくらいお金を出さないと楽しみが感じられないのだろうか。女性の場合はまだ許せるとして男どもがこんなことに現を抜かしている。質実剛健なんて何処へ行ってしまったんだろうか、と嘆かわしくさえなるのです。

話は変わりますが、ここでホテルをやっている関係で、ホテルの関係者と付き合う機会があります。あの連中は初めての客を頭のとっぺんから靴の先までサツと見て、この人はどのクラスの人なのかを見分ける目を持っていなければいけないのだそうです。ひと目でサーとロードを見分けるのが一流のホテルマンなんだ、なんて言います。それによって対応の仕方を変える。上から出るか下から出るか、を変えると言うことなのでしょう。嫌な商売ですね。

今回の出張で色んなファッション関係者に会いましたが、今回の不況でファッション

界の様子が大分変わって来ている、と言っていました。通常の不況だと大抵のトップブランドと言われる部分は影響を受けないのだそうです。お金持ちは不況になってもお金持ち、と言うことだったそうですが、今回は様子が違うのだそうです。トップブランドも値段が三〇%方落ちているのだそうで、影響の少ないブランドはミッソーニ（お粗末な販売本部長はこのブランドを知りません。プラダも今回の旅行中に若い人に教えてもらってやっと話を合わせました）、ラルフ・ローレン、バーバリ位だそうです。日本の服飾関係者の話でも、この不況でブランド志向の傾向が薄れて来たとのこと。ブランドよりも、良い品物、自分の好きなものを求める傾向が出て来ているとのこと。不況を契機にブランド志向の傾向が少しでも治まれば良い方向だと思っています。

ファッション関係者にも少しずつ友達が出来ます。その内のイタリア人の一人に私の感想を話したら、全くだ、と我が意を得たと言わんばかりに口を極めてこの辺のバカバカしさを話し始めたのにビックリしました。先のプラダの話もこのイタリア人に聞いたのですが、この人がイタリアのコレティナと言う山奥の高級避暑地に行ったのだそうで

す。小さなレストランでパーティをやるから、と誘われたので、山の中なんだから、と自分はジーンズ姿で出掛けたら、女性共はゴテゴテとクリスマス・ツリーみたいに宝石を身に纏い、優雅なドレスを着て、その上、山の中だというのに高いハイヒールを履いて現れたそうで、一体何を考えているのだろうか、と自分の商売に疑問すら感じた、と面白おかしく話してくれました。こちらがお客だから話を合わせてくれたのかも知れませんが、似たような考えを持っている人、少なくとも私が感じていることを理解してくれる人がこの世界にもいることを発見して、心強い思いをしたことでした。

(平成四年十二月三日)

マイケル・ジャクソン

私がマイケル・ジャクソンの名前を知ったのは、もう十五年以上前のことになるのでしょうか。娘を通じてのことでした。激しい動きの独特な踊りと、パンチと言っ一言では表現出来ないような強烈なビートの歌が印象的でしたが、それよりもバックの仕掛け

が独特でした。こうなると音楽と言うより一つのショーですね。「スリラー」なんて気持ちの悪いお化けが沢山出てくる仕掛けになっていましたが、強烈な印象が今も残っています。多分ポリスなんてグループが出て来たのもこの頃で、やはりバックの仕掛けが大仕掛けで、我々の時代のビートルズみたいに音だけで勝負するのではなく、ビデオやテレビの普及をフルに活用して視覚に訴える手法を取ったのがこの手のグループサウンドズなんだな、と思った覚えがあります。外国で商談の途中で若いお客に、ポリスのスティング、なんて話を出して「オッ、この日本のオッさん、知ってるな」と思わせて得意になったこともありました。

マイケルはその後、ずい分長いこと人気を維持し続けていますが、最近では少し下火なのだろうか。ここ何年か日本にも来ていますね。今回で四回目の来日とか。日本辺りに来ると言うのは、日本のプロモーターが金に糸目を付けないで招んでいるのか、人気落ち目になったので本場以外で稼ごうとしているのか。

一昨年十二月の公演は日本武道館でしたかね。相変わらず入りは良かったと聞いていま

す。その時、公演の合間を縫ってハウステンボスまで来たのです。半分ご招待みたいな形にしたので、迎賓館の宿泊費用はこちら持ちにした筈です。丁度私は休んでハワイに行っていた時で、この時は会えませんでした。昼間は混乱するから、と言うことでホテルの部屋にいて貰い、夜、お客さまが引いてからアメニティと称する劇場をこのグループの為に開放したり、店も特別に開けることにしました。職業柄と言うこともあるのでしょうが、マイケルはこの種の見世物と言うかアメニティ施設が大変好きなようです。ここでは特にクリスタル・ドリームと言う噴水を利用した映像の施設が気に入ったとのこと、自分の家の庭にこの劇場が出来ないか、なんて、これを作ったNHKと本気で相談したりしていたようでした。実現したら、ハウステンボスの名前も又挙がるのに、なんて期待していましたが、その後どうなったのか。気まぐれな思い付きだったのかも知れません。パサージユでの買い物が気に入ったらしくて色々買ってくれ、その上それらのグッズを手にしたたり、着たりした写真を撮らせてくれたので、店ではその後盛んに宣伝に利用させて貰いました。

昨年九月に福岡ドームで公演するという話が出て来たときは、マイケルはハウステンボスに又来たいから福岡の公演を引き受けたんだ、なんて噂が流れました。そんなこともないだろうと思っていたら、直前になって、福岡入りする前に三泊したい、と言う申し入れがありました。エリザベス・テラーと一緒に来ると言うのです。今回は先方の希望なので普通の扱いにして、迎賓館ではなくてホテル・ヨーロッパのスイートルームを有料で提供することにしました。やはり混乱を避けるため、アメニティ施設や店舗は特別の扱いにして、お客が少なくなった夜、開けることにしました。グルービーと称する追っかけ屋が大勢付いて来る、と言う恐ろしい情報が入っていましたので、警備体制はシッカリすることにしました。バンコックやシンガポールで公演し、香港と台湾に寄つてから来日することでしたが、例の児童虐待事件で香港と韓国は入国を許可しなかったとのことで、台湾から直接来たようです。本人達用と、公演の機材用とのジャンボ二機で飛んで来たとのことでした。この辺でエリザベス・テラーは何処かへ行ってしまうって、マイケル一行だけが来ることになりました。日本政府が入国を許可するかど

うかで最後まで揉めていたようで、仲々日程が固まりませんでした。こちらは比較的気楽でしたが、六万枚の券を完売していた福岡ドームの心配は並大抵のものではなかったようです。

九月七日に福岡に着いて、その足でハウステンボス入りしました。シンガポールから付いて来るグループビーが三千人もいるなんて大袈裟な情報が流れたりして、警備体制の見直しなんかをやりましたが、それ程のことはなかったようです。日中はホテルで大人しくしている約束だったのに、翌日、日中に予定外の店にいきなり現れてビックリさせられました。飛んで行って、既に入っているお客さまはそのままにドアを閉めて、それ以上のお客さまは入れないようにし、店の回りを男子社員で固めて混乱のないようにしました。私は中に入って相手をしたのですが、マイケルは黒と言っても良いような濃いサングラスを掛け、黒いハットに黒のブルゾン、真っ赤なトレーナーと言つ出で立ち。ズボンも黒の、あれは皮だったんでしょう。背は私より勿論高いけれど、細くてナヨナヨした感じで、握手しても弱々しい反応。顔色も異常に白くて、人工的と言つても良い

くらいで、余り健康そうな感じは受けませんでした。病的で何かの薬を使っているのが明らかに判る感じ。舞台上で見せてくれるあれだけ激しいエネルギーが何処から出てくるのだろうか、と疑問に思ったほどでした。甥と称する若い男三人を連れ、マネジャー役の叔父さんにボディガードとおぼしき強そうな人達を入れて総勢十五人ほどのグループです。日中は買物の予定はなかったらしくて、店の隅っこの床に座り込んで商品の木琴を叩いて遊んだり、人形を抱き上げたり、気楽にリラックスしてくれていたようでした。何時も人に囲まれて、こんなにユックリする機会はないのだろう、と少し気の毒になつて、一人で放っておく時間を作つて上げました。仲々愛想も良くて、一寸甲高い声で気軽に話もするし、外からウィンドウ越しに覗き込んでいるお客に対しても手を振ったりしてサーブスしていました。中に勇敢なお客がいると握手したり、頼まれて気軽に一緒に写真に収まつたりしていました。

夜は予定通り買い物という事で、店を開放して自由に歩き廻つて貰いました。マイケル自身は楽しそうに店を歩き回つて、あちらこちらで商品に触つたり、取り上げて遊

んだりしている程度でしたが、甥どもは一昨年買って行ったトレーナーやシャツが気に入ったらしくて、次から次へと持って来て、ウエアだけで五十万円、ゲームやらお菓子やら六十万円を越える買い物してくれました。私は後半はマネジャー役のビルと言つ名の叔父さんと称する爺さんに貼り付いて、クレディット・カードでの支払いが間違ひなくなされるようにチェックしていました。輪ゴムで止めたカードを五センチ位持つていて、品物が纏まるのを待つて、次々と払つてくれました。

ファンの騒ぎが大変。三千人は流石にオーバーな情報でしたが、それでもかなり大勢のファンが付いて歩いているようでした。どこから情報が流れるのか、通る道順を知つていて、待ち受けて大声で「マイケル！ マイケル」の騒ぎです。店に入ると外からウインドウをガンガン叩いて自分の方を向かせようとするので、ガラスを割られないかが心配。窓に近付けないように縄を張つて、男子社員で固めるのですが、そのパワーには敵いません。騒ぎが功を奏して、そちらを向いて手でも振ろうものなら、キャーッと声が上がリ、興奮して泣いている女の子もいました。

予定通り三日間の滞在の後、福岡へ行きましたが、ドームでの公演は大変な盛況だったそうです。そのままロシアに行ったことですが、ロシア入りの時に来ていたシャツがハウステンボスで買ったものだった、とテレビを見た店の子が言っていました。

二日ほど後、パサージユに行ったら、シンガポールから福岡まで付いて歩いていたら言う二人連れの女性客が来ていて、マイケルと同じものを買うために戻って来た、と言っています。接客しながら、「ズツと案内したんですよ。これとこれを買って行っただですよ。やはり赤と黒が好きみたいですわね。握手したら弱々しい感じですね」なんて、少しオーバーに話をして上げたら、「良いなあ」って涎でも垂らさんばかりの顔になり、ファンの怖さとありがたさの両面を見た感じになりました。

今年の三月には妹のジャネット・ジャクソンが来ると言います。東京と大阪でやる前に、ハウステンボスで格安で一日公演をする話が纏まりつつあります。兄貴からの紹介だと言うことですから、マイケルのハウステンボス好きも本物みたいです。

(平成六年一月二日)

マハティール首相

私がマハティール首相の名前を意識したのは、多分八〇年代の初めの頃ではなかったかと思います。当時、LNG船の長期修繕契約の話でマレーシアに行く機会が増えていきましたが、マレーシアに行くと「ブミプトラ」と言う政策がかなり強烈に進められていたのを感じたのです。ブミプトラ政策と言うのはマレー系住民を優先させようとする一種の民族主義政策で、マレーシア独立後の初代首相として有名なアブドル・ラーマン氏が提唱されたものと聞いています。当時のマレーシアは中国系の人達、つまり華僑が政財界の中枢を占めていました。人口比率はマレー系五〇%に対して、中国系が四〇%、インド系が一〇%と言う比率だったと記憶していますが、役所は勿論、一般の企業も、採用数にしてもマネジャーの数にしても、この比率にしなければならない、と言う法律が出来ていて、日本の商社なんかもこの対象になって窮屈な思いをしていたようでした。失礼な話ながら、学校でも一般的には中国系の人の方が成績が優秀なのですが、入学者数にしても成績についてもその比率が問題にされる、と言う徹底したものだと言っています。

ずい分シツカリした政策を実行する人がいるものだ、と思ったのでした。これを強力に推進していたのが八一年に首相に就任したマハティールさんだった訳です。

彼の民族主義は、その後マレー人に止まらず、アジア人全般に拡がって行ったようです。有名なルック・イースト政策で、欧米よりも日本や韓国を見習おう、と言つ旗を掲げて重工業化路線を推し進めて来ています。この結果、マレーシアはASEAN（東南アジア諸国連合）六ヶ国の中では政情が最も安定していると言われ、経済成長率も先進国を凌ぐ八%台を維持しています。マハティール首相は実質的にASEANのリーダーと言つて間違いないでしょう。アジア人として気持ちが良いのは、アメリカに対して言うべきことをキチンと言つてゐること。アメリカ主導型の外交に反発し、一つの例を上げれば、昨年のアジア太平洋経済協力会議（APEC）には、アメリカが勝手に開催したものだ、と言つことで欠席しました。今年のジャカルタでのAPEC会議には、参加者全員の合意の下に開かれたものだ、と言つことで出席していますが、合意文書の作成に当たつて最後まで抵抗したのは記憶に新しいところです。マハティール首相をはじめ、

スハルト大統領、江沢民国家主席、金泳三大統領など、アジアの海千山千の実力者に囲まれて、我が村山首相は完全に見劣りがしましたね。マハティールさんはASEANの六カ国に日本と韓国を加えて新しい経済圏を目指す東アジア経済会議（EAEC）構想を提唱して、アジア独自の外交を推進しようとしています。欧州経済機構（EC）に対してはアメリカ大陸にNAFTA（北米自由貿易協定）があるではないか。アメリカの主導でアジアを巻き込んだAPECを作って貰わなくても、アジアはアジア人の主導でEAECを作って纏まって行けば良いのではないか。そうすればEC、NAFTAに対抗出来る第三の勢力が出来るではないか、と言う訳です。

この辺は日本もシツカリしないとイケません。歴史的にアメリカ寄りになってしまっているのです。日本の政府はAPECとEAECの間でオタオタ揺れているように見えません。こんなことではアジアのリーダーの地位をマハティールさんに取られてしまいそうです。経済的には充分リーダーの資格はあるものの、政治的にはどうしてもリーダーになれないのが日本人の宿命なのでしょうか。このところ、日本で新しい首相が誕生すると、ア

アジア各国を回って、五〇年前の戦争のお詫びをして歩くのが通例みたいになっています。謝りながらお金をばら撒いているみたい。天皇にもこのお詫び役をやって頂いているみたいですよ。お詫びの仕方がどうだとか、一歩踏み込んだ言い方をしたとか、踏み込まないとか、謝り方が良いとか悪いとか。日本のマスコミが鬼の首でも取ったように、自分の国に恥をかかせるような報道をして騒いでいる。バカな話だと思っているのですが、この問題にしてもマハティールさんは、「戦後五〇年も経ってお詫びなんかするな」とハッキリ言ってくれている。国連安保理事国にも遠慮しないでなったらどうだ、と言っています。安保理事国については、私は一寸意見がありますが、この辺り、誠にスッキリして気持ちが良いではありませんか。

石原慎太郎先輩の「NO」シリーズで「NOと言えるアジア」と言うマハティール・石原共著の本が出ています。これがあまり極端に出ると国粹主義みたいなものに発展する危険もなしとはしないのですが、首相の場合は啓蒙も込めて敢えて極端な言い方をしている面もあるのかも知れませんが、アジアにはヨーロッパより古い文明があり、長い歴

史があつた、と言つるところから始まります。十八世紀後半の産業革命を境に西欧に追い付かれ、追い越されて行つたのですが、これは巧みな植民地政策の結果だつたという見方です。西欧諸国は経済面での征服に加え、キリスト教で支配しようとした。文明の発展にはキリスト教が不可欠だ、と言つ「愚かな」発想を持ち込んだ、とまで極論しています。キリスト教が極く排他的な宗教なのに比べて、イスラム教を含むアジアの宗教は他の宗教に対して寛容だ、と言つています。ホメイニさんを始めとするイスラム教の人達のやり方や考え方を見ていると、かなり厳しい宗教みたいに見えますが、歴史的に見ると他の宗教に比べて寛容だと言えるのだそうです。確かに仏教なんかは寛容と言えるのかも知れませんね。キリスト教を前面に出したのは、「文明や産業の発展は、社会を西欧化しなければ出来ないものだ」と言つヨーロッパ人の思い上がった思想を押し進めるための一種の方便だつたのだ、と言います。そこへ行くと日本は、欧米化されたのではなくて、日本の文化を守りながら、西欧文明を日本化しながら取り入れて産業を發展させて来た、と言つてくれています。だから、とマハティールさんは言います。日本は

もつとシツカリして欲しい。G七に参加出来るのは日本だけではないか。アジアの代表として主張すべきところはシツカリ主張して欲しい、と言うのです。E A E Cの問題にしてもアメリカの顔色を伺うばかりではなく、アジアの纏め役なって欲しい、と言っています。今や世界は日本に学ぶべきだ、なんて発言もあります。この辺まで来ると流石に一寸言い過ぎの感じで、甘く聞こえる言葉ですから、そのまま受け取るのは危険かも知れませんが、マスコミが言うように、これは日本から多くの経済援助や技術援助を引き出すための一種のリップサービスではないか、と言う見方も当たっているのではないかとともに思います。石原さんは、自分自身が対談し、ジツクリ接触して感じた感覚をベースに、こんな見方は正に下司の勘ぐりだ、と決め付けていました。

この十月にハウステンボスに来られたのは、別府で開催されたアジア九州サミットに出席された帰りに寄られたものです。大分県の平松知事と言う方がローカル外交に熱心な方で、アジア九州経済圏構想を持ってこのサミットを提唱し、首相がこれに応じられたと言うことです。別府では基調講演をされ、会議の後は九州の財界人との交流もされ

たとのこと。今回は東京には行かず、九州だけで帰られたそうです。ハウステンボスを見たい、と言う希望はご本人から出されたものだとのことでした。首相が来訪されるとなると、大使辺りが斥候役になります。来られる一ヶ月前にマレーシア大使が下見に來たので、出迎えからご案内をしました。この大使、最初は少し尊大な感じでした。発展途上国のこういう立場の人に有り勝ちの一寸威を張る感じでしたし、同行している日本人のお付もピリピリした感じで始まったのですが、その辺はこちらも長い外国人との付き合いで扱い方を心得ています。すぐにこちらのペースに巻き込んで、下見が終わる頃にはカティブと言うこの大使とスツカリ仲良しになりました。首相が歩くコースの案を出して、おさらいして回ったのですが、これで充分だと満足してくれ、料理の好みやお茶の出し方、奥様への対応など色々なアドバイスをくれました。首相は大変に好奇心の旺盛な人だから、何を見たいと言いつか分からないよ、と言うアドバイスが有難かったです。考えられるオプションを一緒になって選び出し、これに対する準備もしておくことにしました。

十月二十三日当日は、朝から長崎県知事の応接に始まり、一緒にお迎えして、九時半から三時過ぎまで、予定を一時間もオーバーしてのご案内でした。流石に穏やかな物腰の立派な方とお見受けしました。静かな中にカリスマ性も充分に感じられる方だと思いました。都市計画に興味があるようで、質問も投資額に関するものが多く、似たような計画をお持ちの様子でした(その後、この関係のチームが調査に乗り込んできました)。環境への配慮の話から、予定に入っていなかった水処理の施設を見たいという話になり、これはオプションとしてスタンバイができていましたので、スムーズに予定の変更が出来るのがヒットでした。首相は夫人を帯同され、大使夫妻からお付の夫妻連中、大勢のSPなど三十人近くを相手に奮闘しましたが、最後に大使夫人から「良いホスト役でしたよ」と言っねぎらいの言葉を頂き、大使とは近い内にハウステンボスでゴルフをしよう、と言う話が出来ました。

(平成六年十二月一日)

重い仕事人が人を育てる

ハウステンボスという会社の中で、私がどうい
う評価が与えられていたのか。神近社長が書い
た「ハウステンボスの挑戦」から抜粋する。私
が天才だと思っている神近に「天才的」と言わ
れたのだから、以って瞑すべし、と思っている。

『人を育てる時、重課主義が効果的である。重課主義とは能力を上回る仕事を与え、毎日結果を求めていく方法である。いつも追いついて立てられながら必死に仕事をこなしていくと、何時の間にかその仕事ができるようになる。そしてさらに能力が高まっていく。人は仕事の与え方によって育っていくものである。』

現在ハウステンボスで販売本部長をしている長島達明は、三菱重工業からやってきた。メーカー出身であるから、ものづくりに価値を置いているし、考え方も真面目である。私はこの男に、はじめハウステンボスカントリークラブの仕事をやらせ、次にオラン

ダに派遣して支社の仕事を任せた。帰って来てからは売店のおみやげ品を扱う販売の仕事である。これまでとは畑違いの販売とマネージメントの仕事であるから、彼はとまどい悩んだ。その辺の心情を彼はこう書き綴っている。

(中略・・別項「物を売るといふこと」「よりの抜粋」)

これを読むと長島の率直な気持ちと奮闘ぶりがよくわかる。

長島にとって、そもそもマーチャングは畑違いであり、ファッションやデザインは縁遠い世界である。そんな中で自問自答し、自分をいじめながらスタッフをまとめていくのが天的にうまい。

悩みがないところに進歩はない。悩みから逃げず、率直に向かい合ってこそ進歩がある。「販売はまるで判らないし、得手ではない」と長島は言いながらも、売店はオープン以来、入場者一人当たり五千円の売り上げを記録している。このことは、私の彼に対

する目が狂っていなかったことを実証している。まさに仕事と地位は人を育てるのである。』

(神近義邦著 「ハウステンボスの挑戦」より抜粋)

初めての管理部門

二月からまた仕事が変わって、今度は総務本部長と言うことになりました。営業の仕事も、きつい、とか、性に合わないなんて言いながら、二年間やりました。二年間でヤツと新しい営業の体制を立ち上げて集客のポイントも分かりかけ、数字も上がり始めているところですので、もう少しやっても良いな、と言う気もするのですが、やはり集客の仕事はシンドクで、どうしても私にやらせて下さい、と志願するポジションでもないので、新しい仕事を有難く受けることにしました。ここの総務本部では人事・経理・総務と情報システムと言ってコンピューターシステムの総元締めを担当することになります。ハウステンボスも開業して丸四年になろうとしています。事業としてはようやく形になって来たのかな、と言う感じになって来てはいますが、急速に立ち上げた組織や

人事が滅茶苦茶なので、人事を中心に組織を作り上げて活性化してくれ、と言うことらしい。毎日の客の入りや売店の売り上げを心配するようなことはしないで済みそうですが、管理部門は初めての経験。またまた新しい仕事で、勉強の始まりです。人事なんて又ドロドロした苦勞が出て来そうで、ここでも楽はさせて貰えないようです。就任の挨拶が今の私の心境を示すものになっていますので、ご披露することになります。

総務本部長を拝命した長島です。私にとって、管理部門と言うのは初めての経験です。なので、最初から勉強させて頂きます。私は管理部門と言うのは、前線の現業部門が仕事をし易くするためのサービス部門であるべきだ、と考えています。シツカリ締めることも必要ですが、所謂、管理で縛る、と言うよりも、一定のルールの中で、どうしたら仕事がスムーズに流れるか、を考える管理部門にしたいと思っています。ハウステンボスも開業後丸四年になろうとしています。事業としては形が見えてきているけれど、事業を支える組織とか、人事・労務の部分に問題が出て来ていることを感じています。皆

さんと一緒にこれらの問題を一つずつ解決して行きたい。管理部門の仕事は、往々にして日々の仕事に追われる後追いの仕事になりがちですが、そうではなくて、目的を持って、目標に向かってスケジュールを作りながら仕事を進めて行って頂きたい。仕事に引き摺られるのではなくて、自分の方から仕事を引きずり回す感覚になって貰いたいと思います。

私は仕事の上で、あまりガーターガーター言う方ではないと思います。私の仕事の進め方は皆さんに自分で考えて伸び伸びと仕事をして貰うこと。そのための環境を作るのが私の仕事だと考えています。仲良く、気持ち良く仕事が出来ると環境を作りたいと思っています。モノの分からない子供、所謂ガキを相手にする場合は、鞭や飴を使って脅したり賺したりしなければならぬけれど、一人前の大人を相手にするときはそんなものは必要ではないと考えています。一人前の大人なら、自分がやらねばならないことは心得ていて、自分が言うこと、自分がすることには責任を持たねばなりません。言われたことをやれば良い、と言うのはガキの考えること。自主的に考え、責任を持って仕事を進めて行く

のが大人の仕事の進め方だと思います。だからと言って好き勝手にやれば良いと言うこととは違うということは分かっていると思います。個人で働いているのではなくて組織の中で働いているのですから、上司への報告・周囲への連絡・相談、所謂ホウ・レン・ソウは忘れてはなりません。私も大人としての仕事をしてくれる人に対しては、大人に対する対応をしますが、ガキにはガキとしての付き合いをせざるを得ません。この辺のところを心得て頂いて、仲良く気持ち良く仕事をしたいと思えます。私にとって不慣れな仕事ですから暫くは仕事の上で迷惑を掛けることが多いかもしれないし、名前を知らない人が多いので失礼をすることが多いこともあると思いますが、よろしく願います。

(平成八年二月三日)

新入社員研修

今年も一四〇人ほどの新入社員が入社して来ました。リストラで人員は減らしているけれど、若い働き手は必要ですから、採用しなければならぬ。この会社は急速に立ち

上げたため、大量の中途採用者がいます。立ち上げの時には力になって貰った人もいますが、落ち着いて来ると、この辺の人員がお荷物になって来ています。急いで採用した関係で、困った人を探ってしまったと言う現実もあります。最初は経験も知識も未熟なので、人海戦術で対応していた部分がありましたが、社員のレベルが上がって来ると、こんなに大勢の人は要らなくなったと言う反省もあります。それよりも人員構成が物凄くいびつになっていて、このままで一〇年も経ったら大変なことになりそう。会社が長く存続するためにはこうした面への配慮を忘れる訳には行きません。私が人事担当としてやらねばならないのは、どうやらこの辺らしいのですが、そうは言っても若い人を採っておかないと、年齢構成がドンドン老化する。この産業には若い人のアイデアや行動力が必要です。一方で中高年層のコブ（嫌な言葉です）をなくす努力をしながら若い人の採用をストップさせる訳には行かないと言うある種ジレンマの中にいます。で、春になると新入社員が入って来る訳ですが、この人達の研修と言うのが総務本部人事部の担当です。研修の開講に当たって、会社の概要を説明し、社員としての心構えを話すの

は総務本部長の役目と言う訳で、一時間ほどの話しをさせられることになりました。最初この手の話をしていた頃は、我ながら何か付け焼刃みたいな感じで喋っていたのですが、最近になると自分も自分の言っていることを信じながら喋っているようで、場違いだ、とか、素人だ、とか言いながら、最近ではこの商売にドツプリ浸かってしまったのかな、と自分で感心しているような変な気持ちです。

会社の紹介やハウステンボスがやろうとしていることなどについては、如水会館での講演を短くした程度のもですが、後半の部分、新入生の心構えと言うことで、こんなに偉そうなことを人前で話していると言うことを、恥ずかしながらご紹介します。

（ハウステンボスがやろうとしていることが、自然を大切にしたい理想的な未来の街を作ろうとしているのだ、と言うことを強調した上で）

でも、こんな理想的な街は自然に出来るものではないでしょう。国や地方自治体を作ろうと思っても出来るものではありません。それなら、一つの企業がこんな街を作って、

それを経営的に成り立たせてみよう。これがハウステンボスがやろうとしていることなのです。エコロジーとエコノミーが共存する街、と言っ言葉を皆さんはこれから何度となく聞くことと思います。エコロジーと言っのは生態学、つまり自然環境のこと、エコノミーと言っのは経済ですね。エコロジーを大切にした街を、経営的に成り立たせる。そのために現代の最高のテクノロジを駆使する。こんな試みをしている会社は世界中何処にもありません。世界で初めての実験をしている唯一の会社、と言って良いでしょう。先程、皆さんに「ハウステンボスに入社して、この事業に参加したことを誇りに思いなさい」と言ったのはこういう意味なのです。

美しくて自然に優しい街を作るだけなら、お金さえ掛ければ誰にでも出来るでしょう。私たちはこんな街を作るだけでなく、街を経営して商売として成り立たせて行こうとしています。こんな街が世の中に実際に存在出来るのだ、と言っことを世界中の人たちに教えてあげようとしているのです。どうやってお金を稼いで行くか。この施設を利用して、歴史や文化を世の中に紹介することを商売にしています。大勢のお客さまに来

て頂いて、入場料を払って頂く、ホテルに泊まって頂く、食事をして頂き、お土産を買って頂く。こうして稼いだお金で皆さんの給料を払い、借金を返済し、施設をメンテナンスして、この街を経営して行くこととしています。ハウステンボスは開業後、丁度四年になりましたが、日本は愚か世界中から大勢のお客さまに来て頂いています。アジアの観光拠点になるうとしています。これからも益々多くのお客さまに来て頂かなくてはなりません。多くのお客さまに来て頂くにはどうしたら良いのか。それにはお客さまに喜んで頂いて、満足して帰って頂くことが一番大切です。どうしたら満足して頂けるか、についてはこれからの研修で勉強して貰いますし、更には皆さんが夫々の職場に配属されてからシツカリ勉強し、工夫して貰わねばなりません。私からは四つだけ基本的な心構えをお話しします。

まず第一に、お客さまの身になって考えること。これがサービス業に働く者が基本的な持たねばならない考え方です。自分がお客さまならどうして貰ったら嬉しいだろうかと考えて、それを実行することです。これから皆さんは、こう言う時にはこうしなさい、

と言うマニュアルを勉強すると思います。でも、マニュアルに書いてあるから「する」と言うのではなくて、まず「心からお客さまに喜んで頂こう」と言う気持ちになって頂きたい。マニュアルを|実行するのではなくて、気持ちの表わし方をマニュアルに書いてあるやり方で|実行して頂きたい。私の言っていることは、皆さんにはまだ少し難しいかも知れないけれども「マニュアルで|実行する」と言う言葉を頭のどこかに覚えておいて貰いたい。いつか、アアこのことだったんだな、と思い出して欲しいと思います。早くこの言葉が理解出来るようになって欲しいと思います。

二番目に、仕事は自分の方から自発的にして頂きたい。「しろ」と言われるから「する」のはハウステンボスでは「仕事」とは言いません。「作業」と言います。最初は勉強することばかりでしょう。それでも受身で教えて貰うばかりではなくて、一つでも良から自分の方から、こここのところを教えて下さい、と言って貰いたい。言われたことだけをやるのではガキの作業。自分で考え、何が必要かを判断して、作業ではなくて仕事をするのが大人の仕事です。毎日目標を持って生きる人間と、目標を持たないで漫然

と過す人間とでは、少し時間が経つと大きな差が出来て来るものです。常に問題意識を持って、自発的に仕事をしていけば、何が目標が見えて来るものなのです。是非、一日も早く大人の仕事が出来るようになって欲しいと思います。

第三に、あなた方はこれまで、学校にお金を払って勉強して来ました。これからは会社や社会のために働いてお金を頂く立場になります。だからシツカリ働くという気持ちを忘れて貰っては困りますが、お金を貰うために働く、と言うだけでは余りにも自分が可哀想です。これからは一日の中で、会社で過す時間が一番長くなつて来る筈です。その時間を楽しいものにして欲しいのです。それには仕事が好きになることです。仕事はつらい、これは当たり前のことですが、それを好きにすることが出来ればつらさも半減しますし、一日を楽しく過すことが出来ます。好きなことをしてお給料が頂戴できれば、こんな結構なことはありません。皆さんはどんな部署に配属されるか分からないけれど、夫々の部署で是非自分の仕事を好きになって貰いたいと思います。大人の仕事をすれば、キツとその仕事を好きになることが出来るでしょう。

最後に、あなた方は今日から初めて社会人生活に入ります。これまでとは全く異なる新しい環境に入る訳です。どんな世界が待っているのか、不安に思っているのではないかと思います。私は「自分の環境は自分が作るもの」と言う言葉を信じています。人と人との間で気持ち良く過すには、まず自分が周りの人を好きになることです。あなた方にも経験があると思いますが、自分が好意を持った人は不思議に相手もこちらに好意を持ってくれるものです。偶には片思いなんてこともありますけど・・・逆に、こいつは嫌な奴だ、と思うと、口には出さなくても相手も同じことを考えるのです。何処の職場に行っても、あなた方の周りは先輩だらけのはずです。その先輩たちを尊敬し、好きになる努力をしてご覧下さい。先輩たちもキツと好意を持って応えてくれると思います。自分の環境を自分で作る、と言うのはこう言う事なのです。仕事を好きになり、周りの皆を好きになることが出来れば、毎日が楽しいものになる。最高ではありませんか。

あなた方が入社したこの会社が何を目指しているのか、何をしようとしているのか、その中であなた方が何をすれば良いのか、と言うことが、少しは分かってくれたらどう

か。繰り返して言いますが、あなた方はこの会社で働くことを誇りに思って頂きたい。入り口でお客さまのお迎えをする、博物館やアメニティ施設でお客さまが楽しんで頂くためのお手伝いをする、施設や草花を守って美しい環境を保つ努力をする、レストランでお皿を運ぶ、売店で一つでも多くのものを買って頂く努力をする。これらは勿論、あなた方が給料を貰うためにしていることなのだけれど、それだけではないということ、未来の理想的な街を作ろうとする、この、世界で初めての事業を成功させるといふ大きなロマンと言うか夢に挑戦しているのだと言うこと、この実験を成功させるために、皆さん一人一人が夫々の分野で努力しているのだ、と言うことを忘れないで欲しいと思います。シツカリ勉強して一日も早く立派な社員に育って頂きたいと思えます。

(平成八年八月一日)

パソコン入門

私がパソコンなるものに手を初めたのは、ハウステンボスに来て販売本部を預かるこ

とになってすぐの頃のことですから、平成二年の秋と言うことになります。お店の管理と言うとどうしても数字が中心になる。担当の連中は夫々にコンピュータを駆使して色んな作業をやっているのだけれど、リーダーも無知ではいけないだろうと思ったのです。会社にあつたのが富士通の機械でしたが、これで表計算を始めました。最初に習ったのはマルチプランと言う方式でした。計算式さえ入れておけば、一つの数字を打ち込むと、加減乗除の計算が瞬時に出来て表になる、と言う便利なものですから、元の長崎オランダ村の四〇以上ある全部の店の売り上げを毎日チェック出来る大きな表を作つて皆を驚かせ、良い気になっていました。全社を統括しているホスト機には接続されていなかったんで全て自分でデータをインプットせねばならず、作業としては大変でしたが、その内にデータは若い人たちがインプットしたものを借用し、それを自分で好きなように加工する、と言う知恵が付いて楽になりました。ハウステンボスになってからは、お店の数が七〇にもなつて大変になったので、こんな表があると便利だ、と言う雛形を作つて見せて、これを作る担当を決め、毎日の仕事の一部にしました。私が作らせ

ていた表は、毎日の売り上げ、入場者一人当たりの購買単価、坪当たりの効率と言ったものを、店毎に出したものでしたが、これを少し進めると、商品毎の売り上げ、売れ筋（どの商品に人気があつて、どの商品が売れないか）の把握、商品在庫の具合、店毎の収支計算などが出来るようになりました。この辺は、別に私が考え出したと言つ訳ではなく、経営コンサルタンの先生方の指導でベースが出来ていたのを、こちらの都合の良い方法で進めて行つたと言つだけのことなのですが、販売本部の基礎はコンピューターの力を借りて出来た部分が大きいと思います。もっと言えば、コンピューターがなかったら、こんな膨大な数字の作業は出来なかつたと言えるのかも知れません。超高速ビルの建築は、コンピューターが出来て、膨大な量の強度計算が出来るようになって初めて可能になった、と言つ話を聞いたことがあります。こんな形でコンピューターが世の中を変えて行つた例は他にも沢山あるのではないのでしょうか。この他、本部内の人事情報を入力しておいて、考課に利用したりしました。珊瑚会のハウスステンボス大集会の収支計算書をこのマルチプランで作りましたが、こんなのはお茶の子さいさい。

計算式だけをインプットしておけば計算は全部機械がやってくれるので楽チンでした。

私がこのキーボードに抵抗を感じるものが少なかったのは理由があります。三菱重工に入社して、いきなり輸出部門に突っ込まれて面食らったのですが、当時の外国との交信はまだ電報でした。最初は客先に直接ケーブルする機会は少なく、もっぱら海外に出ている駐在員とのやり取りでした。国際電報のルールに合わせて、出来るだけ安く送信が出来るように、字数を合わせたり、省略したりして、自分が作る原稿をローマ字にする作業もありましたが、上の人が延々と書く原稿をローマ字化して、タイプライターで打って行く作業も大変でした。昼間は女性が打ってくれて、これを社内の通信室に持って行けば良かったのですが、有名なタコ部屋のセクションでしたから、夜が遅くなる。そうすると、夜中になってから出来上がった電報の原稿をローマ字化してタイプして、国際電報局に持ち込むのは新入社員の仕事になりました。英文タイプなんて、勿論初めてお目にかかるものでしたから、人差し指二本で、キーを捜しながらポツポツ打っていました。これでは敵わない、と昼休みを利用して英文タイプの勉強を始めました。

キーを見ないで打つ「ブラインド・タッチ」をマスターしようとしたのですが、夜になると早く間違はなく打たねばならない「実需」が発生するものですから、ブラインドの癖を固めることが出来ず、結局、曲がりなりに五本の指は使うけれど、キーボードを見ながらでないで打てない、と言う片輪の形で固まってしまいました。それでもタイプの使い方には慣れて、自分で発信する時は、ローマ字で駐在員に発信する場合も、英文で客先に発信する場合も、どこかで仕入れて来たポータブルのタイプに向かって文章を作っていました。テレックスになってからは通信室の人と仲良くなって、機械の扱い方を教わりました。初めて海外出張した時に、南フランスのホテルからテレックスを打つことになったのですが、フランス人のオペレーターが「テレックスの機械はあって、英語の原稿は打てるけれど、ローマ字の原稿では打てない」と言うので、「それなら自分でやる」と言って機械の前に坐つたのは良いけれど、これが今で言うオンラインの機械なのです。当時でも、少し進んだ機械だと、事前にユックリ時間をかけて、紙のテープに穴を空けたものを作っておいて、テープが完成してからラインを繋いでこれを機械に

かければ、自動的にかなりのスピードで送信が出来たのですが、フランスのホテルにあったこの機械は、相手呼び出して国際電話のラインを繋いでおいて、そのまま打って行く、と言う旧式の機械なのです。ままよ、と始めたのですが、慣れない仕事ですから三・四時間は掛かったでしょう。当時のお金で一〇万円以上の電話代を請求されて驚いた記憶があります。出張を続けることが出来なくなって、借金をしたりしたのでした。ロンドンでも事務所にテレックス・オペレーターはいましたが、オペレーターが不在の時なんか、自分でもずい分テレタイプを操作したものでした。

ワープロが世の中に出て来た最初の頃、抵抗を感じて買い渋っていたのは、機械に対する抵抗ではなくて、手紙はやはり肉筆で書かないと心が籠らない、とか、ワープロで文章を作ると安易に過ぎて漢字が書けなくなるのではないか、とか言う、むしろ精神的なものでしたから、それが割り切れて使うようになったら、丸つきり抵抗がなくなり、珊瑚の原稿は勿論、会社の書類もワープロで作るし、今では一寸した報告書やメモもワープロがないと作りたくない、なんてことになっています。悪筆を気にしないで良い、

と言うのが何とも言えず便利です。少し毒されてレイジーになって来つつあるのではないか、と思いい、手書きの宛名なんかは出来るだけ毛筆で書くことを試みたりしています。で、今では、最初に買ったパナソニックのワープロと、会社で共通に使っている富士通のもの、それに最近手に入れたマッキントッシュのパソコンに組み込まれたワープロの三つを使い分けています。

営業に移ったら、ここも数字。入場者関連の数字情報が山ほど飛び交っているのだけれど、自分の理解し易い方法で整理しようと思ったら、やはり自分で加工する方が良い。マッキントッシュ・アップル・コンピュータのワープロを自前で手に入れました。福岡で大安売りをしているのを発見してくれた人がいて、二十五万円位するものが、十万円マイナス一円と言う超安値で手に入ったのです。マッキントッシュにした理由は、近くにこの機種を使っている、殆ど「コンピューターおたく」の若い人がいて、習つのに都合が良かったと言うだけのことでしたが、この機械は活躍しています。毎日の入場者数の把握は勿論のことですが、入場者には色々なカテゴリーがあります。個人で入場

される方、旅行代理店の企画ツアーに参加して来られる方、団体で入って来る方、修学旅行など。これらをエクセルを使って分類し、目標との対比から前年同月との対比まで出したりしました。総務に来たら、それこそ数字です。まだ不完全だけど、毎月の決算の数字を費目ごとに前年度分と対比する表を作ったりしています。フォームさえ作ってしまえば、こんなことは簡単に出来ます。便利なものが出来たものです。

パソコンの効用の一つはこの計算機能にあります。もう一つの機能は通信機能。最近ではこちらの方が大きく取り上げられているようです。やってみたいな、とは思いつつ、私の安物の機械で通信機能を使うためには、モデムと言う装備を付けねばならず、お金が掛かるので迷っていました。娘が電子メールで交信しないか、と言うので重い腰が上がりに、モデムを装着してニフティ・サーブに加盟。電子メールが可能になっています。先日、久し振りに娘のところに行ったら、パソコンをスツカリ自分のものにして、楽々と使いこなしているのでビックリしました。息子の方は元々技術系だし、学生の頃から小さなパソコンを買い込んで何かやっていたので、この世界の近くにいるな、と思

っていたのですが、文系の娘はこの世界からは一番遠いところにいるのではないかと
思い込んでいたのです。一種の親馬鹿だったのでしょうか。ニフティ経由でインターネ
ットへの接続も可能なのですが、ウツカリするとお金が掛かって来るので用心しつつ、
マルチメディアの時代をお尻の方から追い駆けている感じです。最近はいくろソフ
ト系が優勢で、マック系が押され気味なので、マックの機械にしたのは早計だったかな
と思っています。マックの機械にあまり沢山のデータを蓄積する前に早めにマイクロ系
に乗り換える方が良いのかな、なんて考えているところです。最初の購入の目的が表計
算だったので、今持っている機械は、白黒画面の色気のない代物です。今度の時はカラ
ーの少し性能の良いものになりたいと思っています。私のニフティの電子メールアドレス
は vzd06705@nifty.com ですから、良かったらアクセスして見て下さい。

(平成八年七月一日)

皇室の仕事

こちらへ参ってから、思いがけない人と接する機会があるのですが、その一つが皇室関連です。三菱重工にいたら、とてもこんな接し方は出来なかっただろうと思うのです。

オーブンの時、皇位継承権第四位の三笠宮崇仁親王・百合子妃ご夫妻が見えたのは、オランダ王室から王子さまが見えたので、礼儀上来られたのではないかと思うのですが、その後も、会長と社長が皇室の晩餐会に招かれたり、皇室関係の方が見えたりしていますから、やはりハウステンボスがこの地で新しい試みをしていると言っていることで、やんごとなき辺りまで話題が届いていると言っているのではないのでしょうか。

私が皇室の方を直接アテンドする機会を持ったのは、三笠宮寛仁親王妃信子殿下が最初でした。ハウステンボスが出る前の平成二年のことでしたが、両殿下がご一家で何かの用事で長崎に来られ、帰りの飛行機に乗ろうと大村の空港まで来られたら、台風で東京行きの便が大幅に遅れたため、時間潰しのために船で大村湾を横切って、長崎オランダ村に来られたのです。皇位継承権第五位の寛仁親王（ヒゲの殿下）ご自身は流石に勝手に動く訳には行かぬ、と言ったことだったらしく、妃殿下と二人のお子さんが旦那を

空港に残して、突然お越しになったのです。夕方でしたが、役員総出で先導からご案内をしたのでした。

一番近しく接したのは、皇位継承権第二位の秋篠宮文仁親王・紀子妃ご夫妻。これはオープン直後のことで、この時のことは別に詳しく報告しましたが、販売本部長の頃でしたので、お二人の買い物案内を言う大役でした。雨が降って来たため、予定が急に大幅に変わって、未だ準備が整っていないところにお越し頂くことになり、慌てたことでした。両殿下とも直接口を利いたのですが、宮様と口を利いたのはこれが初めてでした。野口兄の皇室朱鷺論を読んだ直後のことでしたので「今夜は朱鷺の子孫を残すために頑張ってください」と言いたくなつたのですが、マサカそんなことを言える訳もなく、お蔭で未だに朱鷺絶滅の心配をせねばなりません。翌日、西彼町のバイオパークに寄って行かれたのですが、急に昼食を召し上がることになり、チャンポンが食べた、と言うことになって、近くのラーメン屋に出前を頼みました。ハウステンボスで食事をされるに当たっては、事前に厳しい検査が入って、厨房の衛生状態がどうだ、メニ

ユーをどうするか、とか大騒ぎしていたのに、田舎のラーメン屋でどんな衛生検査がなされたものやら。何れにしても急ぎのご用達ですから、どこかの飯場からの出前の注文を横取りして、サララップで蓋をしたチャンポンがバイオパークの粗末な社長室に届き、差し上げる時に両殿下の目の前で、サララップを押さえてある輪ゴムをカッターナイフでプチンと切ったら、汁がピツと飛んだ、と言う話が残りました。割り箸に挟んで届いた胡椒の入ったビニールの小袋を、両殿下が千切ってお開けになるのに、ビニールがニョーツと伸びて仲々切れなくて苦労されていた、なんて（一寸オーバーですが）。西彼町の県道沿いのこのラーメン屋には、今以って、具が一品だか二品だか多くて、値段が二百円ほど高い「ロイヤル・チャンポン」なるメニューが残っています。秋篠宮はこのチャンポンが大層お気に入りだったそうですから、今頃は「目黒の秋刀魚」ではないけど、「チャンポンは西彼町に限る」なんて言っていられるかも知れませんが。そう言えば最近、週刊誌の広告で、秋篠宮がニワトリの研究で博士号を貰われたとか言う記事が掲載されているのを知りました。あの時、紀子さまが、殿下が最近ニワトリに興味を

持っていられる、と言われるので、ニワトリ関連グッズを幾つか売りつけて、合計十六万円ほどの買い物をして頂いたのを思い出しました。博士号取得の役に立ったのだろうか。

次が、第三位の常陸宮正仁親王（往年の義の宮、火星ちゃん）・華子妃ご夫妻。営業本部長の頃でしたので、玄関で佐世保市長と一緒に迎え、社長がご説明役で私が先導役でした。この日は雨で、お着きを待ちながら、社長と「皇室が来られる日は必ず雨だね。週末には来てくれないようにお願いせねば」なんて話をしていました。三笠宮が見えたオープンの日も大変な雨風と寒さでした。秋篠宮の時も雨になりました。こういう施設は雨になるとき面に客足が落ちるので、特に週末の雨は歓迎したくないのです。ご成婚当時、話題の華子さまも大分年を取られたな、と思いながら傘を差しかけて、「生憎のお天気ですね」なんてやっていました。説明に対する殿下の反応が、「イェッ」とか、「ゲッ」と言うような、あまり上品でない声の頷き方でガツカリした覚えがあります。昭和天皇なら、「アッ　そう」と言う有名な反応を示されたのではないかな、と思

いながら聞いていました。滑り易い木の床のところを案内中に、案内役のゲストアテンダントが両殿下の目の前で見事にスッテンコロリンと大転びをしたのもこの時のことでした。

昨年十月、佐賀で日本赤十字の九州大会があり、会社を表彰してくれると言つので、会社代表と言つこと出掛けて行きました。これは総務本部長としてのお役目と言つことです。銀色有功賞なるものを下さると言つので、一体どんな良いことをしたのだからと調べてみると、何でも二〇万円の寄付をした人は、法人でも個人でもこの銀色有功賞が頂けるのだそうです。これが五〇万円になると金色有功賞になります。ハウステンボスは、毎年五万円ずつお付き合いをしていたのですが、四年で二〇万円に達したと言つことで受賞すると言つ、何だか頂くのが恥ずかしいくらいのことなのです。交通費も前日の宿泊も先方持ち。大会の前日には日赤の長崎支部が長崎の代表八〇人程を集めて懇親会なるものをやってくれました。日頃の日赤への活動への協力に対するお礼、と言つことで、派手ではありませんが一応の宴会になります。行政の責任者や世話役の日赤支

部職員も出席していました。

翌日、会場になっている佐賀市文化会館ホールなるところに行ってみると、九州八県（福岡県は規模が大きいので、組織が別になっているのだそうです）から一〇〇〇人を超える人の集まりです。立派なパンフレットが用意され、絢爛の演壇が準備されています。大勢の職員が出て、リハーサルだ何だと大変な騒ぎです。何でも何年か前に、この式典で手違いがあつて、その時の支部長は直ぐに首になつたとか。皇室がらみの式典ともなると、通常では考えられない程の気を使つのでしょう。日赤の総裁は皇室の方がなるとのこと、この日は名誉副総裁の三笠宮寛仁親王妃信子殿下のご臨席でした。この日の受賞者は二五〇人ほどでしたが、受賞者が次々と演壇の中央に進んで、妃殿下からメダルとか表彰額を受取るのです。立派な額入りの銀盤を頂いて来ました。お歴々のご挨拶が延々と続きます。その後は受賞者のみが別の会場に移動し、二五〇人の大午餐会。一般の人には会場でお弁当の折が配られていたようでした。午餐会会場の正面の雛壇には妃殿下を真ん中に知事以下が並んでいます。これは仲々のものでした。流石にお酒は

出ませんでした。上品な和食の正餐、立派な食器、大勢のウェイターの整然としたサービス、失敗が許されないこうした行事を準備する事務方は大変だったでしょう。

考えさせられたのが、こうした事業の費用対効果でした。年間高々五万円程度の寄付をした人に、これだけのお礼をせねばならないのか。大会の準備費用、出席者の交通費・宿泊費、表彰の立派な品の制作費、宴会費用。宮さまが動くとなると、お付を含めた費用が高むだろうし、護衛の警察の費用だって馬鹿にならない。事務局の費用は既に固定費でしょう。こんなことを毎年やっていたら、困っている人に行くべきお金が、集金活動に取られてしまっているのではないだろうか。一度収支報告書を見てみたいものだと思います。

それにしても宮さまのお仕事も大変ですね。これが商売と言えばそれまでですが、こうした集まりは全国で始まるのでしょうか。重工にいた頃、進水式が何かに宮家に来て頂こうと考えた人がいましたが、大変なお礼が必要と言うことで、実現しなかったと記憶します。こんな公式の行事の場合は、歳費の内と言うことで、お礼はないのかも知れ

ません。後で聞いたのですが、宮家は国からの歳費だけではとてもやって行けず、信子妃を宮家に嫁がせた麻生家からは、年々数億円単位の献上金が届けられているとか。川口兄の日清製粉の正田家についても同じことが言えるのかも知れませんが。寛仁殿下はご病気と聞いていますが、お役目ともなれば病気の旦那を置いて出て来なければならぬ。移動はお付が作ったレールに乗っていけば良いとして、とにかく常に注目の中心にいなければならない、と言うことが大変だと思います。今回は、表彰授与のお役目がありませんでしたから、壇の中央に一時間以上立ち詰め。表彰者は二五〇名で、私は一人で出て行って受けたのですが、団体で纏まって総代が受取るグループもありましたから、少なくとも一五〇人程に手づから渡されたと思います。表彰額となると軽いものではありません。細い身体でヨッコラショと持ち上げていられる様子が伺えてお気の毒になりました。信子妃は吉田元首相のお孫さんですが、あのワンマン首相のふてぶてしいブルドッグ顔からは想像出来ない程、仲々の美人で華奢な方なのです。それと一人当たり少なくとも二回はお辞儀をしますから、その答礼も楽ではありません。私もつい先頃、来年度

の大卒の入社内定式とやらで、内定書なるものを渡す役をやらされ、二十人程度の人の人に渡ただけでイヤになりましたもの。疲れたから、つて坐るわけにも行かず、トイレなんてトンでもない。午餐会ともなるともつと大変です。出席の二五〇人全員が、宮さまつてどんな食べ方をするのだろう、と注視しています。かく言う私も、折角の機会だからと思つて、正面席の見え易い席に陣取り、それとなく一挙一動を観察していました。隣に坐つた知事とか日赤社長なんかは、バクバク食べていましたが、妃殿下はあまり召し上がりません。口取りを一箸。ソーメンの入つた吸い物が出たので、それこそどんな食べ方をするのだろう、と興味津津々見ていましたが、流石にズルズルと吸い上げるような食べ方ではありませんでした。もつぱら茶碗蒸しをスプーンで掬つていられたようでした。いくら慣れていられるとは言つても、毎日結婚式の新婦みたいな役をやらされるのではたまらないでしょう。クリエイティブな仕事なんて望むべくもないのでしょうか、皇室の仕事と言つのはお気の毒な仕事と言えるのでしょうかね。

(平成九年一月二日)

長崎駅跡地開発計画

長崎駅は、駅舎は大して大きくはないのですが、日本の最西端に位置し、言わば西の終点ですから、敷地は可なりのスペースが取られています。どうやらこれは貨物輸送の機能を大きくするためのものだったようで、トラック輸送の増大、貨物のJR離れ、と言う時代の要請から見ると、もっとスペースを小さくしても良い、と言う検討がなされているようです。余剰となる一〇万平米の土地に、商業ゾーンとか住宅ゾーンを造る計画のブループリントを書こうとしているらしいのですが、その中の三万平米の土地を利用して、人寄せのためのゾーンを作る話もあるのだそうで、大阪のコンサルタントが長崎市から事前調査を請け負ったとかで、話を聞きにきました。まだ一〇年単位の先の話ですから、どんなことになるのか分らないけど、人寄せ施設の経営者の話を聞きたい、と言うことらしい。大分以前に、都市開発関係の人達のグループが来られたことがあって、生意気にも私が講演をした関係で知り合った方からの依頼でした。私はこういった事業の専門家ではないし、自分自身がビジョンを持っている訳でもないので、大分お断

りしたのですが、それでも良いとのことなので、ハウステンボスの経営者としてではなく、一人の市民として意見を言わせて貰う、と言うことにして質問を受けながら話をしました。振り返って見るとずいぶん色々な話をしている。この世界に入って八年。やはりもの見方が観光産業に従事する一人の人間の目になってきているのだな、一〇年前だったらこんな話は絶対に出来なかっただろうな、と自分でも驚いたほどだったので、何を話したのかを思い出してみようと思います。

まず気が付いたのは、この土地が駅の裏側で、海との間に位置することでした。言わば線路と海に囲まれた土地。余程シツカリしたアクセス導線がないと、人が集って来ない死んだ土地になります。元の横浜桜木町の三菱重工の造船所があった土地が、線路と高速道路に仕切られた海側にあった土地で、淋しい土地だったのを思い出します。今はMM二一と言うことで開発が進み、沖に向かって土地造成も進んで、かえって賑やかになっているようですが、あれくらいの規模の開発がなされないと、自然に人が寄ってくる場所にはならないのではないか。何かを作って人を集めようとするならば、相当パワ

ーのあるものを作らなければ駄目。例えば、スポーツ施設だったらプロ野球やJリーグのフランチヤイズになる位のパワーが必要なのではないか。或いはコンベンション施設とか劇場みたいなもの。遊びの場所をイメージしているのなら、それこそ強烈な絶叫マシンみたいな人寄せアミューズメントが必要ではないか。アメリカのオーランドに出来た有名なバック・トゥ・ザ・フューチャーみたいな大掛かりなアミューズメントを作れば成功するかも知れない。話題になっっているバック・トゥ・ザ・フューチャーは現在上映時間が四分半程度のものらしいのですが、あまりに刺激が強いので、これを六分にすると発狂する人が出て来ると言われているほどなのだそうです。でも、いくら刺激的なものを作っても、この種の施設には陳腐化の問題があります。一旦、この種のものを作ってしまうと、常に新しいものを追い続けなくてはならなくなり、投資の無間地獄に陥る可能性があるのです。勧めるところではありません。

人寄せ場所を人工的に作って、成功した例はどれ位あるんだろう？ ラスベガスなんてのは、その典型的な例なのかも知れませんが。砂漠の真ん中に、最初はバクチと言っ切

り口で人口の街を作った筈。それがショーと言うエンターテインメントの機能を強め、ホテル機能をバックにコンベンションを誘致して成功し、最近ではアミューズメントにまで手を伸ばして、オーランドに対抗しようとしていると聞いています。デイズニーランド、デイズニーワールドや東京デイズニーランドも勿論成功の事例だけれど、これらはアメリカや東京と言う圧倒的な人口や経済力の背景があつて初めて成功したのではないか。やはり人工的に作られたものは、どう頑張つても本物のパワーには敵わないと思つたのです。ローマのフォロ・ロマーノやコロッセオ、エジプトのピラミッドやスフィンクス、ギリシャのパルテノン神殿なんて何千年の歴史のあるものは勿論ですが、インドのタージ・マハールにしたつて、パリやロンドンの街並みにしたつて、接するだけで本物の迫力に圧倒されます。ハウステンボスも本物志向を大切にしている、その面では評価されているけれども、所詮は作り物。土地が持つ歴史の背景、人間が作り出すことの出来ない自然との調和と言つたものを大切にし、それに加えて環境を美しく魅力のあるものとして保ち、目新しいイベントを企画して、絶え間なく情報を発信する努力をし

ていないとやって行けません。人寄せ場所を求めようとするならば、何か新しい魅力を創り出そうとするよりも、こうした土地が持つ資産を見直すのが先ではないのだろうか。

長崎と言つ街は、こうした観光資産には恵まれた土地だと思います。昔、私が東京へ出て行って間もない頃、長崎の出身だと言つと、必ず「異国情緒があつて良い街なのでしよう。一度行ってみたい」と言つコメントが返つて来たものです。それだけのロマンを持つ、恵まれた街と言つのはそうザラにはないと思つのです。異国情緒なるものが何なのか良く判らない面もありますが、それでも多くの人に、「長崎」と言つただけで、何か違ったものがある、と認識して貰えるだけでも、他の土地よりも有利な点を持つていると言えるのではないだろうか。歴史を見ても、徳川幕府の時代、唯一の外国との窓口だった出島は勿論のこと、オランダや中国との歴史的関係を示す遺跡には事欠かない筈。幕末を取つてみても、勝海舟の海軍伝習所が出来た街だし、坂本龍馬の龜山社中海援隊発祥の地だったし、高島秋帆所縁の地であったり、シーボルトやポンペが活躍したし、売り物は幾らもあるのではないか。近くでは不幸にも核の洗礼を受けた世界でタ

ツタ二つの都市の一つであり、世界平和をアピールする条件は整えている。不謹慎な言い方ではあるけれど、禍を変じて福となす、の好例ではないだろうか。

長崎も旧市街地は道も狭くて車が入り難いとか、駐車場がないとか言った不平の声もありますが、逆に、車の乗り入れ禁止ゾーンを作って、古い町並みを生かすことが出来るのではないか。長崎には路面電車が残っています。観光客の移動にこれを有効に使う手立てがあるのではないだろうか。例えば、車両をレトロ口調にすることで魅力を増すなんて工夫が出来ないだろうか。個々の企業がやろうとすると大変だけど、観光都市作りと言う切り口で、行政が絡んで行けば出来ることなのではないだろうか。

長崎人のお祭り好きも観光資源になるのではないか、と思うのです。長崎は幕府の天領だったことから、竈銭とか言って各家庭に何がしかの補助金みたいなものが下りていたので比較的裕福な家が多く、そのためにお祭りが派手になったと言う歴史があると聞きます。長崎くんちにしても、精霊流しにしても、土地に根付いた立派なお祭りで、全国的に認知されています。精霊流しなんて、爆竹を鳴らして騒ぎ回る単なるお祭りでは

ありません。観光客にとっては珍しい見ものですが、地の人にとっては、れっきとした宗教行事です。お盆の三日間はお墓を綺麗に掃除し、沢山の提灯で飾り、夜にはお墓で花火を上げて帰って来るご先祖さまを歓迎します。精霊流しは、お盆の間里帰りしていたご先祖さまが、また天国にお帰りになるのを送る行事なのです。こう言う背景み
たいなものを知って貰えば、もっと感動を与えるアピールが出来ると思うし、興味を持って貰えるのではないか。最近ではランタン祭りとやらを作って、新しい魅力を創り出す
そうとしているようです。先日見に行ってみました。これは若干作り物なのですが、仲々
のパワーで人気のお祭りになる要素を持っていると思いました。お祭り、イベントを言
うのは強烈な観光資源になり得ます。もっとアピールが出来るのではないだろうか。

長崎人は性格上、自己顕示欲が弱いのかも知れない。自分をアピールするのが下手な
のかも知れません（私を見たら分るでしょう・・・なんて）。でも、竈銭のせいか、長
崎の人はお客を大切にする気持ちを持っていると思うのです。今は大分変化したかも知
れませんが、私が東京で働いていた頃は、お客を大切にすると云う面で、他の土地に比

べて明らかに差がありました。三菱重工業には色々な土地に工場がありましたが、お客が一番行きたがるのは長崎でした。工場や技術力の魅力や土地の魅力もさることながら、長崎に行けば街ぐるみで暖かく歓迎して貰える、と言う印象を持っている人が多かったのです。横浜の工場で営業をしている頃、長崎の工場と仕事の取り合いになることが間々あったのですが、この辺の要素が発注者の決定条件の一つになって、長崎に負けて悔しい思いをしたこともありました。長崎では三菱の造船が最大の産業だったので、三菱の人や三菱の人が連れて来るお客さんは特に大事にされたと言う歴史はあったとしても、料亭や夜の場所でのおもてなしの暖かさはレベルが高いと思っていました。一般的な人達の特性みたいなものは、作ろうと思ってても仲々出来るものではありません。一つの資源と言っても良いのではないだろうか。その資源を守る努力がなされているだろうか。街全体が、他所から見えたお客さまを暖かくもてなそう、例えば、まず、街を綺麗にしよう、なんてことを意識する気持ちになれば、こんな素晴らしい観光都市はないでしょう。

こうした開発に当たって、第三セクター方式が取られるケースが多いけれども、民間の力を活用する方向で計画を進める方が良い、と言う話もしました。官がお金を出すのは良いけれど、その分、口を出すとあまり良い結果に結びつかない。民間がやると、どうしても採算に乗せねばならない。黒字化を目指して努力をする。そのエネルギーは信用すべきであり、尊重すべきではないか。ハウステンボスが曲がりなりにも何とかやって来ているのは、同じ第三セクターでも官からの出資の比率が少ないのと、官が民間の力を信じて口を出さない努力をしてくれているからではないか。今回の開発に当たっても、こうした方式が取られると上手く行くのではないだろうか。

結局、私がこのコンサルタントに向かって主張していたのは、空いた土地があるからと言って、新しいものを作ろうとするのではなくて、同じお金を使うのなら、元々持っている観光資源をもっと生かして使う努力をしたらどうだ、と言うことだった訳で、コンサルタント会社の人達にとっては何の役にも立たない意見だったようです。これだけでは余りに気の毒なので、ハウステンボスの十五人委員会が、このプロジェクトの立ち

上げに当たって実質的に働いた実績を話し、「何か新しいものを作るのなら、うちの社長を含めたその道の天才どもを集めて、ブレイクストーリーミングみたいなものを作って、自由に意見を聞く場を作ったらどうですか」と言う結論にして、お引取り願ったことでした。

(平成九年七月一日)

ルンビニ保育園

四年ほど前、私が総務本部を預かることになった時、一番やりたかったのは自前の保育園を作ることでした。

ハウステンボスには若い女の子が沢山働いています。適齢期になり、当然結婚するでも、殆どの子達は結婚しても仕事を辞めたくないのです。給与水準の問題もあります。この辺の給与の水準では旦那一人の稼ぎでは苦しいので、共稼ぎをせざるを得ない、と言う事情もあるのでしょうか、それに加えて仕事が好きで、出来れば仕事を続けたい、と言う意欲を持った子が多かったです。特に、私が自分で見ていた販売本部の店の女

の子にはその傾向が強いように思えました。いろんな工夫をして、自分の店の売上を伸ばそうとする。自分の店に愛情を持って来ますから、配置転換なんかで店を変えることになろうものなら、店の柱にしがみついて、泣いて抵抗するので説得に困る程でした。売ることが好きで、今日は幾ら売れた、あんなモノが売れた、こんなモノが売れた、と嬉しそうに報告してくれるのです。それだけ意欲を持っている子たちですから、優秀な子が多く、結婚して辞めて行くと戦力が落ちて行く、と言つことで、こちらも引き止めたい、と言つ会社側の事情もありました。

ハウステンボスの出産・育児に対する配慮は、進んでいる方なのではないでしょうか。出産休暇と育児休暇を合わせると、一年位の休みは取れるのです。ですから、子供が出来て産み月が近くなると、「一年経つたら、必ず戻って来ます」ということで休みに入る。そして一年後、意欲満々で嬉々として戻って来る。半数位は、赤ん坊を親御さんに預けて出て来るのですが、これが長くは続かないのです。店の子達の勤務時間はどうしても夜遅くなるし、責任者になれば、なって来る程、退社時間が不規則になるのです。日曜・

祭日は書き入れ時ですから、どうしても出勤になる。親が参ってしまうのですね。比較的若いオジイちゃん、オバアちゃん達んだけど、長くは持たないのです。確かに、生れて一年にも満たない赤ん坊を一日中面倒見ていたら、参るでしょう。オバアちゃんが疲れて病気になった、なんて話になって来る。それでも何ヶ月かは頑張るんだけど、結局は泣く泣く辞めざるを得なくなるのです。

半数位は、子供を保育園に預けて出て来ていましたが、これも難しいのです。一年未満の赤ん坊を預かってくれる施設はあるのです。ここに朝預けて出て来るのですが、まず、赤ん坊が環境の変化に耐え切れず病気になるケースが第一。やはり母親と離れて過す、と言うのは、赤ん坊にとっても精神的なストレスになるのでしょう。朝、置いて出て来る時に泣かれて辛い、とか、帰りに迎えに行くと、本当に嬉しそうに喜ぶ、何て話を聞かされると、身につまされるような気持ちになります。精神的なストレスが原因で赤ん坊が病気になる。団体生活ですから、病気を貰って来る。可哀想だから、という事で、仕事を辞めざると得なくなるのです。それと、一般の保育園には時間の制限

があります。夜は六時頃まで、日曜・祭日は休み、なんてところもあります。これではどうにもならない。復帰して来て暫くは、周りの皆も気を使ってくれて「早く帰って上げなさい」と言ってくれるけど、これが長くなって来ると、皆が遅くまで頑張っているのに自分だけが早く帰して貰って申し訳ない、と言つ気になって来る。居辛くなって来る。責任ある仕事は出来なくなって来る、と言つことで、やはり辞めて行く。

母親が日中、時々は顔を見せてやれるような近くに、出来れば場内に、そんな施設を作ることが出来ないだろうか。時間に制限されないで、日曜・祭日も預かれる、夜も遅くまで預かってくれるような保育園が出来ないだろうか。

早速、担当を作つて、研究に入りました。役員会でも予算獲得のための事前のジャブを打ち始めました。ところが研究が進めば進むほど、難しさが判つて来ました。まず、土地は何とかするとして、建物・施設には当然のことながらお金がかかります。全部自前と言つことになると、利用料を相当高いものにせねばなりません。これでは、何のためによっているのか判らない。福利厚生施設と言つことで、会社から補助みたいなもの

が出せないか、考えてみるけど、経費節減に走っている経営状況の中では、どうしても予算が出て来ない。やはり、こうした施設は、商売ベースだけではダメで、自治体からの補助を貰わないとやれないものだ、と言うことが判りました。営業時代に一緒に仕事をした県の経済部の部長に紹介してもらって、福利厚生部長に会って話を聞きましたが、やはり、国や県から相当の補助を出す仕組みがあって、補助を受けている公的な保育園の利用料は圧倒的に安いのです。ところが、補助を受けるには、資格の問題があったり、地元の業界団体みたいなものがあつたり、で、これから自分たちがゼロから切り開いて行くのでは、時間が掛かって、直ぐの用には立たないことが判りました。誰か経験のある人によって貰うのが一番の早道のようにです。

丁度その頃、渋谷ながらロータリーに入ったのですが、入って見たら会員の中に、この種の保育園をやっている人がいました。本業はお寺のお坊さんですが、公的な補助を受けて保育園を経営しているのです。この話をしてみたら、考えてみようか、と言うことになりました。察するところ、公的補助を受けた保育園と言うのは、固くて割の良い

商売でもあるらしく、商売としても興味がある様子なのです。少子化の傾向の中で、保育園を過当競争から守ろうとするお役所や業界の中で、商売の拡大が出来難い状態にあったところへ持って行った話なので、お坊さんにとっては逆に、渡りに船、だったのかも知れません。でも、こちらはこちらの希望するものが出来さえすれば良いのですから、一緒に検討することにしました。こちらの事情は最初から理解して貰い、日曜と祝祭日の利用、深夜（少なくとも二十二時まで）の利用を条件にしました。地元の業界対策の方には手が出せませんから、この方面は専門家に任せ、こちらは専ら県や市に働きかけて、予算を回して貰って、早く許可を降ろして貰う工作に入りました。既存の保育園からは二キロ離れていないと許可が下りない、とのことで場所の選定。少子化の傾向の中で、保育園の新設は一般的には認められない、と言うお役所を説得するために、社内でマーケット・リサーチのアンケートを取って、その結果を取りまとめて必要性を説明し、このお坊さんが申請書を出す際の添え書きの材料にしたりしました。県には事前に相談してあったので、話は比較的楽に通り、小一年かかりましたが、新設の許可が下りまし

た。お坊さんも喜んでけど、こちらも人の禪で相撲が取れることになった訳ですから、大喜び。早速、社内へのPRもやりました。

許可さえ下りれば、それ程難しい施設でもありませんから、建設は直ぐです。平成十一年の十月に開園の運びとなりました。お坊さんの施設らしく、名前が「ルンビニ保育園」。ルンビニと言っるのは、お釈迦様がお生まれになった、インドだかネパールの土地の名前だそうです。開園の時点では私は立場が変わっていましたが、計画段階での功労者と言っことで、開園式に招んで頂き、お坊さんと乾杯して喜び合いました。定員六〇人の内、一ヶ月で八〇%が埋まっているとのこと、滑り出しは好調。その内、ハウステンボスの関係者が半分以上とのことでした。既に、他の保育園を利用している人が中途で移動するのは難しいでしょうが、これから利用しようとする人にとっては喜ばれる施設だと思われ、ハウステンボス関係者の利用度がドンドン増えるだろうと思っっています。これで若いパートナーさんを含めて、優秀な人材が引き止められれば、最初の目的は達成されたことになります。

目的を持ってやっていたれば、道は通じるものだ、ということでご紹介してみました。

(平成十二年五月二十七日)

女難の相

一寸センサーシヨナルな題名にしたので、驚いた方もおられたかと思いますが、ご想像頂けるように、女難と言っても私自身のことではないことを、まずお断りしておきます。ある種、会社の恥に類することも知れませんが、結果がハッピーエンドだったし、面白い経験をしたので、内々にご紹介するものです。人事・労務を担当する総務本部長なんてのは、こんなつまらない出来事にも巻き込まれるものだ、と言う愚痴の意味もあります。

社長のところに、匿名の手紙が来ました。曰く「自分は御社のX部に勤務する女子社員のお父さんである。娘が同じ部で席を並べているA係長を首にするか、どこか遠いところに配転して欲しい。A係長は酷い男で、妻子がありながら自分の娘と深い関係にあり、娘は妊娠して中絶させられた経験もある。別れさせようとしたが、娘の方はAを好きに

なっているし、近くに居ては別れづらいと言っている。Aの身边を調査してみたら、過去こうした問題を度々起こしているし、現在他にも女はいるし、ギャングは好きだし、余りに酷いので、思い余って社長に直訴するものである。Aと娘の関係は周囲の誰も気が付いていないことなので、娘に傷を付けないように、娘に分らないように、早急に内密に、出来るだけ遠くに配転して欲しい」と言う内容なのです。

相談を受けて手紙を見せてもらうと、便箋五枚にビッシリ、この辺のことが切々と訴えられているのです。文章も分りやすくしてシッカリしているし、字も慣れた大人の字です。達筆と言つて良いでしょう。女性の手ではないか、と言つ見方もありましたが、匿名とは言えこれだけ具体的に要求されたのでは放つておくことは出来ません。社長の言うこと「基本的には、色恋は個人の問題だから会社がどうこう言える筋合いのものではないが、上司と部下と言つことになると放つては置けない。若し、事実としたら父親としてはたまらないだろう。こんな手紙を書く気持ちも分るような気がする。総務本部長に一任するから善処してくれ」と言つ訳です。ことがことですから極秘で処理すること

にし、人事部長とだけ相談して進めることにしました。

まず本人のAですが、前から良く知っているけれど、背は高いけれども格別良い男と言っわけではありません。仕事ぶりも地味だし、話す態度もモソモソしていてシャキッとしない。私に言わせれば、およそ女に持てそうにないタイプの妻子のある三十男なのです。年は大分違っけれど、私の方がズーツと良いのではないか、ナンテ。本当にこんな男にこんな大それたことが出来るのだから、そんなに隠された才能があるのだから、と言っ点にまず疑問を持ちました。Aの上司にそれとなく聞いて見ましたが、私の方とそれ程のズレはありません。女の問題は隠せるとしても、ギャンブル好きなんてのは何処かに現れるものですが、全くその気配もない、と言います。こう言っ男と女の付き合いは、本人達は隠している積りでも、廻りには何となく分かるもので、特に女の子なんかは敏感に察するものではないかと思っましたので、この辺もそれとなく当たってみるけど全くその気配が出て来ないのです。そんなに上手に立ち回っているのだから。

とにかく相手の女性、つまりこの父親の娘を発見しなければどうにもなりません。グズグズしている内に頭に来た父親にマスコミなんかを持ち込んだりされたら一大事です。娘の立場を考えて内々に処理してくれ、と言つ父親の要求には反することになるけれど、ここは本人のAに当たる他ない、との結論に達しました。

A本人を呼んで「こんな話が『さる確かな筋』から入ったけど、どうなんだ」と聞くと、顔色を変えて「とんでもないこと」と否定します。疑いを持たれるような心当たりはないか、聞いてみるけど、全くない、と言います。「若し事実でないとしたら、これだけの噂を立てられると言つのは、余程人に恨みを買つことでもないと考えられないが、どうだ」と聞いても、これも心当たりがない、とのこと。この辺になると、私自身がコロンボ刑事にでもなつて、犯人探しをしているような気持ちになつて来ました。やっと、Aはテニスが上手で、同好会的なものリーダーをやつていて、ここで女の子たちとの接触があること、グループで飲んだりする機会があることが判つたので、その中の誰かと『差し』で食事をしたり、飲みに行つたりしたことはないか、詰めて行つたところ、

どうやら一人、そんな娘がいるらしいことが分かり、その娘の名前も聞き出しました。同じ課のB子と言います。仲々可愛い男好きのする目立つ子で二十六歳。若しこれが事実とすれば、コン畜生上手くやりやがって、とやっかみなくなる程の子なのですが、それ以上のことは絶対にない、と主張するのです。Aは、そのB子にしか心当たりがないので、本人に聞いて見たいと言いますが、その筋からこちらの動きを父親に察知されると厄介なことになるので、直接の接触は暫く待たせることにし、裏を取ってみることにしました。

女の子の場合、入社の際の保証人が父親であることが多いので、保証状を引っ張り出して字を比較してみました。似ても似つかぬ字。少なくとも手紙の主がB子の父親でないことは分ったものの、女の手とすれば、母親が代筆したのかも知れないし、対象がB子ではないのかも知れない。X部の女の子全員の入社時保証状を調べてみましたが、同じ字の父親は見当たりません。不思議なことに、この匿名の手紙の裏に発信人の郵便番号だけが書いてあるので、その地区に住む子を探してみるけど、特定が出来ないので

す。遂に、これはA本人の協力を得なければどうにもならない、との結論に達しました。実を言うと、最初この手紙を見たときは、内容があまりにも真に迫っているので、一方では、まさか、と思いつつも、あるいは事実かも知れない、と思っていたのですが、ここまで来たら疑いを捨てて、Aの汚名を晴らす手伝いをしてやろう、と言う気になって来ました。Aの汚名を晴らすことは、会社に対する誹謗を排除すること。味方になってやろう、と言う姿勢で接して行けば、Aも本心を明かすのではないか、と言う打算も一部にはありました。

匿名の手紙が社長宛に来たということは伏せて、女子社員の父親と称する人からの手紙が発端になっていることを話し、手紙の一部を見せて、「一緒に犯人探しをしよう。協力してくれ」と言うトーンに変えました。Aが「こんな手紙を書くのは、前に聞いたことのあるB子の彼氏しか考えられない。どうしてもB子に話してみたい」と言うので、その線を進めることにしました。

AからB子に話し、どうやらB子からその彼氏のCにも当たったらしいのですが、「犯

人が判った」と言つて来ました。手紙を書いたのはCだったと言つのです。Cはこれも妻子のある四十台の男。C子が前に勤めていた会社の上司で、もう七年もの付き合いだと言います。最近こちらから別れ話を持ち出したら、相手がノイローゼ気味になっている、とのことで、手紙の内容は、どうやらC本人自身のことを書いていたと言つことらしい。B子から持ち出した別れ話の原因がAにあるのではないか、と考え、AとB子を切り離せば別れなくて済む、との浅はかな考えから父親の名前を騙つて手紙を書いたものらしいのです。どこかの三文小説か、低俗な雑誌に出て来るような話です。念のため、と思つて、CがB子に出した手紙のコピーでも手に入らないか、当たつたところ、筆跡もピッタリ。郵便番号も一致して犯人が確定出来、メダタシ・メダタシと言つことになりました。長島コロンの初手柄と言つ訳です。

Aには「女難の相は男の甲斐性かも知れないぞ」と笑い話にし、B子の方には「今回の件は、周りは誰も知らないことだから、居辛くなった、と考えて辞めたりする必要はない。Cとの付き合いを止める、とは言えないが、こんな騒動を起こすなんて、まとも

な男ではないから気を付けなさい」と話し、「何か困ったことがあったら相談に来なさい」とか何とか優しいことを言つて、涙を流されてしまいました。これで良かったのだろうか。自分の近くにこんな事実があったことを知つて、何だか複雑な気持ちです。私の古い感覚からすれば、こんな、言わば乱れた生活をしている女性は、生活態度自体もいい加減なのではないか、と思いがちなのですが、その後も気を付けて見ていると、この娘は仕事ぶりはシツカリしているし、直属の上司を含めて周囲の評価も高いのです。真面目な顔をして仕事をしているけれど、そうした面で裏に大きい部分を持っている娘が他にも数多くいるのだろうか。そして、それが別に驚くほどのことではなく、極く常識的なことなのだろうか。

そう言えば、こちらへ来てから、こうした面でビックリさせられることが少なくありません。真面目で堅そうな独身の若い娘が、突然「流産しそうなので、勤務に無理が来ない」と言つて来たり、子供が出来たので結婚する、と言うカップルの仲人を頼まれて見たり、可愛い顔をしたまだ十代の若い娘が「昨日、パチンコで勝つたので、彼にス

テーキを奢ってホテルに行った「なんて、ポロリと白状したり。この辺りの地域の男女関係が特に進んでいるのが、それとも最近の若い人たちの感覚が、こんなものなのだろうか。でも、これまでのところは、私が驚かされたケースは総てハッピーエンドで、仲人をさせられたり、結婚式にご招待を受けたりしていますから、当今の若い人たちの常識が私のそれとは大分かけ離れたところにある、と言うだけのことなのかも知れません。

お釈迦さまが、女性にょしやうのことを称して「外面げめん似菩薩にぼさつ、内心ないしん如夜叉にょしゃ」(外見は菩薩のよう
に穏やかで美しいけど、心は夜叉のように激しくて醜い)と言われたそうです。私が言った訳ではありませんので、異論がおりの方はお釈迦さまの方をお願いします。女性というものは、元々そう言うコワイ存在なのでしょうかね。エッ? 六十年の余も人間をやっていて、そんなことがまだ分かっていないのか!」ですって??

(平成十一年八月一日)

才人

世の中には、才人と言われる人がいるものだ、と云うことで、今日は神近義邦と云う人の話をします。この人はご存知のように、ハウステンボスの創業者で現在社長をしている人。自分の会社の社長のことを礼賛したり宣伝したりする積りはありませんが、やはりこの人は才人、現代の天才の一人だと思つてはいます。

大体、いくら切羽詰つたからと云つて、ド田舎の農業高校の定時制出の町役場の役人が、いきなり東京に出て行つて、倒産寸前だった赤坂の一流料亭の経営を任せられ、これを建て直す、なんてことがあり得るのだろうか。これが契機になつて、「十年先を駆け抜けた男」の異名を取つた高橋高見と云う強烈で一流の企業人の眼に止まり、鍛え上げられて経営の才を磨き、これがハウステンボスなんて途方もないことを始めるキツカケになつた訳です。経理や株式や不動産に詳しくなつたり、法律の知識があつたりするのは、この間に勉強したのでしょう。広い分野の知識を、耳学問から入つて短時間の内に自分のものにする能力は大したものですよ。真剣に仕事をしていけば、こうした知識は自然と

身について来るものだ、なんて言っていますが、この辺が頭の良さと感性なのではないでしょうか。宣伝広告業者やマスコミとの付き合い、集客の手法なんかはオランダ村を運営してきた経験の中で積み上げてきたことなのでしょう。でも、自分には一銭の金もなく、担保もなしの徒手空拳で銀行から二千億円以上の借金をする。これは常人では出来ないことでしょう。大会社のトップを口説き落とす名人と言うことで、一時、オジン殺し、とか、オジンたらし、の異名を取ったことがあつたと言われます。それ程、年寄りを口説くのが上手かつた。本人は、一生懸命に熱を込めて事業の説明をしただけだつた、と言っていますが、人の心に訴えるものを持つていたのでしょう。当時の財界のトップの殆どが大正生まれで、大正ロマンと称するものを持つていた人たちで、こうした夢に賭ける話が好きだつた、と言う一種の運もあつたのかも知れません。景気も良かったと言うことで時代の波に乗つたという点は否定出来ません。景気が悪くなり、現実を目を向けざるを得なくなつた昭和二桁生まれが力を持つて来ている昨今の財界では、こんな夢の後押しをしよう、と言うトップは中々いないのではないか。そういう意味では、

時の運、人の運みたいなのを味方につけた人、と云うことが出来るのかもしれないけれど、これだけの広大な荒地に借金だけでこれだけのものを作ってしまった能力と云うのは、普通の人にはないものだと思うのです。

これは一種の戦略なのでしょうが、その業種のトップクラスの会社のみと付き合っている、と云うのも見事なものです。銀行の力も借りたことでしょう。興銀の中山素平氏の信用の力を借りた面が多かった、と云う話を聞いたこともあります。でも、基本的にはそれらの一流といわれる会社のトップと接触して、その人達を説得し、信用させるだけの力があつた、と云うことだと思えます。銀行の関連を除けば、生命保険なら日本生命と明治生命。損保は東京海上一本。重工業で三菱重工業。自動車は日産。船会社は日本郵船。電氣の關係は富士通と松下。商社は三菱商事。広告は電通。不動産が三井不動産。飲料がキリンとサントリー。ゼネコンは清水。運輸がヤマト。フィルムは富士。他にも食品系で雪印乳業、伊藤ハム、UCC、上島珈琲等々。旅行会社をJTB一本に絞つたことについては、商売上やり難い面もありましたが、筋を通しているのは一つの見

識です。

宣伝広告について言えば、情報の発信を、金を使った宣伝のみに頼らず、報道と云うか、ニユース性で打ち出して行ったのも見事な作戦でした。最初から東京にプレス・オフィスを作って、マスコミとのリレーションの窓口にしました。田舎からの発信では、いくらお金を掛けて広告を打っても浸透する力は知れているし、宣伝費が掛かってしまったものではない。それなら常に何か新しい話題を打ち出して、ニユースとして取り上げて貰おう、と云うことです。これなら只で情報の発信が出来ます。ですから、社長へのインタビューや講演なんてものも大切にしています。「平成の好漢」とも言われた一種の話題の人ですから、結構インタビューや講演の依頼は多いのです。この結果、一年の電通の調査によれば、ハウステンボスの情報発信量は東京ディズニーランドを二〇%も上回っていた、と言います。

大体、このプロジェクトは神近義邦個人の頭の中に出来た構想を実現して行った、と云うことなのです。そういう意味では、自分は無一文なのに、何も無い荒地と云う真っ

白なカンバスを与えて貰い、二千億円のお金を使って、自分が描いた夢物語を、実際に思い通りに描いて行く機会を与えられた訳ですから、幸せな人とも言えるのでしよう。でも、これだけの構想を描ける人と言つのはやはり常人ではないと思います。作つて行く過程でも、凄い人だ、と思わされた場面が数多くありました。工事に掛かる前に最初に作つたのが工事に従事する人達が使うであろうトイレの浄化槽だった、とか、水や自然に対する配慮とか、この辺は周囲の色んな人が理想として考えていたアイデアを実行に移すだけの力を持っていたと言っただけのことだったのかも知れませんが、そうした配慮が、お金は掛かっても長い眼で見るとプラスに働く、と言っ計算が出来ていたのではないか、と思わされるほど見事なものです。本物を追求するために、パレスに貼りかけたレンガを工事の途中で大量に剥がして四千万円もかけてやり直したのも、当時は大変な損害だ、と思つたものですが、これが伝説になつて宣伝で充分元を取っている。結果から見れば計算づくだった、と言えるのでしょうか、やり直しの決断をする時点でそんな計算が出来ていたのかどうか。街を作つて行く上でも、本当に隅から隅まで自分で眼

を光らせていました。例えば、一つ一つの売店の床の色と壁の色の調和とか、天井の高さ、光の入り具合、入り口の方角、棚のレイアウト、レジの位置など。ホテルの部屋について言えば、絨毯の色合いとカーテンの色の調和、壁紙のデザインの決定、ベッドカバーの柄から家具選びに至るまで。レストランだと店の内装は勿論、メニューの構成から食器のデザインまで。私なんかだと、どちらにしようか、と迷うところでしょうが、それが全くの迷いがなく、ひと目でスパツ・スパツと決めて行くのです。元々デザインなんかには興味も眼もない私にとっては正に神業に思えたことでした。それもその場の思いつきと言つのではなくて、担当がプロのデザイナーと一緒になつて時間を掛けて作つて持つて行く提案に対しても抵抗出来るくらいの理論の裏づけと説得力を持つているのです。パレスの壁画のテーマを決める際にも、現存するオランダの王宮の「壁画の間」の絵を使わせて貰う許可が取れない、と判明した時点で、「海戦で海に投げ出された人から見た情景を描くことにしよう」なんて、即座に切り替えている。常人の発想とは思えませんでした。

この辺は幼少の頃、「画家になろう」と言う夢を持っていた言うくらいだったとのことですし、今でも暇が出来るのと油絵の絵筆を持つほどですから、デザインに対する感覚も優れていたと思いますし、十年近くのアランダ村での経験とか耳学問の成果かも知れませんが、料亭時代に宇野千代さんと知り合って可愛がられたと言います。宇野さんのタタ一人の骨董の弟子にして貰った、と言うのですが、宇野さんほどの人に、この田舎者は普通の人とは違うものを持っている、と思わせるだけの何かを持っていたに違いありません。弟子にして貰ってから骨董の勉強を始めた、と言うのですが、確かに詳しい。私にはその詳しさを自分で判定する能力はないし、一種の旦那芸なのかも知れませんが、生半可な知識で対抗しようとする人は、散々やり込められていました。美に対する感覚は宇野千代さんに骨董を通じて教えて貰った、と言っていますが、ハウステンボスに飾ってある陶芸品とかガラス製品、美術品などの蒐集は全部社長自身がやったもの。これも見る人が見れば、ナンだ、と言われる部分もあるかも知れないけれど、私を含めて常人から見れば、大したものになっています。

困暮も強いのです。どういふ縁知りませんが、日本棋院で大竹名人と打って、六段を貰った、と言います。これは本物らしく、長崎辺りで大会があると出て行ってそこそこの成績なのです。普段あまりやっていないのに、偶に出掛けて行ってやると、地方の大会ではありますが、優勝なんかして来る。全く敵わない人です。麻雀も強くて、これは好きで良くやっています。立ち上げの最中の大変な時期にも仲間を集めて夜遅くまでやっている。どうしてそんな気持ちの余裕が持てるのか、感心していました。

最近、ゴルフに熱心になりました。仕事熱心のあまり、あまり健康に良いことをしていなかったのです。私は前々からむしろ奨励していたのですが、ここへ来て熱心になったのです。一年ほど前はハンディ三六で、偶にやると誠に酷いゴルフをしていました。最初から飛ぶことは馬鹿みたいに飛ぶので、お百姓さんは子供の頃から鍬を持って、背筋を鍛えてあるから飛ぶんだ、なんてからかっていたのですが、これが曲がらなくなったら、一年一寸でハンディー一八。追い抜かれてしまいました。それが全くスランプも何もない上り調子一本なのです。フォームは我流で滅茶苦茶ですから、どこかで限界が来る

だろう、と思つていたら、最近是人並みに悩みが出てきてはいるようですが、まだ上昇が止まりません。タイミングと言つるか、感覚が良いのでしょうか。シングル近くまで行くのではないか、と言つのがモツパラの下馬評になっています。

こうした天才がいると、疲れるのは周りにいる普通の人達。毎日近くにいる私なんかは本当に疲れます。どうしても才覚で仕事をしようとするし、その種の能力を持つた人達を重用する。組織は才覚に付いて来い、と言つ仕事のやり方。組織の中で育つた私から見ると、三菱重工でやっていたような、積み上げて、積み上げて、の仕事ではなくて、思いつきで仕事をしているように見えて仕方がないことが多いのです。多くの人が力を合わせて積み上げて決めて来たことが、突然変更される。折角時間を掛けて積み上げて来たものが一瞬にして無駄になり、また、一から始めなければならぬ、なんて眼に遭うことが少なくありません。変更を重ねることが良いものを作るんだ、と言つ信念すらあるのです。人に仕事をさせるより、オレが、オレが、が先に立つ。自分が一番能力がある、と言つことを信じているし、それを誇示しようとしてはまずから、人の手柄も自分が

やったことになる。部下のやったことは評価してあげて、「これは君の手柄だ。良くやった。ご苦労さん」のひと言も掛けて上げれば良いのに、と思うことも再々です。逆に、上手く行かなかったことについては、自分の責任にはならず、責任者を作って酷い言葉を浴びせることになります。私に言わせれば、餓鬼ツ気が抜けないな、と言うことになるのです。もう少し大人になって謙虚さを覚えれば、良い経営者になれるのに、と思います。創業者の能力と経営者の能力は違つのかな、と思うこともあります。川口兄も書いていたように、織田信長が創業者・革命家として天才であったことは誰しも認めるところですが、統治者・経営者になる直前に死んでしまった。統治者・経営者をやらせる時期があつたら、天才・信長としての名が歴史に残つたかどうか。私も何時だったか「信長は良いときに死んだ、と言えるかもしれない」と書いたことがありますが、それはこう言う意味なのです。東のデイスニーランドに比肩する西のハウステンボス、と言うことで、名前も通つて来ているけど、評価されるのは社長のみ。「一将功なりて、万骨枯る」の図式です。自分の夢を実現するために、多くの人を巻き込んで苦労を掛けてい

る。皆に苦勞を掛けて申し訳ないな、なんて意識を持つようになったら、こんな大きなことは出来ないのかも知れないな、なんて思ったりします。いずれにしても、この人が始めたこの事業は、この人抜きでは進まない訳で、立ち上がるまでは頑張つて貰わねばなりません。とにかく、この地で直接・間接に五千人近い雇用を発生させてしまつているので、ここまで来たら継続が重要です。止める訳には行かないのです。

私もこちらへ来て今年で十年。色々な経験も勉強もさせて貰つたし、もうソロソロ勤弁して貰つても良いのではないか、と思つています。役員定年はまだ先ですが、役員の中でも、会長と監査役を除けば、私が最年長になっています。この仕事はもつと若い人のやる仕事ではないのか。私を紹介してくれた三菱重工の先輩も、ここまで来れば許してくれるのではないか。お役御免、お床下がりをごんないやうなタイミングで願い出ようか、なんて考えているこの頃です。まだまだ苦しい時期が続くので、現時点で身を引くと、どうしても敵前逃亡のそしりを免れないのが辛いところです。

(平成十一年五月一日)

おおば比呂志さんのこと

おおば比呂志さんと言う方は、漫画家として知られていますが、暖かくて気持の良い雰囲気絵を描く画家で、随筆集も出されています。一九八八年に六十六才で亡くなっていますが、晩年オランダに暫く住んで、オランダの絵を沢山描いていられることと、画風が暖かでハウステンボスの雰囲気ピッタリだということで、おおばデザインをハウステンボスのキャラクターの一つにしようということになりました。おおば作品は比呂志さんの没後は奥さまと息子さんが管理していて、練馬に小さな美術館を持っていられると聞いて、ハウステンボスの開業前に商品開発のご相談に伺ったことがあります。私が販売本部の責任者になってすぐの頃のこと、商品開発の何たるかも分からない頃のことでしたから、担当責任者としてお願いとご挨拶をした後は、打ち合わせは担当者任せで、「へー、一つ一つの商品を作り出すのにこんな努力をするものなのか」と感心して見ていただけのことだったと思います。

打ち合わせは上手く行って、商品への展開も上手に出来、おおばデザインの商品が沢

山出来ました。原画を借りて来て作品を展示し、作品の下でそれらの商品を販売するお
おばグズ専門店も出来ました。おおばさんの作品を大々的に紹介する展示会をやるう
ということになって、作品を沢山持ち込んで頂き、場所を提供してかなり大掛かりな展
示会をやったことがあります。勿論、奥さまも、画家の道を選んでいる息子さんも見え
て、私も一緒になって準備をしました。その時のこちらの対応が奥さまのお気に召した
のと、展示場の雰囲気が高かったとのことで、おおばさんの作品をハウステンボスで
預かってくれないか、と言う話になりました。画家や彫刻家が亡くなった後、残された
作品を管理するのは大変なことなのです。遺族としては作品を散逸させたくないし、常
に多くの人に見て貰える状態にしておきたい。保管場所の問題もあります。ですから多
くの場合、出身地の自治体に寄付して、市や町が記念館みたいなものを作ることになる
そうです。おおばさんの出身地は北海道とのことで、札幌市かどこかに寄贈すること
なっていたようですが、受け入れ態勢に難があるとか、役所の対応が気に入らないとか
で、ハウステンボスに話があつたものらしいのです。こちらも全部の作品を管理するだ

けの能力はありません。結局、オランダ関連の絵や陶板に限って受け入れることにしましたが、話が進んできて、預けると言うことではなくて進呈したい、「全部、長島さんに上げます」なんてことになりました。頂くということになる、贈与税だとか何だとか煩いことになるので、経理の担当の知恵を借りて、ハウステンボスが無期限で預かることにしましょう、と言う事にして契約書を作りました。

その後も奥さまと息子さんには仲良くして頂いて、販売本部を離れてからも、お見えになると必ず私の事務所に寄って頂いたり、食事を付き合わされたりしていました。

長崎県では一〇年以上前から、博多から長崎までの新幹線の経路をどうするか、について議論が戦わされてきました。県の第二の都市は佐世保なのですが、博多から長崎に向かう新幹線を佐世保に寄せることにすると大変な大回りになります。大変な誘致合戦が展開されたことは想像に難くありませんが、結局、佐世保は通さず、佐賀の嬉野辺りから真っ直ぐに長崎に向けるルートにすることで合意が出来たようです。その代わり、

と言う訳でもないのですが、政治決着の手段の一つとして、長崎市に作ることになっていた県の文化ホールを佐世保の駅前に作ることにになりました。佐世保の駅は古い駅ですが、この駅の改装と一緒に駅前地域を開発しようと言う計画があって、この開発計画の一環として位置付けよう、という訳。建設は県が行い、運営を佐世保市がやる、という形です。名前は小熊座を意味するアルカス。

建設・管理・運営をやる目的で、市が財団を作りました。建設段階まではもっぱら市がやっていたようです。開業前に詳しく見せて貰う機会がありました。立派なもの。金に糸目をつけない、とはこのことではないか、と思いましたが、経緯が経緯ですから、予算も潤沢にあつたのではないかと思えます。担当責任者の勉強の程も窺えました。音響効果を良くするために壁は全部材木の小口切り。床は石。贅沢な二〇〇〇席の大ホールに中ホール、小ホールがあり、地下の楽屋やリハーサル部屋も立派なもの。日本間の大広間があつて茶室がある。オーディオ製品も最新のものが揃えてあります。こんな施設をフルに使いこなす機会が果たして一回でもあるのだらうか、と疑問に思いました。

こうした建造物は長年残って多くの人の目に触れるものですから、作っているお役人としては、自分がこんなに立派なものを作ったのだ、と言う自己満足のために作っているのではないか、なんて変な勘ぐりをしたくなりました。今年十一月には「豊かな海づくり大会」とか言う全国規模のフォーラムなんかがあるとのことで、天皇陛下をお迎えすることになっているのだそうです。この会場がアルカス佐世保に決まっているとのことで、これが当面の目玉のようです。

ハードを作るまでは、お役人の勉強で出来るのですが、運営するとなるとお役人の感覚では無理だろう、と言う市長の意向で、こうした施設の運営・営業に経験のあるハウステンボスから応援して貰えないか、との相談を受け営業要員を四人ほど出向させました。案の定、お役人さん達の感覚は、これだけ立派な施設を作ったのだから、後は申し込みのあるのを待つて使わせてやれば良い、位の感覚だったそうで、やはり親方日の丸の姿勢。こんな努力不足の結果で借り手が集まらず採算が取れなくなっても損は市や県に持って行けばよい訳で、責任を取る人はいないのでしょう。これだけの施設を満

杯にし、上手に運営してゆくには積極的に売って出る姿勢が必要です。曲がりなりにも六・七年間人集めの苦勞をした営業の経験が生きて、ハウステンボスからの出向者は大変な戦力になっていているようです。市にも喜ばれているし、当人たちもハウステンボス開業当時の熱を思い出して、張り切ってやっているし、その内にハウステンボスでは人減らしが強烈さを増しましたから、この出向は「三方一両得」ではなかったかと自画自賛しています。柿落としてN響を招んだりしていましたし、先日ご紹介した志ん朝の落語会もこの営業努力の一環でした。お役人達の間では、落語会なんて頭があつたと思えませんが、志ん朝を提案して実現に漕ぎつけて貰い、私にしてみれば渡りに船で、良い目を見させて貰いました。

開業イベントの一つとして、おおば比呂志展をやりたい、と言つので、昔のよしみで私から先方に一筆認め、ご了解を頂いて展示会を開きました。開催期間は昨年五月のひと月ほどでしたが、大勢の鑑賞者がお見えになったとのことで、佐世保の市民の皆さん

におおば作品を紹介することが出来て、奥さまと息子さんにも喜んで頂きました。

(平成十四年三月十日)

ハウステンボス監査役就任

先々号でお話した私自身の件。あれから周りの役員の間とか、ナンバーツー位までには「今年でこちらへ来てもう十年になる。ソロソロ勘弁して貰っても良いのではないか」とお床下がりのお話をして来ました。先期は、不況の影響で入場者数は減らし、売り上げも落としたけれど、経費削減などの経営努力が実って、決算内容は改善しています。まだ、経常赤字は脱却出来ませんが、赤字幅は減少。金融団に約束した減価償却前の段階での黒字は三年連続で達成しました。減収減益と言いたいけれど、減収減損と言うことでしょうか。昨日の株主総会も無事済ませることが出来ました。「金融危機(三)」で懸念したようなミクロの心配は未だ残っています。金融監督庁の姿勢も最初の勢い程ではなく、不良企業分類のルールの適用を若干現実的と言っか弾力的に考えよう、と言う方向に変わりつつある雰囲気が見えます。監督庁の最初の姿勢に驚いた銀行が過剰反応

して、自分を守るために、個々の企業を徒に締め付ける姿勢は今のところあまり変わっていませんが、これが何時頃緩んで来るのかな、と思つています。とは言つても、ハウステンボスも開業後七年間の赤字の累積が、今年で八百五十億円を超えて来ました。銀行団に対して「長い眼で見てください」と言つ約束で始めた事業ではありませんか／予定通りのペースで経営改善はして来ています／三年後には黒字が出せます／新しいルールを後から作つて、それを押し付けるなんて酷いではありませんか」なんて言つても、この累損は大き過ぎます。先日、宮崎のシーガイアの決算が発表されました。やはり今年度も百八十億円の売り上げに対して、同じ規模の経常損失になっています。累損が一千億円を越して来た、と話題になっています。県と市が合わせて五〇パーセントの出資をしている名実ともに第三セクターであることと、二〇〇〇年のサミットが、宮崎県が沖縄・福岡との共催で開催されることになったので、それまではやらせてくれ、と言つことでヤツと持つていると言つ図式ではないでしょうか。でも、累損の大きさから見れば、当方も大きなことは言えません。こう言つ人寄せ施設と言つのは、何だかんだと

言ってもイメージ商売、人気商売ですから、こんなことが話題になって評判が落ちてもいけないので、累損は消しておこう、と言う計画を立てています。

最初の土地の購入費（簿価）が坪当たり三万円でしたが、これが現在時価で坪当たり四〇万円を越えています。土地の一部の四〇万坪程度を評価替えて、含み益を吐き出せば累損は消せるのです。累損を消した上で黒字化し、上場基準を満たすことが出来れば、国内のみならず海外でも株を売り出して資金を調達し、借金を一気に返してしまおう、と言う作戦です。この事業は、むしろ海外で興味を持つ人が多いから、最初から海外で株を売り出しても良いのではないか、と言う人もいるのです。数年前に東京デイズ・ニールンドが上場したときは、株に一五〇倍の売価が付きました。ハウステンボスの現在の資本金は二十一億円ですが、上場したら四十億円位の増資は出来ると見えています。株価は、東京デイズ・ニールンド程の人気は出ないとしても、例えば半分の七〇倍で売れたとして、二八〇〇億円の資金が調達出来ます。これで二千億円の借金は一気に返せることになります。金利に比べれば、配当なんて安いものですから、こうなれば充分やつ

て行ける、と読んでいます。

と言う、満更夢でもない計画はあるのですが、当座はそんな悠長なことは言っていない。今年もかなり強烈なリストラを進めねばならないのです。ダブっている人員や経費を削減するのは、比較的容易に出来るけれど、五年間も絞り続けた身体を更に絞るのは大変なこと。社員のみに負担を要求するだけではなく、役員の数も役員の人件費も減らさねばならない。役員年俸のカットは、私からお願いして大分厳しいものになっています。役員の中から、「総務本部長は役員をいじめて社員に迎合している」なんて言う声が聞こえるほどです。人員削減の責任者の自分が減れば社員の何人分かになる。役員の中では、会長と監査役を除けば私が最年長になっています。と言うことで、ソロソロ引退を考えたい、と言う内々の話をして来たのですが、組織統合と言う良いタイミングで公式に話をする機会が出来たので、役員減らしの提案をして、スムーズに現役を降りることになりました。銀行からは既に管理部門を中心に役員が入って来ています。銀行が入って来ると言うことは、銀行管理の方向が強まると言うことで窮屈にはなるけ

れど、銀行としても本気で支援しようと言う姿勢の現れですから、企業と雇用を残す、と言う観点から見れば歓迎せねばならないことなのでしょう。これまでは「金」は銀行に握られていたけれど、「人」は曲がりなりにもこちらが抑えていたのですが、私が退けば「金」も「人」も銀行に握られることになる。社長とは、それだけが心配だ、と言う話をしました。あなたみたいに気持ちの温かい人に「人」を握っていて欲しかったけれど、今や仕方がない、と言うのが社長の判断でした。

完全に退いても良かったのですが、監査役に残ることにし、関連会社の社長を引き受けることになりました。完全に退社して、ハローワーク（職業安定所のこと）に「パソコンと英語が出来ます」と登録して職探しをして、暫くはどこか全く関係のないところで事務員さんに雇ってもらったら、気楽で良いだろうな、なんて夢を描いたりしていましたが、そこまでは行きませんでした。

この関連会社は、ハウステンボスにエネルギーを供給する会社で、ハウステンボス熱供給会社、と言います。ガスや電気を買って来て、蒸気や冷水・温水を作って施設に供

給する会社です。資本金一億円、売り上げ十五億円程度の小さな会社ですが、株主が西部ガス（五〇％）、九州電力（三八％）で、小さいながらも公益事業ですから、赤字にはならない会社。供給先、言わば客先が一〇〇％ハウステンボスなので、客先側から名目の社長を出していると言ふことなのです。事務所や工場は敷地の中にあるとは言え、全くの別会社。本体の影響の比較的少ない会社ですから、これからは少し楽が出来るのではないかと期待しています。社長とは言っても、ガス会社や電力会社の、半分お役所みたいなところのコントロールを受けるのですから、そう自由は出来ないみたい。それと何と言つても人使いの荒いハウステンボスのグループの中にいる訳ですから、楽をさせて貰うなんて甘いことは考えない方が良くも知れませんが、収入は若干減るけれど、蓄えを（大した蓄えでもありませんが）食い潰す程ではなく、年金のお世話になるのはもう少し先のことにします。新しい会社の様子を聞いてみると、役所の感覚が半分残っていて、勤務時間がシッカリしているみたい。工場は二四時間、三六五日体制ですが、三交替の仕組みで完全に委託されていますので、管理部門の方は定時退社、土曜日曜の

休日がシツカリ守られている、と言う結構な会社です。少なくとも時間的には楽になり
そうで、久し振りに週休五日制に戻れそうです。

これまでとはあまりに環境が変つて、慣れるまでに時間が掛かるかも知れないけど、
これまでが異常だったのですから、少し楽をして、散歩の山歩きをしたり、若しかした
らゴルフの練習に身を入れたり（やらないかも知れないけど）、やりたかった整理こと
をしたり、本を読み直したり、出来るのではないかと楽しみにしているところです。
そう言えば、相模原の家の店子になっている娘夫婦が、本棚の整理をして私の本を沢山
送ってくれました。ダンボール箱に一一個ありましたが、整理してみると良い本が取つ
てある。私の蔵書も我ながら大したものです。あれも読み直したい、これも読み直した
い、と残して行ったら八箱分残りました。全部はとても読めないけど、良いタイミング
で大きな楽しみが出来ました。

と言うことで、新しい生活のパターンを探そうとしているところです。

（平成十一年七月一日）

ハウスステンボス専務取締役退任挨拶

ハウスステンボスの専務を降りて監査役に就任するに当たって、役員会でこんな挨拶をした。私のハウスステンボスでの十年間の思いを述べた積りなので、紹介する。

まだ、此処を離れる訳ではなく、皆さんとお仲間の積りなので、ご挨拶は遠慮しようかと思いましたが、一つの区切りですので、ひと言ご挨拶申し上げます。

こちらへ参ったのが、昭和天皇の亡くなった年。平成元年の六月でしたので、今年で丸十年になりました。こんな壮大なハウスステンボスの計画が進んでいるなんて知らないで来たのですが、この十年間、良い経験をさせて頂きました。ゴルフ場の計画と建設を半年、商事の仕事と言うことでオランダで七ヶ月。帰って来てオランダ村の営業を少しやっつて、販売本部を三年半、営業を一年十ヶ月、総務を三年五ヶ月やらせて頂きました

た。いずれも私にとっては全く未知の分野で、私自身も苦勞しましたが、社長を始め皆さんにも大変ご心配とご迷惑をお掛けしました。社長の得意な言葉「最初からプロはいないよ」と言う言葉だけが頼りで、自分なりに一生懸命やって来た積りですが、結局はどの部署でもプロになり切れず、ご迷惑をお掛けしました。正直なところ、やっていく間は、余りに苦しいので、何でこんなことをやらされるのか、と恨みの方が大きかったように思いますが、今になって思い返してみると、非才でズブの素人の私に良くぞ思い切って、こんなに色々なことをやらせて頂いたものだ、と感謝しています。この十年間は、三菱にいた三十年間よりも圧縮された良い経験をさせて頂きました。社長を始め、私を支えて下さった皆さんに改めてお礼を申し上げます。

折角の機会ですから、一つだけ思い出話をさせて頂きます。販売本部を預かって間もなくの頃、社長に強烈に叱られたことがあります。叱られたことは皆さん同様、数知れず、ですが、これが一番強烈だった。若い人を海外に出張させる件に絡んでのことでしたが、考え方が甘い、とのお叱りでした。ホールンの社長室で昼の時間に、社長は弁当

を食いながら、私は食べないで立ったままで、一時間は叱られていたと思います。でも、散々叱った後で、「あなたはそこが良いところなのかも知れない。そのままやりなさい。甘過ぎたらこちらでチエックするから」と言われたのです。これは強烈な印象でした。それから私の性格上、仲々厳しくはなれませんでした。常に、甘くなっていないかと自分なりに気をつけて来た積りです。これが社長が何時も言っておられる「人の長所と付き合え」と言つことだと思つています。

私は常々、ハウステンボスと言つこの事業は、本当に立派な事業だと思つています。自分でもそう信じているし、機会あるごとに配下の皆さんにも言つて来ています。研修時の講話や新入社員への訓話の時に、「こんな立派な事業に参画し、この事業のために働けることを誇りに思いなさい」と言い続けて来ています。一番苦しい時期に私がここを離れることになって、心苦しい思いがしていますが、この事業は是非成功させて頂きたいし、必ず成功するものと信じています。これからも仲間の一人として、出来るだけのことをしたい、と思つています。引き続きよろしく願ひします。

(平成十一年八月五日)

ハウステンボス退任

前号でハウステンボスの監査役を降りることはお知らせしましたが、同時にハウステンボス熱供給株式会社の社長も一年で退任することになりました。

ハウステンボス熱供給株式会社と言う会社は、言うまでもなく、ハウステンボスに冷温熱を供給する目的で創られた会社です。ハウステンボスが計画段階にあったごく初期の頃、神近は、ここの熱源は環境に最も優しい天然ガスしかない、と考え、当時、西部ガスの社長をしていた和智午郎という人のところに相談に行きました。和智さんという方は大変な大物社長で、西部ガス中興の祖、と言われている方。会長から相談役になられ、この四月に八十一才で亡くなりました。九州は天然ガスの普及が遅れていて、当時は天然ガスの基地が一つしかなかったと聞いていますが、和智さんの英断で、ハウステンボスには天然ガスを供給しよう、と言うことになり、百八十億円という大変なお金を

掛けて佐世保の近くに基地を作り、ここからパイプラインを通して天然ガスを送つてくれることになったのです。お蔭でこの地域の天然ガス化は九州では北九州に次いで二番目だったと言います。この天然ガスを受け入れて発電し、コ・ジェネを使って冷熱・温熱を作り、ハウステンボスの施設に供給しているのがハウステンボス熱供給と言つ会社だ、ということとは以前ご紹介した通りです。ですから、この会社の事業の主体はガスと言つことになる訳で、株主構成は西部ガスが五〇%、九州電力が三八%で、ハウステンボスの出資比率は一二%しかありません。西部ガスの子会社と言つことになるので、社長はガスから出るのが当然のことなのですが、こつう事情で出来た会社だし、需要者といつか供給先、言わば買主は一〇〇%ハウステンボス関連会社と言つ訳ですから、代表取締役はハウステンボスの役員が兼務することにしよう、と言つのが和智さんと神近の当時の約束だったそうです。

私は昨年、取締役を降りて監査役になり、兼務と言つ事でこのハウステンボス熱供給株式会社の社長に就任したのですが、この会社は言ってみれば工場を運営する会社です

から、実務部隊はガス会社から来ている人たち。技術屋の集団ですから、社長と言っても名目のみです。営業をやるうにも客先は固定していますから別にやることもなく、やることと言えば、借金している幾つかの銀行との付き合いくらい。それでもタツタ一人の代表取締役ですから、決済の最終印は押さねばならない。何かの行事の時にはご挨拶的なお役がある。役所に提出する書類には判を点く、と言う程度であまり役に立つ仕事はしていないな、来ていないな、と思っていました。

ハウステンボスのオープン後、九年経って経営不振が問題になり、社長が引責辞任するなどの嵐が吹き荒れる中で、今回役員の内定を大幅に引き下げることにし、神近から「監査役を降りてくれ。熱供給の社長は引き続きやってくれ」と言われた時は快く了承したものの、実は私にはオープン当時の経緯やガスとの約束事が良く分かっていなかったので、神近もその辺の認識が薄かったようです。早速、西部ガスの方から、「熱供給の社長はハウステンボス本体の役員の兼務だった筈だ。約束が違う」と言う声が出て来ました。この声が出て来た時「ア、これは私が社長を退任する構造になっているな」

と云うことを感じました。最初の仕組みを作った和智さんは亡くなっている、神近は退陣する、とあつては、ハウステンボスには西部ガス側の「約束を守れ」と云う声を否定する力はないでしょう。

西部ガスからのこの意向の裏には、もう一つのもっと大きな要素があつたのではないかと推測しています。

熱供給事業と言つのは公益事業ですから、一定の価格で安定的に冷温熱を供給するために、通産省の指導と言つか規制の下に損が出ない様な仕組みが作られているのです。コレだけの地域のこれだけの施設に冷温熱を安定的に供給するのだから、コレだけの規模の工場が必要でコレだけの投資が必要。これに税制面での優遇措置を加えて、四年後には黒字化出来るように冷温熱の値段を設定し、これが認可料金になるのです。ですから時間さえ経てば儲かるようになるのが当たり前なのですが、赤字の会社も沢山あります。一つはその地域が計画通りに開発されなかつた時。開発後の大量の供給を見込んで大きな投資をしたのに計画が頓挫したり、計画が縮小されたりした場合はどうにもなり

ません。いくら経営努力をしても赤字は解消できない、と云うことになります。もう一つは、受け入れ側の条件です。季節毎や一日の間に、大きい需要のある時間帯と需要が少なくなる時間帯がある、即ち、需要に山谷があると不経済なのです。供給会社としては、一番大きい需要に耐えられるだけの設備を持っていなければなりませんから、その能力を一杯に使う時間が少なければ少ないほど無駄が大きくなります。ドーム球場のある福岡・百道地区にある熱供給会社なんかが良い例です。百道地区と云うのは、十年ほど前に開催されたヨカトピア博覧会の会場の跡地に、大きな都市計画が作られたのですが、これが中々進まない。おまけにドーム球場なんて、真夏のある時期、それも野球やイベントのある時間帯だけに物凄い需要が発生し、残りの大部分の時間は需要がゼロになる訳ですから、需要の山谷は、万丈の山から千尋の谷底、と云うことになる訳で、巨大な設備や投資が生かされない気の毒な会社と云うことになります。

そこへ行くと、ハウステンボスのこの会社は違います。まずは計画通りに施設は出来ました。夏は冷房、冬は暖房と冷温熱をキツチリ使ってくれます。ホテルや病院と云う

のは、比較的一日中、山谷なしに冷温熱を使ってくれる有難い施設なのですが、ハウステンボスにはこのホテルが周辺を含めて六つもあります。言わば最初から儲かる構造になっているので、ハウステンボスのグループとしては珍しく四年目からシツカリ黒字を出しています。一四億円程度の売り上げなのに、年間一億円近い税金を払い、一〇%の配当をして、特別の積み立てまでやっている、と言う結構な会社なのです。私は本体にいた頃から「本体あつての熱供給会社なのだから、本体が赤字でフーフー言っているのに、別会社とは言え税金まで払うのは勿体ない。何とか本体を支えることを考えたらどうだ」と言い続けてきました。この会社の社長になってからも「本体を支援することを考えてくれ」と言い続け「こんなアイデアはどうだ。検討して見てくれ」と提案も出して来ました。当然のことながら、会社で働いている人たちは、自分たちの努力の結果儲かっている、と思っっている。自分たちの努力を本体の支援に食われる筋合いはない、と思うでしょう。親会社の西部ガスとしては、連結決算の対象でもありませんから儲かった方がよい。と言つことで、「この会社は社長の私一人が「自分の会社の儲けを少なくしろ」

と叫んでいる誠に妙な会社だった訳です。支援策というのも、親会社の意向に加えて、通産省の規制があつて中々上手く行かない。私の声だけが親会社の方に聞こえていて、多分「好ましからざる社長」所謂ペルソナ・ノングラータになつていたのではないか、と思います。主張していることは正論でも、世の処し方が青くて未熟だった、と言つてとかも知れません。

ロータリーの関係で知的障害者の支援活動のためオランダに出掛ける直前にこの動きが出て来ました。出張を中止して自分が渦の中にいれば、何かの動きが出来たかも知れなかつたのですが、右のような事情であまり居心地も良くなって、むしろこの社長業は早く廃業したいと思つていたし（私は、苦しくても皆が一緒になつて一つの方向に進もう、と言う集団の中に居続けて来たし、また、その方が得意ですから、一人孤立して流れに逆らい続けるのはどうにも居心地が良くないのです）、自分の人事のことで動き回るのも美しくないな、と思つて出張は予定通り決行することにしました。新しくハウステンボスに社長になる銀行から来た人に「どうなつても良いから任せます。むしろ退

いた方が良いと思います」と言つて全てを預けて出掛けてしまったのです。四日後、出張先のオランダにこの人から電話があり「申し訳ないけど降りて貰うことになった」と言います。「心づもりにしていたことなので、株主総会の直前になっての手続きの変更さえ上手く行くなら、私は結構」と、二つ返事で了承し、円満に社長を降りることが決定して、六月十六日の株主総会で退任することが決定しました。

ハウステンボスの顧問に残つてくれ、とのこと、いくらかお手当てもくれるらしい。今回退任した大物会長と創業者神近と並んでの顧問ですから大したものですが、これとてハッキリしないお役。早く足を洗う機会を作りたいと思つています。結果的には徐々に退く形ができつつあり、五木寛之の「美しき下山のために生きる」と言う言葉や先輩の杉山君の教えを忠実に守りつつあります。あまり美しくはないかも知れないけど……

こちらへ来て丸々十一年。ハウステンボス関連の全てのお役を御免、と言うことになりました。総括して考えて見ると、金銭的には大分損をしたみたい。赤字会社の役員なんて良いことはありません。役職が上がって名目上報酬が上がっても、その分報酬カッ

トの比率が増える、と言つことで収入は増えなかつたし、勿論、役員賞与なんてプラス・アルファもありません。逆に立場上、余分な出費もありました。収入の面だけから考えれば、重工を勤め上げて子会社へでも行つた方がズツと得だつたでしょうし、第一、楽だつたでしょうが、ここに来なければこんな事業の立ち上げに関わることは出来なかつた。一生の内にこんな経験が出来る人は中々いないでしょう。ここでの十一年は重工での三十年間以上の経験をさせて貰つたと思います。大変な目には遭つたけれど、お金では買えない何ものかを得たと思つています。

(平成十二年七月一日)

一度は見たい世界の名画

平成十八年一月の日経紙の土曜版に、表題の名画一〇点のリストが掲載されていました。私は単に、美しいものに触れるのが好き、と言うだけの理由で、外国に行く機会を作り出して美術館に行つたし、日本にも名画が来ると鑑賞に出掛けたりしたのですが、このリストを見ると一〇点の内、九点までをこの眼で見えています。私はこの種の名画を実際に観る機会がある度に「申し訳ないな」と思つて来ました。別に、特に絵画に興味がある訳でもなく、絵の専門家でも何でもない。単なる好奇心で観に来ている。世の中にはキツと「一生に一度で良いから、この絵を見たい」と思っている人が大勢いるに違いない。「フランダースの犬」の主人公のネロ少年が「一度で良いから教会に飾つてあ

るルーベンスの絵を観たい」と思い続けていたような、そんな人達に見せてあげる方が、絵にとつても喜ばしいことではないのか、それこそ世の中の役に立つのではないかと、思いながら観てきました。それでも一〇点中九点を観ているのと言つのは中々凄いことだと思います。夫々について寸評を試みたいと思います。

一位がダ・ビンチの「ラ・ジョコンダ（モナ・リサ）」です。これは名画の宝庫・ルーブル美術館の中でも特別扱いされていて、最近ではガラスのピラミッドの入口を入ると、モナ・リサ行きのルートが示されています。それだけ多くの人がこの絵を目指してルーブルを訪れていると言つことなのでしょう。ルーブルでは大抵の絵は剥き出しで飾られています、この絵だけはガラスのケースに入れられ、廻りには柵が出来ていて、近付けないようになっています。私が最初に見たのはロンドン駐在時代。その後もお客や出張者を連れて何度も出掛けたものでした。高校の同窓生の旅行会では希望者だけを案内して感謝されました。でも、これだけ何度も観ると、何だか名前の方が先行しているのではないかな、と言つ生意気な感想を持っています。

二位はゴッホの「ひまわり」。これは同じようなものが十数点あるそうで、どれが所謂本物なのか（贋作ということではありません。ゴッホが同じような構図で何枚も描いているのです）判りません。私が見たのは、アムステルダム・ゴッホ美術館のもの、ルーブルのもの、それとロンドンのナショナル・ギャラリーのものなどですが、日本の製紙会社の会長が二〇〇億円近い金を出してクリスティーズのオークションで買ったと、このことで、これが損保ジャパン東郷青児美術館にあるそうです。

三位が何とムンクの「叫び」なのです。この選択は意外に思いましたし、面白いと思いました。これはノルウエーの画家の作品で、私はオスロに最初に行った時、ムンク美術館で観ました。その後、もう一度行ったことがあったと思います。盗難事件なんかがあつて有名になりました。この絵は美しいと言うより、不気味と言うか、不安を表す、心の中を描いたものだと思います。ムンクは北欧の画家らしく「ベッドに腰を掛ける少女」など寒々しい絵を描く人だな、と思つた記憶があります。

四位に又、ダ・ビンチが来て、「最後の晚餐」ですが、この絵は都合三回観ています。

第一回目はロンドン駐在中に、イタリア出張の途中に無理に時間を作つてミラノまで出て来てからの出張中に、修復中で全面に足場が掛かった状態で見たこともありましたが、三年前に家内と見たのが一番良かった。修復が完全に終わり、管理もシツカリ出来ていて、これ以上の毀損は避けられるようになっており、入場者数も限定してユツクリ鑑賞できるようになっていました。

五位がピカソの「ゲルニカ」です。一〇点の作品の内、私が観ていないのはこれだけです。でも昨年、病気をする直前、馬場夫妻・玉川夫妻とスペイン・ポルトガル旅行を計画した時の私の一番の目的がこの「ゲルニカ」でしたから、私の眼や感覚も満更ではない、と言うことになりそうです。この旅行は全てをアレンジした後で入院騒ぎを起こ

し、全部をキャンセルすることになって両ご夫妻には大変なご迷惑を掛けたのですが、こうなったらスペイン行きはもう一度計画して実現させねば、と思っっています。

六位がミレーの「落穂拾い」。初めてルーブルに行った時、この絵がどこかにあると聞いていましたので、探し回って苦労しました。判り難い美術館の中を歩き回り、三階か何処かの隅の方に発見した時は感激したものです。今もミレーの絵は殆どが他の印象派の画家の絵と一緒にオルセー美術館にあります。この絵だけはルーブルに残されているそうです。

七位がミケランジェロの「最後の審判」。バチカンのシステイナ礼拝堂の壁画です。見事な絵ではありませんが、私は同じシステイナ礼拝堂、同じミケランジェロでも「天地創造」の天井画の方が好き。棟方志功が初めてシステイナ礼拝堂を訪れた時、天井画の方に感激していた、と書いたものを読んだことがありますので、私の感覚も棟方志功並と言っことになりそうです。尤も私の場合は、システイナ礼拝堂に入っただけで感激するのですから、天井画も壁画も含めた全体の雰囲気にも飲まれてしまう、と言っことなの

かも知れませんが。

八位がモネの「睡蓮」。これこそ何枚描いたのか判りませんし、どの絵が観たいとされている絵の対象になっていいのか判りませんが、ずい分色んなところで観たと思います。日本にも何度か来て、西洋美術館とか都美術館でも観たことがあります。

九位と十位が同点で、ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」とフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」。ドラクロワはルーブルの大作のコーナーにあります。ここには「ナポレオンの戴冠式」とか、「カナの婚礼」とか、「メデューサ号の遭難」とか見事な絵が沢山あって、どれを取ったら良いのか分からないほど。「民衆を導く自由の女神」は胸を半分剥き出しにし、旗を掲げてフランス革命を戦う民衆の先頭に立つ女性の姿で、これを女神と見たのでしょうか。力強い絵です。「鼻唄フェルメールが最後にでも一枚入ってきて良かった。「真珠の耳飾りの少女」は、私が長期に滞在していたハーグのマウリッツ王立美術館にあった絵なので、それこそ何度も観に行きましたが、私は同じフェルメールでもルーブルで観た「レースを編む女」とか、「画家のアトリエの女」(ウィーン

にあります。先日日本に来て、都美術館で観ました（の方が好きです。彼が遺した三六枚の内、この絵が一番ポピュラーだった、と言うことなのでしょう。

でも、考えて見ると、絵というものには自分の好みがあるはずです。多くの人が観たい絵と言うのは、中学の美術の時間に教科書か美術全集か何かで見せてもらった名画の実物を観てみたい、と言うだけのこと。これを一〇点の内、九点まで観ているなんて言うのは、別に自慢するべきことでも何でもなくて、単なるミーハーだ、と言うことなのかも知れません。

（平成十八年二月）

フェルメール展

昨秋の上京の機会に上野の東京都美術館で「フェルメール展 光の天才画家とデルフトの巨匠たち」を観賞しました。

私のフェルメール好きはハウステンボスに来て直ぐ、オランダへの長期出張時の一九九〇年に始まっています。合計で八ヶ月ほどオランダの首都デン・ハーグに滞在してい

たのですが、ここにマウリッツハウスという王立の美術館があつて、この美術館に展示されている三点のフェルメールの作品を観ている内に好きになつたのです。勿論阿姆斯特ルダム国立博物館にも展示されていてここには四点あります。何が良いのか、何処が好きなのか、と問われると困ります。一般的には「神秘的とさえ言える光と色彩の魅力」なんて評価されているし、家内などは写真のように写實的、などと言いますが、絵の好き嫌いなんて別にその理由を言う必要はなくて、単に「好き」で良いのではないだろうか。敢えて言えば、対象に忠実に丁寧に描かれていて美しい、なんてことになるのですが、他のその種の絵と何処が違うのか、と言われると説明が出来ません。宗教画は好きになれませんし、素人の私としては絵の中に思想が含まれているものや、所謂抽象画は理解できないので、単純に美しいものが好きでこの人の絵が私の感覚に合う、と言つだけの初歩的な好き嫌いと言つことにしておきましょう。私のご臙膺の塩野七生さんも「芸術作品は解説するものではない。仲介者なしでそれと一対一で向かい合い、作者が表現しようとしたことを虚心に受け止めるべきものだ」と言っていますから、初歩

的な好き嫌いでも許して貰えるでしょう。

以前にもご紹介したことがありますが、フェルメールは寡作の画家として知られています。オランダの画家としては画聖と言われたルーベンス（一五七七年～一六四〇年）、帝王レンブラント（一六〇六年～六九年）より少し若くて、生まれが一六三二年、没年が七五年ですから四十三歳と比較的若死にだったとは言え、生涯に三〇数枚の絵しか残していません。正確に何枚だったか、と言うことについてまだ議論が続いているようです。真贋の判定に厳しい学者は本当に間違いのない真作は三二枚、と言っているようですが、一般的には専門家の大部分が認める三四枚（二枚が非真作）とされ、これが国際標準的なものになっています。もう少し甘く積極的に評価しようとする学者は三六枚（二枚が疑問作）まで広げて来たそうですが、二〇〇四年に新しい絵が発見され、これが有力な真作と認められて、これを加えて最近では全部で三七枚と言うのが定説になっているとか。絵画名とその真贋の程度をリストに纏めてみました。

この内、オランダ国内にあるのが七枚と意外に少ないのです。私は第二次大戦の時、

ナチがこれらの美術品を奪って持ち出したことに原因があるのではないか、との疑いを
持っていたのですが、そう言う疑いの目で見ても、そうした事実があったとしても少な
かったようです。一六九六年にアムステルダムで二一枚の作品が大々的にオークション
に掛けられた、とのことで、これが契機になってフェルメールの絵が世界中に広がった
ようですし、十九世紀の末頃、産業の黄金時代を迎えて続々と出現したアメリカの大富
豪達がこぞってヨーロッパの絵画を買い漁ったと言う現象もあったとのこと。絵の
所在をリストに入れて見ました。ご覧頂けるように、今やフェルメールの絵はアメリカ
に一番多く残されていますが、その原因はこの辺にあつたのでしょうか。アメリカの富豪
たちは個人のコレクションとして蒐集し、ワシントンのナショナル・ギャラリーなんか
はアンドリュース・メロンと言う大富豪がフェルメールを含む自分のコレクションを展示
するために個人で作つた美術館だと言われます。個人のコレクションが後に博物館や美
術館に寄贈された例も沢山あつたようです。

私はオランダにいる間にオランダにある七枚は何度となく観に行きましたし、その後

も近くまで行くと必ず何枚かは観に行きます。絵に会いに行くと言つような気持です。現役を離れた後、二〇〇二年にオランダに一ヶ月滞在した時も何度も会いに行きましたし、パリとロンドンまで行ってルーブルとナショナル・ギャラリーで夫々二枚ずつ計四枚を観ました。

フェルメールは日本でも人気が高くて、何度もフェルメール展が開催されています。記録を調べると今回の東京都美術館でのフェルメール展は一九六八年以降一〇回目と言つことらしい。日本に来るのはドイツやオーストリアなど中々現地に行けないところにあるものが多いので有難くて、日本に來ていることが分かると機会を作つて観に出掛けることになります。これまでに二度出掛ける機会が出来て一枚を加えましたが、今回は七枚も来て、その内でこれまで観る機会のなかったものが五枚もあって嬉しかった。これで私がこれまでに観たフェルメールの絵は一八枚になりました。これで約半数と言つことです。

世界中に散らばっているフェルメールを追っかける旅が出来たら素敵だな、と思つて

いるのですが、他にもそんなことを考える人がいるらしく、これまでにこんな旅をして
それを書き物にした人を二人発見しました。一人は朽木ゆり子というニューヨーク在住
のジャーナリストで、他にもフェルメールに関する本を何冊も書いていて、かなりのフ
エルメールおたくみたいです。二年ほど前に「フェルメール全点踏破の旅」が上梓され
たので直ぐに読みました。こちらはどうかやら出版社から費用が出て、世界中のフェルメ
ールを観て廻ったらしい。盗難行方不明中の一点を含めた四点を除いて三三三点を観て廻
っています。ジャーナリストらしく記述も少々硬くて報告書の感じですが。もう一人が
有吉佐和子の娘の有吉玉青で、昨年「恋するフェルメール」と言う本を出しています。
こちらは本当のフェルメール好きが、一七年と言う歳月を掛けて自分で追っかけて廻っ
て観た記録です。新発見の分と盗難行方不明中のものを除いて三五点を見えています。一
九九六年にハーグのマウリッツハウスで開催された大フェルメール展で二三点を纏め
て観ているので、大分楽をしていますが大したものです。自らフェルメール・ラバー
と称するだけあって熱の入れようが違います。それと流石に有吉佐和子の娘だけあって

文章は巧み。フェルメールに掛ける愛情が文章のそここに表れていて気持ちのいい読み物でした。若し、ご興味があるならこちらの方をお勧めします。

今回の展覧会は「光の天才画家とデルフトの巨匠たち」と銘打って東京都美術館で開催されたのですが、十七世紀に描かれたデルフトの画家の絵が三九点来ていて、その内の七点がフェルメールでした。いずれも素晴らしい絵ばかりで立派な展覧会だと思いました。例によって大変な人出でユックリなんて見られないのではないかと、最初から大混雑を覚悟していました。せめて入場券を買う行列は避けたいと、事前にインターネッ
トで入場券を買いました。一六〇〇円の入場料がシニアだと九〇〇円になりますから、石原知事はずい分老人を大事にしてくれていることになります。当日は一日仕事になることを覚悟し、身構えて朝早くから出かけました。開場直後の一〇時過ぎに入場したのですが入場券発券所には既に行列が出来ていて、切符を事前に手配したのは正解でした。ところが展示場には別に行列もなくスンナリ入れて気が抜けるほど。大勢の人ではありませんが、すし詰め状態なんてことはなく、お目当ての絵の周りの混雑も少し我慢をして

いると目の前まで進んでユツクリ鑑賞できる状態でした。今回は期間が八月から十二月までと言う長期間だったので楽になったのだらうと思います。週末を避けたのも正解だったでしょう。それでも二時間半を鑑賞に費やして午後になって出て来たら、展示場の入り口には行列が出来ていましたから、朝早く行ったのは正解だったのでしよう。行ったり来たり都合四ラウンドしてフェルメールを堪能した気持ちになりました。今回はスコットランドやアイルランド、ドイツの田舎町の夫々一点ずつしか所蔵されていないところのものが来ていたし、一番最近発見された個人所蔵のものも来ていましたから大変に貴重な展覧会で、良くこんなモノが集められたものだ、と感心することしきりでした。偶々文芸春秋十二月号にこの展覧会のプロモーターの「フェルメール展 名画争奪の現場」と言う一文が掲載され、苦勞の程が描かれていたので興味深く読みました。

一日仕事の覚悟で出かけたのに、半日で済んだものですから、残り半日の時間が出来ました。その後、近くの池之端「藪」で蕎麦を楽しみ、ついでに午後は鈴木演芸場で寄席を楽しむと言つ、願つてもない至福の一日になりました。

今年はルーブルから「レースを編む女」が来ると聞いています。また会いに行く機会が作れると良いが、と思っっています。

(平成二十一年一月五日)

落語

最近の落語アレコレ

私が落語の話を始めると、総て古今亭志ん朝ということになります。

今年の十月一日が七回忌でした。二〇〇一年に亡くなってから直ぐ、小林信彦の「名人」

志ん生そして志ん朝、実姉の美濃部美津子の「三人囃」、大友浩の「花は志ん朝」、池田弥三郎、池波正太郎や山藤章二などとの対談集「世の中ついでに生きていたい」、志ん朝一門の連中が思い出を語り合った「よってたかって古今亭志ん朝」を読みましたが、先日來、その後に出版された志ん朝モノ、志ん朝の仲間へのインタビュー集の「まわりまわって古今亭志ん朝」と、手塚治虫、山田洋次や安達瞳子などとの対談集「もう一席

うかがいます」を読みました。どこの誰からも彼の優しさとか思いやり、謙虚さなど私の好きな部分の思い出が出て来て、気持ち良く読まされました。

先日、大野木兄に頼んで、兄ご鼻肩の文楽のCDを貸して貰って聴かせて貰い、幾つかをテープに取らせて貰いました。大名人文楽と言う噺家は噺を磨きに磨き上げて話す人。従って、持ちネタは限られたものになるし、何時どこで話しても全く同じ話し方になります。一方、文楽と並ぶ大名人、志ん生はその場の雰囲気です噺家で、同じ噺をしても、その時々で違ったものになります。ですから、文楽の噺は楷書、志ん生の噺は草書、と言われていて、お互いに全く反対のやり方で大名人と呼ばれていると言えるでしょう。その意味では文楽は努力の人ですが、志ん生は一種の天才といえるのではないだろうか。黙って高座に上がったただけでお客が笑ってくれる、と言われた人で、その日の気分です話す人。多くの持ちネタを持っていますが、噺の内容は同じでも日によって喋り方が違う、ジャズの即興演奏みたいな話し方をする人ですから、普通の噺家では真似が出来ません。志ん朝もこうして自分の父親が大名人ではあるものの、師匠としては決

して良い先生ではないので、この文楽や円生に習った部分が多かったと聞いています。ですから志ん朝の噺は親父の志ん生譲りというよりも、文楽や円生を髣髴させる丁寧できめ細かなカツチリした噺だと思えます。文楽鼻眞の大野木兄には全く失礼なことながら、私に言わせれば、志ん朝はこの大名人文楽をも越えていたのではないか、少なくとも品と艶と華は志ん朝の方が上ではなかったか、それと張りのある明るい声も良かった、なんて思うのですから、私の志ん朝鼻眞は病膏育と言うことみたいです。

野口兄はどうやら古い噺家は卒業したらしく、最近出て来ている見どころのある若手噺家を応援している様子です。田舎にいて、寄席などを聴きに行く機会に恵まれない私のために、毎月彼が聴いた噺家の情報を詳しく教えてくれます。月に三・四回は寄席や独演会に出掛けているみたい。それを克明に報告してくれるのです。誠に有難いことです。完成した真打（最近では真打と言っても、完成した、とは言いがたくなっているように思われますが）もさることながら、真打直前の二つ目から前座にまで目を配って、将来、名人に化ける可能性のある噺家にも目をつけているようです。目を掛けている噺家

には後で講評などをファックスして指導に努めているのも彼らしいと思います。

私は談志と円楽が嫌いです。談志は、オレは上手いんだぞ、聴かせてやる、と言う態度が鼻に付き、謙虚さが無いところが嫌い。円楽はニヤニヤして「アノー」なんて言っているのが嫌で、この人は「笑点」だけの芸人だ、と思っていました。円楽は先日來、病気で暫く休んでいましたが、久し振りに高座に上がったら、口が廻らなくなった、とかで引退を表明しました。文楽は、高座で登場人物の名前が出て来なくなつて絶句してしまい、「勉強して出直します」と挨拶して途中で引っ込んでしまつて、そのまま引退したのですが、これが潔い引退と言つことで有名になりました。円楽が引退した時、多くの新聞のコラムがこの文楽の引退に引き比べていた、と言つことで、これに対する不満を書いた記事の切抜きを大野木兄が送ってくれました。この人は、文楽と円楽とでは、似て非なるもの」と言っていました。私に言わせれば、比較することすら失礼なこと、「似ても似つかぬもの」と思います。ところが、野口兄の推奨する若手の有望株の中には、鳳楽・全楽・王楽など、円楽の弟子が多いのです。円楽と言つ人は、噺は下手だつ

たけれど良い指導者だったのだろうか、と思ったりしています。と、ここまで書いていたら、円楽が旭日小綬章受賞だって、私には分からない良いところがあるのでしょう。

九月に上京した時に、久し振りに小朝を聴く機会に恵まれました。大田区の区民ホールでの独演会の切符を取ってくれた友人がいたのです。小朝は本当に久し振りでした。髪を金色に染めた若造とと思っていましたが、今や落語協会の幹部で古典落語界の重鎮。落ち着きと貫禄を示した良い噺をしていました。一緒に出たのが九月に木久蔵を襲名して真打に昇格する直前の「きくお」と故三平の次男の「いつ平」でした。木久蔵も好きではないけど、きくおはそれ以上にまだまだ。教わったことを一生懸命喋っているだけ、と言う感じで安心して聴けません。真打なんてまだ早い、と言うのが私の感想でした。私は古来の落語の良さを壊して、芸術を単なるお笑いにしてしまったA級戦犯は三平だと思っっているのですが、いつ平は親父譲りの漫談調が抜けません。笑いを取るうとする姿勢が見え見えで、美しくない、と思いました。昨今の若手にはこの種の落語家が多いように思いますが、落語は芸術であって欲しいと思っっている私にとっては、全く残念な

ことです。

今、私が一番欲しいのは、志ん朝の高座のDVDなのですが、これが中々出て来ないのです。上京して時間があると、新宿の紀伊国屋のDVDコーナーへ行つて、志ん朝のDVDがまだ出て来ないか、店員に聞くことにしています。すでに顔見知りになった店員がいて、見通しなんかを話してくれます。お客さんからのこの手の質問はかなり多いらしく、この店員も詳しくなっていて、残念そうに状況を教えてくれるのです。どうやら著作権関連で難しいことになっているらしく、四月に聞いたときも、もう暫くは時間が掛かるだろう、と言っていました。

例の自分史をゼミの仲間を送つたら、その中に落語好きな人がいて、生前、志ん朝がテレビに出演した時にビデオに撮つてあつたものを送ってくれました。素人の録画ですし、古いものですから画面は綺麗とは言えず、ノイズも酷いのですが、少しでも綺麗なものを残そう、と専門業者に頼んでDVDにして貰いました。「文七元結」「三枚起請」「富久」「酢豆腐」「四段目」と志ん生の「風呂敷」。これは私の宝物の一つになります。

コンピューターを使ってノイズを取る方法もありそうなのですが、相当高いものにつきますので、暫くはこれで我慢する積りです。とにかく画面上で志ん朝が動くことに満足して楽しんでいきます。

こちらには、志ん朝のDVDが発売された、なんて、この手のニュースが届くのは遅いので、新聞などの情報に気付かれた方は、お知らせ頂けると誠に有難く思います。

(平成十九年十一月五日)

(志ん朝のDVDは平成二十年の三月と十月に
発売されたので、早速手に入れました。)

ゴルフ

ゴルフをやらないか

岡崎とゴルフに行った。どこのクラブの会員になっている訳でもないので日曜日は駄

目。ウィークデーに休暇を取り、朝早くから二ラウンド回った。岡崎はコースに出るのは二回目と言う全くのビギナーだし、小生も二年前に香港で始めたとは言え二ヶ月に一度、三ヶ月に一度と言う粗密度のせいか、才能のせいか、まだまだ駄目なので大分苦労して沢山叩いて回ったが楽しかった。

ゴルフについて云々するなど、まだ生意気みたいだが、噂によると大分うるさくなつて来た御仁もいるらしいので、僕も少しやっていると云う宣伝をしよう。

まず、第一にゴルフとは意外に面白いものだ、と云うこと。考えてみれば、自分が打つた球を追いかけて、飛ばした分だけ歩いて、又飛ばす。真つ直ぐ飛んでくれれば良いが、変なところへ飛ぶと草の根を分けて球探しをやらねばならない。最後は球を小さな穴にコトンと入れてオシマイというのだから、たわいもないことで何が面白いのか、と思つていたのであったが、コースに出ると実に爽快である。一面の緑だ。普段、ビルの谷間でアクセクしている気持がどこかへ行ってしまう。芝生の上を散歩するだけでも気持が良い。面白さの第二は、ゴルフと言うゲームが意外とメンタルなものだ、と云うこと。コ

ースの攻め方、クラブの選び方、気持の持ち方、考えながらプレイできるのが面白い。その人により醍醐味を感じるところが違うと思う。ドライバーで思い切りかつ飛ばすのが楽しい人もいるだろう。長いパットを決めることに生きがいを感じる人もいるだろう。僕の一番好きなのは、一〇〇ヤード、一三〇ヤード位のところからグリーンに乗せる所謂ショート・アプローチである。七番、八番、九番あるいはウエッジで叩くと、思い切り高く舞い上がった球が、トンとグリーンの真ん中に落ちてナイス・オンとなったときの気持は格別だ。

第二に、ゴルフはやはり高い遊びだ、と云うこと。高い入会金を一度に払ってメンバーになってしまえば良いのだが、ビジターで行こうものなら下手すると一日で一万円くらい取られる。安い方法を探しても、三千円から四千円かかるから、決して安くはない。安い方法と言つとウイークデーしかなくともあって、小生の安給料では一ヶ月に一度行くのが大変、と言つことになる。何事も練習しなければ上手くならないから、これでは中々上達しない。岡崎は凝り性だから辻堂の砂浜を練習場と心得て、朝早くから打ち

に行ったりするらしい。これなら金は掛からないし理想的な練習法だ。先日もバンカーに入った時は自信に満ちて打つていたように見えた。

我々の仲間がゴルフをやったらどういふことになるだろう。性格が現れて面白そうだ。まず、理論派は杉山、大野木、山本。本等をジックリ読んで、頭でつかちになり、やれグリップがどうだ、それヘッドアップはするな、と批評がうるさいことだろう。飛ばし屋は馬場、川口。ただ、どこへ飛ばかが判らないのが悩み。馬場なんか深い草むらに入れた球が見つからず、チエツ、チットモ面白くない、などとボヤいているのが目に見えるような気がする。渡辺はパットとかショート・アプローチに生き甲斐を感じるだろう。とても入りそうにない長いパットを懸命に芝読みなどして、入れようとするだろう。野口辺りはあまり飛ばさないけど無理もせず、曲げもしないでコチコチ進めて行く感じ。玉川や茂木はもう相当古いようだ。マイペースの重役ゴルフをやるのではないかな。どうせその内に皆追々始めるのではなからうか。早い機会に皆でコンペをやってみたい。さぞ面白いと思う。現在の僕のスコアはベストが取手の四六。五〇近くが出ていれ

ば満足している程度だから大したことはない。誰か一緒にやりませんか。

(昭和四十二年十一月二十二日)

私とゴルフ

私がゴルフクラブを初めて手にしたのは学生時代。普段は柔道の稽古で疲れて、他の運動になんて手を出す余裕がなかったが、試験の時期になると稽古が休みになって身体が空いて来る。勉強の合間に下宿にあった古いドライバーを持ち出して、庭で振り回していた。別に何てことはなく松ぼっくりを打っていた程度。茂木宅に伺った時、庭に練習用のネットがあつて、皆で交替で打つたことがあつた。ネットの前で撮つた、あの当時は珍しいカラー写真が残っている。

会社に入って間もなく、課のコンペをやるから連れて行ってやる、と言う。連れて行く方は面白半分だったに違いない。忘れもしない、立川国際というゴルフコースが私の筆下ろしの場所だった。このコースは今でも有名な山岳コースで、右に左に、崖あり、

谷あり、山ありの大変なコース。勿論真つ直ぐなんて飛ぶわけがない。変なところへ打つては、遅れては申し訳ない、と言つ氣持ちと、女性のキャディさんに球を拾わせるなんてトンでもない、と言つ氣持ちとで、打つては直ぐにクラブを二・三本担いで右に左に走り回つたものだ。お蔭で翌日は疲れで熱を出し、大笑いされた。

その後は、借り物のクラブで年に二度ほど、課のコンペに行く程度だったが、八年前、香港駐在になり、二日目の昼休みに先輩に連れられて自分のクラブを買いに行った。香港もまだ物の安い頃で、月の手当ての半分位出せばマグレガーのセットが買えた。残念ながらあまり詳しい先輩ではなかつたらしく、硬いシャフトのクラブを買つてしまった。プロが使うクラブだそうである。その後ウッドだけはパワービルドの普通の硬さのものに買い換えたが、アイアンは硬いシャフトのままである。自分のクラブを持つてからもう八・九年経つが上手くならないものである。

コースに出る機会が少なく、三ヶ月に一度とか、四ヶ月に一度とかいう年もあった。組合の仕事をやっている二年間は、何だか全然やる雰囲気ではなかつた。やはりプロレ

タリアを意識していたのかも知れない。皆の組合費を使って働いているのに、ゴルフなんてトンでもない、と言う気持ちもあつたのだろう。その後は引き続いて家内の病気のゴタゴタ。それこそゴルフをやる雰囲気なんて全くあるものではない。で、又二年間は殆どやらなかつた。

やっと少し身を入れようか、と思つたのが一昨年のこと、隔週五日制になつたし、大きな借金をして相模原に転居したので、どうせ借金をするなら、と借金の端数でどさくさに紛れて四十万円で大相模カントリーという近くの山岳コースの平日会員権を買つた。週休二日が隔週の間は、やはり月に一度行くのが難しかった。家のことでつぶれたり、土曜日に仕事が出来たりする。昨年から完全週休二日になつたので、熱心にやることを決心した。平日会員だと正月休みとか連休にやれなくてつまらないので、又借金して平日会員を正会員に買い換えた。平日が八十万円で売れ、ツテを頼つて正会員は百六十万円で買つた。

と言うことで現在に至つている。大相模のハンディは二八。ところがこのハンディ通

りのスコアが出るのが誠に少ない。今以って仲ター○○が切れない。時ター○○が切れると大喜びしている程度である。始めた頃は上達も早く、筋が良いなどと言われ、我ながら天分があるのかしら、と思つた程。練習さえすれば、と思つていたのだが八年以上もやっていてこの有様である。確かに回数多くはない。上手くなるにはやはりクラブの一組や二組は潰すくらいやらねば、と言つが、私の場合、八年前のクラブが健在だし、靴すらもまだシツカリして未だに肉刺が出来る。もつともつと練習が必要なのだろう。

最初に覚えたのは、ウエッジのアプローチ。芝の深いグリーン周りから思い切り振り抜くと球がフワツと上がつてグリーンにトンと落ちる。これが面白いほど決まつて先輩どもを驚かせたものだ。次がショートアイアン。八番位で一〇〇ヤード一寸位のところを打つと、綺麗にターフが取れて高い球が飛び出し、グリーン上に止まる。ここに辿り着くまでに右だ、左だ、チョロだ、と大変な苦勞をしているから、最後だけ良いと先を歩いているパートナーがビックリして振り返る。筋が良いということになる。その次は

何故だかフェアウェイウッド。これは殆ど練習もしないのに自信を持っていたし、バフィーの打てる位の距離になると嬉しくて、バッグから引つ張り出すやパチンと打つと最初低く出た球が途中から伸びて行く独特の弾道で、それが真つ直ぐに良く飛んだ。七番のランニングアプローチが決まった時もあった。調子の良い時は、あの辺に落とせばあ転がって、なんて考えながら打つと本当にその通りにピンに絡みつくように面白いように良く寄った。今のところはドライバー。これは何となく安心して打っている。あまり飛ばない。やはり球を打つ瞬間の呼吸というかコツは球技をやっていた連中には敵わない。その代わり腰を据えてゆっくりテークバックし、振り下ろすとあまり曲がらず綺麗に飛んで行くのが良い。又、良い時はフォロースルーが綺麗に出来て、最後まで気持ち良く振り切れている。全然上手くならないのがロングアイアンとミドルアイアン。ミドルの方は少し出来てきたが、ロングの方は上手く当たったためしがない。シャフトが長くなるほどシャフトの硬さが効いてくるのかも知れない。それと嫌なクラブだと思つて振ると決まって上手く行かない。ゴルフはメンタルなゲームだと言つが全くである。

と言つこと、これまで上手く行つていたものが全部そのまま続いていれば、もうそろそろプロに転向か、というところなのだが、一つが良くなると他が駄目になる、と言ふ不思議な現象で、トータルスコアは少しも良くならない。三年連続日記を付けているが、二年前の日記に同じようなスコアが並んでいて、同じような反省が書いてある。正式に習つか、合宿でもやつて詰めてやらないといけないのかな、と思つてゐる。

で、五月の連休は少しやつてみることにした。三日間をゴルフに当てることにし、上手い人を誘つて教えて貰いながらやることにした。メーデーの日は、川口兄にご足労願つて一緒に廻つて貰つた。上手いものである。良く飛ぶのは身体の所為もあるとして、近くになつてからも上手い。格段の差、と言つ気がした。こちらはアガつたのか悪い所だらけで恥ずかしい思いをした。後半少しマシになつたのが救いだつた。ワン・ラウンドの後、コーチしてもらつた所為か、その次に五月四日に行つた時は仲々良かった。四三なんて最高のスコアを出した。(川口兄と廻つて六〇叩いたコースと同じところ)これなら、と思ひ、五月には毎週でもやつて身体に覚えさせようと思つたが、大変に忙

しくなり、土曜日曜に出勤する日が続き、全く駄目。六月もどうなるか。少し仕事を放り出さないと駄目かも知れない。

でも、川口兄と一緒に廻って感じたこと。学生時代、およそ不器用でセンスのない柔道をしていた同兄にあんなに素晴らしいゴルフが出来ると言っことは、ゴルフの才能と言うのが全く別のところにあるか、僕にもやれば出来るようになる、ということか何れかだと思う。挫けないでもう少しやってみよう。

(昭和四十九年五月二十六日)

アーノルド・パーマー

只の切符が手に入ったので、ペプシ・ウィルソン・トーナメントと言うプロゴルフの試合を見て来た。久し振りに尾崎が優勝したのだが、丁度入場した時、最終組の尾崎将司、郭吉雄、村上隆の組がスタートするところで、ミッキー安川がインタビューをやっていた。流石に尾崎は仲々堂々としていて、「今日は調子が良いですよ」「一打差くらいひっくり返して優勝しますよ」なんて言っていた。それが明るくて嫌味がなくて、やは

りスターになるだけの要素を持っている人だ、と思った。インタビューをする方も、し甲斐があるような受け答えでギャラリーを楽しませていた。首位の郭吉雄とワンストロークの差で出た尾崎はドンドン調子を上げ、私が見ている前でも七〇〇八〇ヤード、前下がりの難しいライから散々迷った挙句選んだサンドウエッジであわやカップインという見事なショットでバーディを取ったり、ショートホールの一打目をバンカーから直接カップインさせたり、乗りに乗った、と言う優勝だった。

日本のゴルフ見物もサマになって来た、と言う感じがした。ギャラリーも色とりどりの服装が楽しく、マナーも悪くない。選手を暖かく応援している、と言う感じが何とも気持ち良かった。子供連れも可なりいたが、こんな雰囲気を楽しめるのなら、家族連れでハイキングの積りで来ても良いな、と思ったことだった。横浜カントリーと言う名門コースだったが、古い格式のあるコースだけあって手入れも良く、こんなコースなら良スコアが出て不思議ではない、と思ったりしたが、歩きながら英国でのゴルフ見物を思い出した。

あれはアーノルド・パーマーが来ていると言つので、PGAトーナメントと言つ試合を見に行ったときのこと。丁度三連休で、その前々日からロンドン西北のウェールズ地方に一泊ドライブに出掛け、途中で仲間と別れて夕方から四〇〇キロをノンストップで戻り、ひと寝入りして翌朝早く、今度は全く反対方向の東南に二五〇キロほど走って、サンドウィッチと言つところまで行つたのだつた。着いて直ぐ練習場に行つてみると押し出すようなオカシなフォームでトップしたみたいな低い球ばかり打っている男がいる。これがパーマーだつた。サンドウィッチは海岸のコースで、その日も風が強かつた。翌日の新聞を見たら「自分は風に強いから、勝つと思つていた」と言つパーマーの談話が載つていたが、練習場では風に負けない低い球を打つ練習をしていたらしい。あのパーマーですら試合の前、二時間はタツプリ練習すると言つ。確かに汗にまみれてやつていた。一緒に廻つた売り出し直前のスペインのセベ・バレステロスが豪快に高い球を飛ばすものの、風の為にスコアを乱していたが、パーマーは当たり損ないではないか、と思われるほど低い球で着実にスコアを伸ばして優勝したのだつた。シヨートホールで深

いラフに入れ、そこからの脱出に失敗して、直ぐ手前のバンカーに入れるなんて、僕にでも出来るようなことをやっていたが、バンカーからはピッタリピンに絡ませてボギーで上がったのは流石だった。

試合前、パットの練習をしている時、ファンが集まって来てサインをねだると、静かに軟らかく「これを終わらせてからにしようや (Let's finish it.)」とか何とか言っただけで丹念にパットの練習を終わらせ、クラブハウスに戻る途中、歩きながら一人一人にサインをしている。残った人たちにはハウスの入り口のところまで立ち止まって残りなくやってくれた。お終いの方で僕も一つサインを貰った。一芸に秀でる、と言うことは何にしても大変なことで人間を作るものだと思う。また、スターになれる人と言うのは、何も言わなくてもその周りに何か雰囲気を持っているものだ、と思ったことだった。

(昭和五十二年六月十九日)

ゴルフ アレコレ

私が最初にコースに出て、ゴルフなるものをやった時のことは何時だったか書きましたが、入社早々の昭和三十六年ごろ、勿論借りクラブでした。自分のクラブを買ったのは香港駐在の時ですから、四十一年。訳も分からず、お店の勧めに従って選んだものですからやけに硬いシャフトのクラブを買ってしまい、使い切れなくて苦労しました。香港では仲間が出来て、練習場に行ったり、時には名門のロイヤル・ホンコン・ゴルフクラブ（今ではとても出来ないことですが、その頃はキャディ・マスターに一寸握らせる程度で割りと気楽にやらせてくれたものです）などでやったりしました。でも、回数はボチボチ、年に何回かのコンペなるものに出かけたり、気が向いたら運動目的で練習場通いをしている程度でしたか。

四十八年に相模原に移ってきたとき、借金の端数で大相模カントリークラブの会員権を手に入れました。最初は平日会員で入りましたが、すぐに正会員になりました。当初は何だか嬉しくて、割と出かけていたように思います。会社の先輩と熱を上げて、夏の暑い日にハーフを終える毎に風呂場へ行って、水のシャワーを浴びながら二ラウンド半

廻って、売店のオバさんをビツクリさせたこともありました。その先輩はずい分上手くなりましたが、私の方はチットも上手くならず、最初に貰ったハンディキャップが二八（丁度グロスで一〇〇と言うこと）。私のクラブは月例競技に出ないとハンディの改定をしてくれないのに、月例に出ないものですから全く変わりませんでした。家のゴタゴタもあって、ゴルフなんかあまり熱心にやっていたらられる状態になかったことも事実です。川口兄が我がホームコースに来てくれたのもこの頃でしたか。その当時はクラブにプールがあったので、夏休みに家内と小さかった子供達を連れて行って、親爺はゴルフ、残りはプールなんて洒落たことをやってリッチな気持ちになったこともありました。

会員権の方は値が上がりました。当時の平日会員が四十万円、一年ほど後に正会員に切り替えたなら百二十万円だったのですが、割とコースに金を掛けるクラブなのです。最初は山また山、谷また谷で、口の悪い人を連れて行ったら「大相模に行く時はアイゼンとピッケルが必要だ」なんて言われたことがあります。一つ一つ手を加えて行き、今以ってどこかで改造工事をやっていて、最初の頃とはすっかりイメージが変わって良い

コースになりつつあります。山岳コースであることには変わりなく、アップダウンがきついのには基本的にどうしようもありませんが、練習コースとしては最適で、ここでやっているのと大抵の難コースへ行っても怖くありません。都心から近いこと、と、その後神奈川県がゴルフ場の増設を禁じたこともあつて会員権はドンドン値上がりし、一昨年の馬鹿値の付いた頃は四千万円近くまで行きました。今のところ二千万円を切るところまで下がっていますが、最近では会員になっていないとゴルフが出来なくなって来ていますから、売る積りは全くなく、楽しむことにしています。何せ家から二〇キロ、車で三〇分一寸で行けるのですから贅沢は言えません。

少し熱心にやったのがロンドン。チョンガー生活だったので、週末にやることと言ったら殆どがゴルフ。二年間で八九回プレーしてハーフの平均が四九・五でした。殆ど毎週行く訳ですから慣れは出来て、最後の頃はスコアも大分良くなりましたが、もう少し本気になってプロにでも付いて本格的にやれば良かったな、と思います。良いチャンスだったのに残念でした。今週が悪くても来週があるさ、といった安易な気持ちで、やや

不真面目だったと反省しています。何かの本でゴルフに一番悪いスポーツは柔道だと書いてあるのを読んだことがあります。柔道は引きのスポーツであり、半身のスポーツだから良くないんだとか何とか書いてあったように思います。これを良いことに甘えてしまつて、自分は上手くなれなくて当然だ、楽しめば良いんだと言つ気持ちで、ややチャランポランではなかったかと思うのです。で、回数やっている間は良いスコアが出たけれど、帰国して回数が減れば元の木阿弥。相変わらず一〇〇を切るか切らぬかと言つ進歩のない状態が続きました。

そこへ来て先のワイフのこと。それこそゴルフどころではありません。亡くなつた後も、子供達と三人でやっている間は、週末になると家のことをやらねばならず、仕事の方も工場勤めになって時間が仲々自由にならなかつたので回数は少なくなり、それも客との付き合いで行くケースは多くなつたけれど自分のコースへ行くことが少なくなつたのです。ただ、横浜の工場には同じコースのメンバーが多く、メンバー同士のコンペの機会があるので知り合いが多くなつて、初めての工場勤めもゴルフを通じての付き合い

で助けられた面がありました。

ヤツとゴルフの出来る体制になったのがこの二年。このところ大分熱が入っています。もともと回数やれば良いものじゃない、と言うのは昨年为例。回数は記録的でしたが、平均スコアは悪化しています。後半は持ち直したのですが前半が悪過ぎたのです。相変わらず自己流ですが、大分安定しつつあるみたい。昨年は何とかハンディを二二まで上げてCクラスからBクラスに上がろうと、月例競技に九回も出場しましたが、仲々上手く行かず二三止まりでした。今年は二〇を切ることを目標にしています。一月の月例では二二になって念願のBクラス入りを果たし、二月の月例では二一になりました。次は八イティーンでも良いから二〇を切りたい。一四のAクラスはまだ当分先の話ですが、二〇を切れば少しはゴルフをやっています、と言えそう。上手いに越したことはないけど、ゴルフと言うのはキリがない。何時まで経っても不満足が残るスポーツですが、実直なサラリーマンとしては二〇を切ればまずまずでしょう。

どうやらネットクは飛びの問題。やはり飛ばないと可能性がありません。始めた頃、飛

ばすことより当てることに力を入れていて、これが固まったみたいですよ。方向は比較的良いのだけど、距離が足りません。特にアイアンが飛ばない。色々やってみただけど、どうやらこれはこれで固まったみたいなので、あまり無理に飛ばすことは諦めて、後は工夫でスコアを伸ばすようにしようと思っています。

ロンドン以来、スコアカードを保存することになっているので、整理してみました。進歩が少ないのですが、今年は今現在ハーフ四六・七。今年から来年にかけてカーブが急上昇することを期待しています。

(昭和六十三年四月三日)

ゴルフをやっていて良かった

二年半前の平成十七年六月に胆管ガンの手術を受けて、ベッドで休んでいる頃、私の一番の関心事は、果たしてゴルフが出来るようになる程元気になるんだろうか、と言うことでした。別にゴルフが私の生活の全てと言っ訳ではありません。生きている価値があるだけのQ・O・Lが確保出来るのだろうか。ゴルフはその一つの目安です。ゴル

フも出来ないような身体になるのでは碌なことは出来はしない。旅行なんかも出来なくなるでしょう。そんな情けないことになるくらいなら生きていく意味がない、と思っていました。それには足を弱らせないのが一番大切。手術が終わったら、歩くことから始めよう、と考えていました。

手術が終わって翌朝、ICUにいる時に右足の異常に気がつきました。膝から先の感覚が全くないのです。つま先を持ち上げることすら出来ません。これは麻酔の失敗に違いない、こんなことで後遺症が残って身体が不自由になるんではガンが治っても何もならない、と担当の外科部長を呼んで来て、これは医療過誤だ、と厳しくクレームをつけました。医者もビックリして直ぐに整形外科の専門医を呼んでくれ、調べてもらった結果、手術中に麻酔が掛かった状態で何かが長時間下肢を圧迫していたために生じた「脾骨毛細神経の狭窄」による痺れが原因で、これは長い間正座をしていた時に起こるシビレと同じ現象だからリハビリで直る、と診断してくれました。これで後遺症が残った人はいない、と聞いて一安心。一般病棟に戻ってから直ぐに電磁波による治療とリハビリ

を開始しました。お腹に大きな傷を抱えての治療は本当に辛かったけれど、これを直さないと言ったのが治ってもまともな身体にはなれない、と思つて頑張りました。治療の開始が早かったのが良かったらしく、回復のスピードは先生方も驚くほどで、暫くしたら、痺れが残っているので少し足は引き摺るけれど何とか歩けるようになりました。今も、ホンの少し痺れは残っていますが、日常生活には全く差し障りないほどに回復しています。

歩けるようになったら占めたもの。手術後二週間目くらいから廊下歩きを始めました。点滴の管は付いているし、手術部位からのドレン・パイプも付けたままでしたが、点滴台のポールを引き摺りながら歩きました。折り返し地点では伸び上がって踵を上げる運動と膝を半分曲げるスクアットを何十回かず。三週間目になると、早朝、エレベーターで屋上に昇つて行つて、屋上を二・三周することにしました。その内に点滴台ポールとおサラバしたので、屋上には階段を使つて登るようになりました。

手術後二ヶ月で退院。帰宅した翌日から散歩を開始しました。最初は駐車場を一回り

するとか、誠に情けない距離しか歩けませんでしたが、段々に距離も伸びて来て、間もなく坂を上って裏山を歩けるようになりました。一カ月半ほどしてから、ゴルフ場にはハビリに行くことを思いつきました。最初はパターを一本持つて行って、パットの練習。転がすボールの数を二個か三個と少ない数にしました。ボールの数が少ないとグリーン上の行ったり来たりの回数が多くなります。平らなグリーンですが、あれで芝生の上を結構歩くので誠に楽しくて気持ちの良いリハビリが出来ます。その内にアプローチのクラブも持つて行って、コッソ・コッソと軽く当てることを始め、間もなくショートアイアンから始まって、長いクラブも恐る恐る振り回すようになりました。記録を振り返って見ると、その頃は朝の山歩きは雨の日を除いて殆ど毎日小一時間、ゴルフ場でのリハビリには週に二回は行っていますから、かなり真面目にリハビリに取り組んでいたことになります。私のリハビリを支えてくれたのはゴルフだった、と言えるのでしょうか。

先生からは、ゴルフは春になるのを待たないで始めても良いですよ、と言われていましたが、流石に怖くて自重していました。退院後二カ月半くらい経って、大分元気にな

つたと判定されたのでしょう。抗がん剤の投与が始まりましたが、それでも別に副作用も出て来ないので、ソロソロ始めてみようかな、と思い、手術後初めてコースに出たのが、退院後四カ月目（手術後半年目）の十二月のことでした。生憎、物凄く寒い日で小雪がちらつき、海からの冷たい風が吹き荒れると言うお天気になり、途中で悪寒がして来て熱が出て震えが止まらなくなり、続けることが出来なくなってリタイアする羽目になりました。二度目が翌平成十八年の一月末のことでしたが、この日はそれほど寒くなく、ワン・ラウンドを無事完走しました。歩くのは大丈夫でしたが、スコアは酷かったです。私のゴルフは元々あまり飛ばないのですが、力がなくなっていて、更に飛ばなくなっている上に、身体のバランスが狂ってしまった感じで、まともに当たってくれず滅茶苦茶で六三・五一なんて酷いものでしたが、とにかく完走したことに満足して帰って来ました。この年（一昨年）はゴルフ自体をリハビリと考え、出来るだけ回数を増やすことにしましたので、年間三三回プレーしました。スコアはやはりシツクリ来ず、いかにもバランスが悪くて一〇〇を切れないことが多くて、年間の平均は久し振りに一〇〇をオー

バーして一〇二・八でした。

昨年（平成十九年）は年頭に、ゴルフを週に一回はやることを目標にしよう、と思ひ定め、年初からピッチを上げました。前半のスコアは一〇〇を行ったり来たりで六月末までの半年間の二六回で平均九九・五でしたが、後半は少しマシになり、半年間で三一回の平均が九五・三で、この年一年間で五七回の平均が九七・〇でした。年間のプレー数五七回と言つのはこれまでの最多記録です。スコアは私の今の実力ではこんなところなのですが、七十歳を過ぎたら黄色のマークから打てるようになり、距離が楽になったので、競技に出ても良いスコアが出ます。暫くの間月例の競技に出てみて、上手く行つたら現在のオフィシャル・ハンディキャップの一九を少しでも上げてもらう努力をしてみようかな、なんて考えながらやっていたら、今年に入ってからハンディ調整で、これが一六・五に改善されました。一九九七年以来のハンディ・アップです。私のハンディは大相模で最初に貰つたのが二八で、間もなく二六になったもののこれが中々上からず、少し余裕が出て来た八七年に二五から二三に上がり、次いで八八年に二二、二二、

二〇と上がったところで八九年にこちらに来ました。ハウステンボス立ち上げの殺人的多忙の時期は、ゴルフなんてやっていられなかったし、その後もハウステンボスのコーヌは意地悪で難しくて中々良いスコアが出なくて、ハンディも上がらなかったのですが、九七年にやっと一九にして貰ったものです。これだけ長年ゴルフをやっていないながら、ようやくハイティーンのハンディなんて恥ずかしいかと思っていたのですが、それがこの年になって、それも病気で一旦は、もうゴルフはやれないかな、と思った後の復活で、若干でもハンディを上げることが出来たこと自体を素直に喜んでいます。

私がコースに出たのは入社間もない頃で、勿論借りクラブでした。自分のクラブを手にしたのが香港駐在中の一九六九年のこと。大相模の会員権を買ったのが七三年のことでしたが、仕事が強烈に忙しかったのと、先のワイフの病気のこともあってゴルフなんてやっている暇がなく、回数は年に数回と言う年が続きました。ロンドンに駐在していた頃は、数だけは沢山やりました。単身赴任で週末はゴルフぐらいしかやるのがなかった所為です。この時にプロにでも付いてもう少し本式に熱心に行っていたら少しは上

手くなったのでしようが、自己流を続けたので回数は多くてもスコアは良くなりませんでした。ロンドン駐在の二年間で八〇回はやっていますが、スコアは一〇〇近辺と言うところ。この辺からスコアカードを整理し、記録を残すことにしました。以来、三二年間の記録が残っています。ロンドンから帰国してからも回数は少なく、月一回を超えるのがやっとでした。スコアは一〇〇を切れるようになり、段々良くなって八六年がベストの九三・六でした。回数が増えたのが八七年と八八年で、八八年には五〇回とそれまでの最多記録になっています。ところが八九年にこちらへ来てしまって、又々酷い世界に入ってしまったのでゴルフどころではなくなって、最初の二・三年は再び年に数回になりました。少し落ち着いた九三年ごろから回数が増えています。その後は何とか年間平均スコア一〇〇以内で来ていました。手術後の一昨年に一〇〇をオーバーしたものの、昨年はスコアもまた一〇〇を切りました。今年も週に一回を目標に励みたいと思っています。

若い頃は、ゴルフなんて運動ではない、なんて言っていました。この年になるとこ

れはやはり立派な運動。スコアは別にしても、緑の大地を歩くのが楽しくて、今は絶好のリハビリになっていると言うことは、私もそんな年になったんだな、と自ら納得しています。そして病気からこうして復活出来たのはゴルフの力に拠るところが大きかったことを実感し、ゴルフをやっている本当に良かったな、と思っています。

(平成二十年三月七日)

ホール・イン・ワン

生れて初めてのホール・イン・ワンを記録しました。

五年前の二〇〇五年六月の胆管癌手術の後、ゴルフの練習を通じてリハビリをやっていたことは以前ご報告しましたが、その後、リハビリが必要でなくなってからも、リハビリのため、と称して週に一回を目標にゴルフの回数を増やして来ました。翌〇六年は流石に週一回のペースは守れず三三回止まりでした。平均スコアも手術の前はハーフ五〇を切っていたのですが、この年は五一・四と久し振りに一〇〇をオーバーする成

績でした。年々そこ此処で徐々にお仲間が増えて、このところは週一回を超える回数になつて来ていて、それに従つてスコアも良くなつて来ています。〇七年が五七回で平均四八・五でしたが、〇八年が六九回で四七・一、〇九年が七四回で四六・三、今年はこれまで四七回プレーして四五・九。回数では勿論最近が一番多くプレーしていますし、スコアもこの年になつて一番良くなつています。

私のゴルフは元々距離が出る方ではなかつたのですが、手術の後は飛距離が更に落ちて、ドライバーで一八〇〜一九〇ヤードしか飛ばず、アイアンで二番手ぐらい距離が落ちています。その代わり、寄せが良くなつたと言つことで、つまりは完全に爺さんゴルフになつてしまつてゐるということでしょう。ですからパー・オンすることは滅多になく、寄せワンでパーを拾うケースが殆どです。JGAのハンディキャップが昨年秋に一三・五に改定されたこともご報告しました。

で、この八月三十日、メンバーになつてゐるチサン・カントリークラブ・森山の三〇人ほどのコンペに参加したのです。この日はさして調子が良い方ではなく、あまり冴え

ない日だな、と思いつつ橘コースの八番にきました。一三〇ヤードなので、以前なら八番ぐらいで打てたのに同伴者に恥ずかしいな、と思いつつ六番を引つ張り出して打ちました。綺麗な弾道で真っ直ぐに飛んでは行つたけれど、少し浅く入ったので、これは届かないな、と思つてボールの行方を見ていたら、グリーンの手前でワンバウンドしたボールがそのままグリーンを転がって、ピンの根本に消えたのが見えました。同伴者の皆も見ていて、「入ったゾー」と大騒ぎしてくれました。皆も、キャディも「入ったのを見たのは初めてだ」などと興奮気味でした。自分ももつと興奮するものかと思つていたのですが、左程の感激もなく、入っちゃったな、と比較的冷静な気持ちで、ピンの根本からボールを拾い上げました。皆から祝福の握手は求められましたが、平常心だったと思います。年を取つて、感激する気持ちが薄れてしまつているのだろうか。

ホール・イン・ワンをすると、精神状態に乱れが来て、次のホールからガタガタになる、と聞いていたので、次のホールで、オーナーでティーショットを打つ時、ここで失敗したら恥だぞ、なんて、若干緊張しながら打つたのですが、これも自分としては普通

のナイスショットで、その後も別にスコアを乱すこともなくプレーを終えました。因みにこの日のスコアは四五・四七で九二と今年のこれまでの平均スコアでした。僥倖のホール・イン・ワンがあったにしては、その分スコアが悪かったと言うことになります。手術後丸五年を過ぎて、八月の定期健診で、毎日続けて来た抗がん剤の投与と月に一度の病院通いから解放された直後のことでした。これまで、自分の人生はあまり憑きのある人生ではないな、と思つて来たのですが、これで憑きのある人生に変わったものと信じてみることにします。

昔は記念植樹なんかをやるのが決まりみたいになっていたようですが、最近ではあまり流行りでないようですので省略しました。逆に、そのホールに海苔屋のスポンサーがついていて、海苔を一年分くれました。海苔一年分、なんてどんな計算でくれるのかな、と思つていましたら、ダンボール三箱分どっさり。我が家の食事のパターンでは十分一年分ありそうです。

ゴルフアー保険に入り、ホール・イン・ワン保険を払い始めてから何年になるのだろ

うか。四〇年ぐらいは払って来ているのではないか、と思います。保険料年額六〇〇〇円として四〇年で二四万円。これで五〇万円の保険金が受取れますので、ようやく回収期が来たと言つことになります。現役の頃だったら、ゴルフにお付き合い戴いたお客さんを始め、大変な物入りになるところでしたが、今や年金生活者の身。気楽にプライベートのゴルフ仲間とのご祝儀、ゴルフやお祝いパーティを楽しんでいます。三ヶ月の間に、一応「ホール・イン・ワン記念」と銘打った領収書さえ提出すれば、何回祝賀会をやっても五〇万円までは保険金で払ってくれるそうですので、回数で稼ぎましょう。一応記念品は作りましたので、長年ご指導頂いた珊瑚の諸兄には十月号に同封してお送りします。余ったら、少しインチキして自分のゴルフ関連グッズも少々増強しようかと思っています。

(平成二十二年九月五日)

グルメ

腕自慢

今日は小生の腕自慢と行こう。残念ながらゴルフではない。柔道でもボウリングでもない。勿論、縫いぐるみでもない。料理である。このところ、ワイフの病気のせいで料理の腕がトミに上がっている。

稽古の方法、まず毎日の朝飯。一週間の内六日は小生がやる。と言っても大したことはない。前日の残り物の利用と冷ご飯をお粥にする程度である。これは味よりもスピードと手順がものを言う。十分ほど早く起きる。トイレに行く前に石油ストーブに火をつけ、ガスにお湯をかける。お湯にはダシの素を放り込んでおく。お腹を軽くして出て来る頃には、部屋も大分暖まり、お湯も煮立っている。そこへ白菜、小松菜、なければネギを切って放り込み冷ご飯を入れる。今度は床上げ、髭剃りなど身支度にかかる。ネクタイに手を掛ける頃には丁度野菜も軟らかくなっている。しらす干しがあれば上等。後は卵を二・三個溶いて混ぜ、味の素と塩で仕上げである。チビ共は早起きだから起きてくれれば食事をさせる。小生は熱いのを一杯、フーフー言って掻き込んで飛び出すと言っ

寸法。材料としては干し魚をホグして入れるのも良い。一番簡単なのは前日の味噌汁を利用する方法。これもただ汁を掛けるだけでなく、少し薄めて一度煮込む方が味が馴染んでよろしい。寒い時、起き抜けて体の活動が不十分な時は軟らかくて温かいお粥は中々良いものである。餅を利用した雑煮も良い。これも起き抜けに餅をストーブの上に乗せ、出汁をガスに掛けておくと出かける頃には用意が出来る。とにかく朝食は手を掛ける順番と計算が肝要である。

土曜日・日曜日はお手伝いの手がないので、三度三度作る。レパートリーも広くなつて来た。チビの間ではパパの料理は大したものである。日曜の朝は味噌汁を作る。最近 は鯉節を削ったり煮干を煮たりする必要がない。ダシの素と称する重宝なものがあるから便利である。大根やワカメの場合は水の時から入れて炊くとか、豆腐は最後に入れるとか、色々あるがコツは味噌加減。当店では白味噌と赤味噌を半々に使う。どちらも強くなり過ぎないように調合し、これを固まりにならぬように漬して溶くのがひと仕事である。出来映えは大体小生好みになるが、子供にはあまり受けが良くない。味噌汁自体

あまり好きでないのか残ることが多く、ガツカリさせられる。

土曜日に早く帰ったときはオヤツ、日曜日は昼食にホットケーキを作る。これはインスタントのパウダーがあるから難しいものではないが、何度かやっている内に判ってくる、やはりコツみたいなものがある。それはパウダーの溶き加減。粉を牛乳で溶くが、あまり軟らかくはない。書いてある分量に拘らず、牛乳を少しずつ入れながら端から溶いて行き、固からず軟らからずに溶き上げる。勿論、名人ともなるとみつもないうダメなどを作ることはない。この固さは刀鍛冶の湯加減ではないが、口で説明できるものではない。あまり混ぜ過ぎぬこと。太い混ぜ棒を大きく使うのも大切なことだ。火加減は弱く弱くピアニッシモで行こう。フライパンに油を引き、十分に温めたら一度濡れた布巾に乗せて冷やす。同時に適当量の材料を流し込む。後は焦げないようにヒックリ返す。投げ上げてヒックリ返すのは子供が見て喜ぶ。箸を刺して焼き上がりを確かめ、バターを塗り、蜂蜜をタップリかけて出来上がり。栄養満点。「パパのホットケーキはオイチナイア」と言つことになる。

夕食用として得意技は数々あれど、シチュー、ボルシチ、ギョーザ、チャンポン等など。ギョーザなんかは我ながら天下一品で、売りに出したら崎陽軒より売れるのではないかと、と思うほど。一寸変わりギョーザらしいのでご披露すると、まずキャベツを茹でて細かく刻む。春雨も茹でて布巾の上で一センチ位に切り水を切っておく。あい引き肉にすったニンニクを入れ、ラードを混ぜ長ネギのみじん切りと一緒に春雨もキャベツも混ぜ合わせる。皮は肉屋で買って来る。僕くらいの名人になると皮の銘柄も指定せねばならない。詰める時は小さなフォークを使いながらキレイに二つ折りにして行く。焼き方である。炒め物は火加減を弱くする方が良いようである。サラダ油を引いたフライパンの上に六・七個ずつ並べ、少し焼く。焦げ目が出来て、表面の色が少し変わったところで水を流し込み、蓋をして蒸し焼きにする。あとラー油としょうゆ（キッコーマン）で食べると何とも言えない。

もう一つ。インスタント食品が流行っているが、最近のは中々良く出来ていて、インスタントと馬鹿に出来ないものがある。手前味噌みただが長崎のみろく屋なるところ

から出しているチャンポンと皿うどんは中々良く出来ている。簡単にしようと思えばそれも良いが、これは金を掛ける方が美味い。豚肉、イカ、貝、さつま揚げ、キャベツ、もやし、玉ねぎなど手当たり次第に調味油で炒める。チャンポンと言うのは何でも混ぜ合わせることの代名詞に使われている程で、具が多いほど美味しいものが出来る。良く炒めたら水溶きした調味パウダーで煮込む。後は麺と一緒にして温めるだけ。簡単なようだが出来上がりは上々で、その辺の店で売っているものより余程本物に近い味がする。家の中が少し落着いたら皆さんをお招きして腕を振るってみたい。手際の良さとスピードはプロの奥様方も一見の価値があると思うよ・・・失礼！

（昭和四十六年三月二十八日）

スパゲティの話

生来、麺類が好きで、今でも毎日の昼食は会社の食堂で、日替わりの定食には目もくれず、決まってざる蕎麦とかけ蕎麦を食べることにしている。これだけ蕎麦を食べてい

るのだから、休日位他のものを食べれば良いのに、蕎麦や素麺を茹でたり、スパゲティを作ったりしている。それでもちっとも飽きないのだから、余程麺類が好きなのだろう。

ロンドンの二年間も、お昼は行きつけのタベルナのスパゲティに決めていたし、休みの日には手軽なこともあつて、大分蕎麦を食べた。インスタント・ラーメンの類も良く食べたが、栄養不足になつては困ると思つたので、ソンジヨそこのインスタント・ラーメンではない。野菜の炒めたのをタップリ入れる。後から加えるものはボンカレー、卵、気が向けばこれに焼いた餅を入れる。全部入れるとカレー・月見・野菜・カラーメーンが出来上がる。これ位だと夕食に一人で食べてもタップリ量があるし、手が掛からない。時間が無い時には良く作つたものである。でも、今はこんなゴテゴテしたものを食べる気はしない。良くあんなものが食べられたものだ、と思うが、当時は手間と栄養を考え、必要に駆られて食べていたのだらう。自分で作つて良く食べたものにチャンポンがあるが、これも長崎から送つて貰つていたみるく屋のインスタントもので、これは今食べても美味しいと思う。

イタリーに良く出掛けたが、イタリー出張の何よりの楽しみはスパゲティだった。朝は別とし、昼も夜も美味しいスパゲティにありつける。やはり本場のスパゲティは違つ。何処へ行つても良く食べたものだ。

イタリーではスパゲティ、マカロニと言つた小麦粉で作つたあの種の食べ物でスパスタと総称するが、パスタで一番大切なのは良い小麦粉と良い水だ、と言う。だから、スパスタの名産地があるし、地方々々でご自慢のパスタがある。又、パスタにも色々種類があつて、太いのから細いの、長い短い、マカロニ程太くなく細いのに穴が開いているの、貝殻みたいなの、花びらみたいなの、これらも地方によつて特色があるとのことだった。

茹で方が違つ。日本のレストランで出して来るのは大抵茹で過ぎ。キツと一度に沢山茹でておいて、出す直前に電子レンジか何かで温めるなんてずばらなことをしているのではないだろうか。芯までクタクタになっているが、本場の茹で方は芯に一寸固いとこるが残る固めの茹で方。この茹で方をアル・デンテと言つ。デンテと言つのは、デンテ

イスト（歯医者）とかダンディライオン（タンポポ）と同義語で歯という意味。パスタの固さが一寸歯に当たる、と言う表現だと聞いた。

ソースがこれまた際限なく種類があると言つても良い位。イタリアでは各家庭が自分の家のソースを持つているというから、日本で言えば、親から子に伝わるおみおつけの味と言つことになるのだろう。だからイタリアではレストランに入ったら、その店の得意のスパゲティを食べるのがコツ。土地によって味付けも香辛料も独特なものがある。何処へ行つてもスパゲティ・ナポリタンでは能がない。ただ一つの例外はトマトのスパゲティ。トマトだけでサツパリ味付けしたスパゲティ・ポモドーロというのが、向こうの人に言わせると、スパゲティはポモドーロに始まつてポモドーロに終わる、と言つ。サツパリしたものが一番飽きが来ないのだ、と言つ。釣りは鮎に始まつて鮎に戻る、と言つがこの辺どこか共通するものがあるのかも知れない。何処へ行つても、ポモドーロを注文する人は、一種の通みたいに思われることもあると言つ。

この辺まで来ると腕自慢をしない訳には行かない。聞いてもらうことにしよう。

まず、パスタの選び方。ソースによってそれに合ったパスタを求めて来るのが理想的なのだが、そこまで凝らなくても良い。でも、何となくイタリア製の輸入物の方が何だか本場の味に近いような気がする。最近はスーパーでも安く手に入る。でも、これは気のせいかも知れない。川口兄に悪いと思つたら、日清製粉のもので良い。

茹で方。これは絶対アル・デンテの固さで止めること。最初は一寸コチンとして抵抗があるかも知れないが、長く食べているとこの方が美味しいこと間違いない。お湯をタツプリ沸かすのが基本。塩を入れ、グラグラ煮立ったところでパスタを入れる。茹でる時間は普通十分程度だが、時々拾い上げて齧ってみるのが一番良い。茹で上がったらずるに取って水で冷やすのが一つのコツ。温かいままだと、自分の熱で煮え続けて茹で過ぎになってしまう。茹で上がったのを直ぐ食べるのが一番良いのだが、若し、少し時間を置くのだったらサラダオイルをタツプリ振りかけ、良くまぶして濡れた布巾でも掛けておくことだ。

ソースもトマトソースみたいに何時間も掛けて煮込んで作るのがあるが、お昼に簡単

に作る積りなら湯を沸かし始めてから掛かる位の方が良い。手軽にアッサリ作れるのを幾つか紹介しよう。

玉ねぎをベースにしたソースは幾つもあるが、基本はバターをタツプリ溶かし玉ねぎを入れたら弱火でユツクリ炒めること。白い玉ねぎが黄金色になる。ここで月桂樹の葉を二・三枚入れ、香りをつけるだけでも結構美味いが、これにハムやベーコンを加えて炒めるのも良いし、椎茸を加えても良い。好みによっては湯剥きにしたトマトを細かく切って入れる。塩と胡椒でアッサリ味を整えることだ。

茄子を輪切りにしてフライパンで炒め、唐辛子を刻んで入れる。勿論、塩と胡椒は忘れてはならない。軟らかくなった茄子を別の鍋に取って、湯剥きしたトマトを加えて更に炒める。茄子とトマトが良く合ったところへ唐辛子がピリツと効いて仲々良い。これはお勧め品。

スパゲティ・ボンゴレ。アサリは剥き身でも良いが、出来れば殻つきの方が良い。ヒタヒタの水で貝を茹でる。貝が開いたら半分くらい身を外す。貝の形の揃ったのは、殻

つきのまま使う。煮汁は捨てないで取っておき、布巾で漉しておくのが良い。別に例の玉ねぎのバター炒めを作っておいて貝を合わせる。煮汁を加えると貝の風味が出る。バジルの葉の粉を加えれば理想的。

いくらをバラバラにほぐし、サラダオイルで綺麗に溶く。紫蘇の葉を細かく刻んで混ぜ合わせる。これだけでサツパリしたソースが出来上がる。これは夏向き。

工夫すると幾らも組み合わせが出来る。これならイタリアの各家庭に特製ソースが出来ても不思議ではない。

スパゲティとソースの合わせ方。とにかく大きな鍋にバターをタップリ引いておいて、ザルに取っておいたパスタを入れて和える。玉ねぎとか、いくらと紫蘇の葉のソースの場合は、この時一緒に和えても良いが、パスタはパスタで皿に盛っておいて、上からソースをかけるのも綺麗で良い。一緒に食べられない人の分は、パスタを別にしておいて食べる直前に和えること。ソースをかけておいて、そのまま電子レンジで温めるなんて最低。

と言うことで、休日の昼は自分でスパゲティを作る。毎昼スパゲティでも良いと思うが、子供達は若干食傷気味みたい。馬鹿の一つ覚えみたいで軽蔑されそうなので、少し遠慮している。先日、父の日にプレゼントをくれた。開けてみたらプレイボーイのウサギのデザインの可愛いエプロンだった。カードに曰く「スパゲティばかり茹でないで他のものにも挑戦して下さい」とのこと。どうやらスパゲティは父害になりつつあるみたい。

(昭和五十四年十二月十五日)

料理プロフェッショナル

我が家の主婦は今や娘の美貴です。料理の本を沢山置いておいて、献立を探し出すと材料をメモし、達直が買い物に行つて美貴が作る、と言うパターンのようです。仲々凝つたものを作っているようで、私は夕食を家で採ることが殆どないのですが、残り物を翌朝食べるのが楽しみになる程です。ホワイトソースを使ったグラタンの類のものとか、フランス料理系のコツテリしたソースとか、どうやら綺麗っぽいものが好みみたいで、

これは半分楽しみの部分もあるようです。

勉強が忙しくなったりすると、もっぱらスパゲティになるようで、これは二人とも作ります。茹で方は父親じこみのアル・デンテ。少し固目に茹でることを知っているのです、そこら辺のレストランのグニャグニャとは少々違う美味しいを作ります。ソースのレパートリーも大分増えているようです。ボンゴレ、アラビアータ、茄子とひき肉なんてオーソドックスなものは勿論のこと、大根おろしに鮭缶、と言ったサツパリしたものもあります。納豆入りなんて洒落たものも作ります。と言うことで、以前のように休日に私がスパゲティを作ると年中スパゲティになってしまうので、私が作る回数は減りました。娘が試験だったりすると息子の出番になります、得意技は薩摩汁。ごぼうの笹掻きを器用に作って美味しいを作ります。簡単なのが親子どんぶりの類の卵入りどんぶりもの。どんぶりもの用の柄のついた鍋があるので、極く気軽に作っているようです。仲々要領が良くて感心します。

以前は週末になると、三人でギョーザを沢山作って冷凍庫に入れておいて、ギョーザ

ばかり食べさせていましたが、最近では役者も増えたので左程不自由はしていないようです。どうにも気が向かないときは、蕎麦とか寿司とかの出前を取っています。まともに食べられるのなら金目よりも栄養だ、と言ってはいるのですが、何を食べているのやら。感心するのは夕食をケンタッキー・フライドチキンなんかで済ませて平気なこと。私なんか、あんなものとかマクドナルドなんかを夕食にするのには抵抗があり、自分らとても耐えられない、と思っし、昼食ならイザ知らず、夕食にあんなものを食べるなんて可哀想、と思いますが、連中は平気の平左。却ってご馳走と思っている節さえあります。考えてみればざる蕎麦なんかよりも余程栄養があるのですから、この方が良いでしょう。抵抗がある、なんて言っつのは年齢と感覚が言わせているのでしょう。

で、私が腕を振るうのは休日と言っつことになります。休日は原則として子供達には何もさせず、私がやることにしています。料理のレパートリーも大分広くはなりませんが、このところ固定化、停滞気味です。相変わらず、私の特徴は早いこと。ユックリ料理作りを楽しむと言っつ心境にはなれません。台所にいる時間を出来るだけ短くしようとします

から、我ながら要領が良いと思います。買い物に行くときと帰りの車の中で手順を考えながら戻って来て、時間の掛かるものから手を付けます。大抵、何でも三〇分ぐらいで仕上がるように心掛けています。幾つものことを同時にやるのが好き。タイミングを考えながらやればずいぶん分色んなことが同時にやれるものです。

ロンドンでは熱源が四つあったので、客を招んだ時なんか、火を四つ使って料理するなんてこともやりましたが、今はガス台が二つなので物足りない位。仕事なら幾十もの案件を同時に動かしているのですから、四つの火を同時に動かす位ヘツチャラと言っただけです。

それと後片付け。これはマメにやること。使ったものをドンドン洗いながら作業しますから、出来上がったときは流しはサッパリと綺麗です。これは自慢が出来そう。と言うのも、後で一人で山になった汚れ物を洗うのが厭なのでやっている訳ですから、本当にマメなのかどうか判りませんが、とにかく台所にいる間は一瞬たりとも休む時間なく手を動かすことにしています。台所では料理の他にも、洗濯、ゴミの始末、食器・鍋洗

いなど、やることはあるものです。

では、腕前の数々を。

何時だったかゴルフの賞品に筍を丸のまま二本貰いました。昔、何だか米の磨ぎ汁で灰汁抜きをすると言うことを聞いたうる覚えがあつたので、磨ぎ汁を捨てる前に伯母に電話で要領を確かめ、灰汁抜きをした後、下半分は牛肉・しらたきと煮、上の柔らかい部分は若竹の吸い物といずれも上手く行って、これには子供達も感心してくれました。出来上がりのイメージが分かっていると、何とか出来るものです。本を見ても、出来上がりの製品を食べた記憶がないとピンと来ず、作るのも億劫になります。

最近、少々プロじみて来たな、と思うのは、冷蔵庫の中身を見て料理のイメージが浮かぶこと。偶々家で食べることになって帰って来て、子供達が店屋物なんかで済ませたしまつて何も無い時、ネクタイを外しながら冷蔵庫の中、野菜庫や缶詰のストックを見て方針を決め、やおら開始する手際の良さは仲々大したものですよ。スパゲティとか麺類になることが多いけれど、有り合わせでまともな食事が用意できるというのは、一

応プロの端くれに入れて貰えるのではないでしょうか。如何でしょうか、奥さま方。

休日の朝、良くやるのは野菜スープ。有り合わせの野菜を片っ端から刻んでバターでサツと炒め、水を加えてスープの素を放り込み、塩と胡椒で仕上げれば出来上がり。ベークコンのかけらでもあれば言うことありません。スパゲティを小さく折って入れても良いでしょう。これで温かいパンのおかずになります。

インスタント・ラーメンでもただお湯だけで作るのではなく、中華鍋で白菜でもネギでももやしでもザクザク切って油炒めし、後は定量の水を加えて煮立たせ、ラーメンの玉を入れ、作り方に従って作れば立派な野菜ラーメンの出来上がり。栄養もタップリだし、第一、インスタント食品特有のミジメったらしさがなくなります。

時々利用するのが新聞に出ている献立。毎日、献立のコラムに目を通すのが癖になっています。時間が掛かりそうなのは最初から捨てて、手早く出来そうなのを切り抜いておきます。それでも書いてある通りにやるのはプロとしてのプライドが許さないので、自分のイメージに合わせて、どこか一つ・二つ変えてオリジナリティを出すことにして

います。この辺がプロの心意気と言うものでしょう。

魚は面倒なのであまりやりませんが、年に一度、暮に頂戴する鮭の解体はもう何年もやっています。弘法は包丁も選ばないそうですから、名人はステンレスの包丁一本のみを使って、三十分もあれば綺麗に解体してしまいます。肉の一番厚い部分は、薄切りにしてスモークサーモンみたいにスライス・オニオンとレモンで食べるか、凍らせてルイベ風にわさび醤油でやるか。胴の一部は輪切りにして酒に漬けておけば、保存が利いて何時でも焼いて美味しく戴けます。尻尾に近いところは削ぎ切りにして、玉ねぎとレモン・スライスと一緒にサラダオイルに漬けておけば、これまた保存食。頭・皮・骨は叩き切っておいて鍋にしますから、食べられないのは尾びれの先の部分だけ。頭で作る氷頭、皮で作るおつまみを研究したいと思いますが、まだ実現しません。

カレーも良く作ります。時間節約がモットーですから、スパイスから凝るのではなくルーを使いますが、私ぐらいのプロになると一種類のルーでは物足りなくて、最近では「ザ・カレー」に「ゴールデン・カレー」を二欠片ばかり入れることにしています。

普通のチキン、ビーフ、ポークカレーも作りますが、好評なのはオリジナル・アイデア。玉ねぎと人参を細かく刻んでバターで良く炒めた後、煮込んでからルーを入れてペーストを作つて置きます。じゃが芋は煮崩れがするので、後で入れる方が良いでしょう。牛肉、これはステーキ用の肉を使います。一寸気障ですが、最近では外地に出張するとアラスカとかアメリカ西岸の空港で必ず牛肉を買つて来ることにしています。安くて大きな肉が買えます。冷蔵庫に入れておくとずいぶん長いこと使えるものです。これを大きめに切つてタツプリのんにくで一口ステーキを作るのです。半焼け位のところでペーストの中に入れ、少し煮込んでご飯と一緒に皿に盛ると仲々豪華なカレーが出来上がります。ナイフとフォークを使いますから、こうなるとカレーだなんて馬鹿には出来ません。

勿論、失敗もあります。この正月、家にいることにしたので、年末に休みの間の材料を仕込むことにしました。お節料理は真似事のみ。冷凍食品とか出来合いでお重二つ位にしたのですが、どうせ餅には飽きるから、と二日目は鍋、三日目はカレーにしよう、なんて夫々に材料を仕入れたまでは仲々立派だったのです。ところが鍋物にしよう、と

買った豆腐と糸こんにやくを冷蔵庫に入れたのが敗因。さて、今夜は鍋だ、と取り出したら、豆腐はパサパサ、糸こんにやくは幾ら煮てもゴムひもみたいなのです。考えてみれば豆腐は高野豆腐のなりかけですから、鍋に入れても美味しくも何ともありません。全く味気のない鍋の夕食になったことでした。

こんなこと書いているとキリがありません。この辺にすることにしましょう。

(昭和五十九年四月十五日)

蕎麦の話

若い頃から麺類が好きで、うどん、素麺、蕎麦、ラーメン、チャンポンからスパゲティに至るまで、長いものは何でも好きです。でも、その中で何を取るか、と言われれば、何と言っても蕎麦。

戦後、長崎で育った訳ですが、戦後直ぐの頃の長崎には所謂蕎麦屋がありませんでした。そう言えば、同じ北国の食べ物の納豆もなかったのだと思います。納豆は戦災に遭

う前、東京では戦時中でも、朝、納豆売りが「ナット・ナットー、ナットツ」と言う売り声と共に売りに来て、朝食の定番みたいにしていましたから、戦災後疎開した先の大村で、納豆のない生活は淋しかったのですが、父が出張で東京に出て行くと、必ず納豆を買って来たものです。ボストンバッグの柄のところに納豆の藁苞（わらずと）を一杯ぶら下げて帰って来たものでした。蕎麦との出会いを作ってくれたのもやはり父なのです。長崎にも思案橋の奥、丸山の入り口にやっと一軒蕎麦屋が出来て、初めてざる蕎麦なるものを食べたのがここで、父と一緒にしました。その後、お墓参りの手伝いに行くと、ご褒美と言うことだったのでしょいか、父の場合はここ明月庵の蕎麦、祖母の場合はニューヨーク堂と言う洋菓子屋で、当時珍しかったシュークリームかアイスクリームをこ馳走してくれるのが決まりみたいになっていました。蕎麦も最初の頃は、黒くてモソモソしていて、あまり美味しいとは思えず、父に「美味いか」と聞かれて、「お腹一杯の時に食べるものとは思えない」なんて、生意気なことを言っただのを覚えています。

本当に好きになったのは、東京に出てからなのでしょいか。大学受験に出て来て、一緒に

に上京した仲間と新宿で飲んだことがあります。散々飲み食いした後、新宿から四谷辺りをブラブラして、蕎麦を食おう、と言うことになりました。皆でざる蕎麦を頼んだのですが、出て来た山盛りの蕎麦を見て「こんなに沢山食えないよ」と悲鳴を上げたのがいました。当時の長崎育ちの学生は、ざる蕎麦なんて初めて見る食べ物だったので。言わば上げ底になっているのを知らず、桶に一杯蕎麦が詰まっていると思ったのです。汁を上から掛けてしまって、テーブルをビショビショにする、なんて落語に出て来るような失敗をしていました。東京に出るからは一寸した腹っ塞ぎには蕎麦でしたから、ずい分食べたし、食べ始めると暫く食べないと淋しくなる、といった一種の中毒症状になって良く食べました。会社に入ってから、社員食堂での昼食は必ずと言って良いほど蕎麦でした。定食が毎日変わるのですが、選ぶのが面倒臭い、とか、カロリーを摂り過ぎないように、とか言う理由にして、毎日用意されている蕎麦を食べていました。でも、毎日食べても飽きなかったのは、やはり余程蕎麦好きになっていたものと思われる。私の蕎麦好きは周囲の皆にも良く知られていて、私と一緒に食堂に降りて行くと、

上の人も下の人も、蕎麦に付き合わされることになっていました。外国出張をして少し長くなると、出張先でも日本料理屋で蕎麦を食べるのですが、どうしても日本のものは違つので、長い出張になると、特に美味いとは思えない会社の地下食堂の蕎麦が恋しくなるのが常でした。欧米人は、あのスルスルツと嚼り込む音を一番行儀の悪いこととして極端に嫌つので、外国では日本料理屋に入つても、どこか遠慮しながら食べている、と言つ面もあつて、自由に音を立てて食べられる日本の蕎麦屋が恋しくなつたのかも知れません。

その内に、社員食堂の蕎麦は別として、蕎麦を食べるならこの店の蕎麦、と言つことになつて来ました。一番気に入つていたのが、上野池之端の「藪」。切つ掛けは不思議なことにこれもお墓参りなのです。近くの湯島天神の裏に本家の墓があつて、墓参りと言つと浄土真宗のこの寺でした。父と一緒に行くことが多かったのですが、墓参りの後で、ざる蕎麦に夏なら冷酒、冬なら熱燗を一杯やると言つのがお決まりのコースでした。最初の頃は、同じ池之端の「蓮玉庵」と言つ蕎麦屋でした。この店は文久三年の創業と

言いますから、一三〇年も前からある有名な蕎麦屋なのですが、出汁が少し甘いので、ここは止しにして、少し歩くのですが、近くの「藪」が行き付けの蕎麦屋になりました。父が亡くなつてからもお墓参りの後は「藪」に行かないと落ち着かない、と言つことになりました。と言つより「藪」が楽しみで墓参りに行く、なんて面もあつたかも知れません。子供達もずい分付き合わされたものです。

ロンドンでの単身赴任の間も、乾麺を沢山送つて貰つて、良く自分で茹でました。料理名人の「ロンドン長島亭」では、チャンポンと蕎麦が得意技で、お客はずい分付き合わされたものでした。人を招んで、前菜でシコタマ飲んだ後、大きなステーキを焼いて食べさせた後のメインディッシュがざる蕎麦だったりして。下手な日本料理屋へ行くよりも、自分で好みの味に出し汁を作り、好きな固さに茹でた蕎麦を食べる方がズツと良いと思つていました。それでも長いロンドンでの生活の後では「藪」が恋しくて、帰つて直ぐに池之端へ行つたと思います。こちらへ来て、オランダに半年以上出張した時も、帰国の朝、成田に着いてから、まず東京駅のサウナに直行し、マッサージで身体をほぐ

した後、そのまま池之端の「藪」へ行つて、日本の味に浸つたことでした。

本当に蕎麦の好きな人は、蕎麦粉の多いと言つるか蕎麦粉だけで作つた黒くてボソボソのものを好むようです。先般、野口兄が信州で食べたと言つ、九一蕎麦とか十善蕎麦とか言われるものがこれですが、私の場合は、江戸前と言いますか、適当に小麦粉などのつなぎの入つたものの方が好きです。味もさることながら、あの感触がたまらない。綺麗に盛り付けられた「ざる」の天辺の部分から、盛り付けを乱さぬように気をつけて、一箸に一口分だけ掬い上げます。手繰ると言つ表現を使う人もいますね。辛目の出汁に三分の一かせいぜい半分ぐらい浸けて、一口で啜り込む、この喉越しの感触がたまらないのです。ですから「藪」では海苔のかかった「ざる」は注文しません。「藪」では「せいろ」と呼んでいますが、所謂「もり蕎麦」を頼みます。海苔なんかに大事な感触の邪魔をされたくない、と言つ気持ちです。

九州に来て、蕎麦屋と見ると入つて試してみています、長崎にも佐世保にも博多にも、気に入つた蕎麦屋は発見出来ていません。基本的に出汁が甘いのです。甘くて薄い。

関西もそうです。蕎麦をドゥプリ浸けないと食べられないのですが、蕎麦の出汁はドライであって欲しいと思うのです。ドライで濃い目のキリツとした感じの出汁に、固めに茹でた蕎麦をちょっと浸けて啜り込む。独特の蕎麦の味と喉越しの感触を楽しみ、口中に残る出汁の切れ味を楽しみたいのです。そこに辛口の酒を一口、なんて考えるだけでもたまりませんね。「藪」系の出汁は昆布は使わず、鰹節だけで取り、昔から濃い目でドライなのだそうです。これが更科系になると甘く感じられます。最近、砂場系の蕎麦屋に行かないので分かりませんが、砂場は関西系の蕎麦屋ですから、やはり薄口で甘かったですように記憶します。

ですから東京に出張すると、出来るだけ一日は昼の時間を自由にして貰って、一人で地下鉄に乗って湯島まで行き、池之端に出て「藪」に行きます。せいろ二枚に酒一本(午後の予定がなければ、お代わりをもう一本)と言うのが、何時もの私のコースになっています。注文すると待つ間もなく、小さなお盆にお銚子と蕎麦味噌が出て来ます。味噌を舐めながら、盃に二杯も飲まない内に一枚目のせいろが出て来ます。ここのせいろは

浅い竹のざるを逆さにしたような丸い器です。出汁は徳利に出て来ますが、ホンのチョッピリしか入っていません。これを猪口に空けて左手に持つ。整然と美しく盛られた蕎麦を乱さないように、纏れないように一箸掬い上げる。垂れた蕎麦の先を三分の一ぐらい出汁に浸けて、サラサラと吸い込んで辛口の酒をチビリと飲む。サラサラ・チビリ、サラサラ・チビリと飲つて、一枚目が終わる頃、タイミングを見計らつたように、お代わりの二枚目が出て来る。この辺の「間」も良いのでしょうか。二枚目を終ると出汁はホンの少ししか残っていませんが、熱い蕎麦湯で割つて一口。良い蕎麦屋ではお茶は出しません。お茶なんかで、蕎麦の後味と言つか、余韻を消されてなるものか、と言つことではないでしょうか。これで暖簾を潜つてから出て来るまで十五分掛かるか掛からないくらい。これだけの為に態々池之端まで出かけるなんて一種の贅沢とも言えるのでしょうか、安い贅沢もあつたものです。

時間が出来たら、全国の蕎麦を食べて歩く蕎麦行脚みたいなものが出来ると良いな、と思つています。

(平成八年六月一日)

（補遺第一卷了）